

菖蒲池古墳

橿原市埋蔵文化財調査報告 第10冊

菖蒲池古墳

2015年1月

奈良県橿原市教育委員会

2015年1月

奈良県橿原市教育委員会

序

「菖蒲池古墳」発掘調査報告書を『橿原市埋蔵文化財調査報告 第10冊』として刊行します。

本書は2009年度より2012年度までの4年にわたり実施した菖蒲池古墳の範囲確認調査成果をまとめたものです。

菖蒲池古墳は、本市の南部に所在する古墳で、明日香村との市境に位置しています。2基の美しい家形石棺が納められた古墳として有名な古墳で、昭和2年には国史跡に石室部分が指定され、平成19年には「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」の構成資産の1つとして世界遺産暫定一覧表記載資産候補にも記載されています。

このように重要な古墳でありながら、菖蒲池古墳は造られた時期はおろか、古墳の形や規模すらわからない古墳でした。

しかし、本市教育委員会が実施した発掘調査によって、古墳の形状や規模ばかりでなく、造り方の一部が明らかとなりました。さらに古墳の周辺でも石敷遺構などの遺構が確認された他、地震による墳丘の崩壊が確認されるなど、菖蒲池古墳の全容を解明するための多くの手掛かりを得ることができました。

これらの調査成果が広く活用され、地域史や様々な研究にとどまらず、地域教育や学校教育など様々な場面で役立てていただけることを願ってやみません。

最後になりましたが、現地の発掘調査の実施や本報告書の刊行にあたって御協力いただいた関係諸氏ならび諸機関に厚く御礼申し上げます。

平成27年1月31日

橿原市教育委員会
教育長 吉本重男

例 言

- 1 本書は、奈良県橿原市菖蒲町に所在する菖蒲池古墳（しょうふいけこふん）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、平成 21（2009）年度より平成 24（2012）年度までの 4 年にわたり実施した。調査は範囲確認調査として、奈良県教育委員会の指導の下で、橿原市教育委員会が実施した。
- 3 各発掘調査の調査期間は以下の通りである。報告書作成は平成 26 年度を充てた。
平成 21（2009）年度：2009 - 12 次調査 平成 22（2010）年 1 月 13 日～同年 2 月 26 日
平成 22（2010）年度：2010 - 4 次調査 平成 22（2010）年 10 月 12 日～同年 12 月 15 日
平成 23（2011）年度：2011 - 3 次調査 平成 23（2011）年 7 月 4 日～同年 10 月 7 日
平成 24（2012）年度：2012 - 4 次調査 平成 24（2012）年 12 月 11 日～
平成 25（2013）年 3 月 15 日
- 4 現地調査及び整理事業は、全て国庫補助事業によって実施した。
- 5 現地調査及び整理の実施にあたり、地元各位をはじめ様々な方々の御指導、御協力を賜った。感謝申しあげたい。なお個人名は紙面の都合もあり、省略させていただきます。
- 6 発掘調査番号は調査年度（西暦）の後ろに、その年度内に実施した調査回数をつけて、調査年度 - 調査回数 の形で表記している。また調査区番号は、通し番号とした。
- 7 出土遺物をはじめ各種図面、写真などの調査記録一式は、橿原市教育委員会で保管している。
- 8 出土石材については、奥田尚氏に確認、助言をいただいた。
- 9 地震痕跡については産業技術研究所の寒川旭氏に現地で確認、助言をいただいた。
- 10 本書所収の写真のうち、現地調査写真は調査担当者が撮影した。遺物写真はアートフォト右文佐藤右文氏が撮影を行った。
- 11 本書の編集及び執筆は第 IV 章 5 節 1・2 を石坂、その他は松井が担当した。

凡 例

- 1 本書で示す方位は全て座標北である。座標は世界測地系による平面直角座標第 VI 系に基づく。
- 2 図中の標高は東京湾平均海面（T.P.）からの値である。
- 3 土層の色調は、『新版標準土色帖 30 版』（小山正忠・竹原秀雄編著、日本色研事業株式会社発行）を基準としている。
- 3 断面図中のトーンは地山を表している。
- 4 遺構番号は基本的には調査時に付与した番号を使用している。
- 5 遺物実測図に付した遺物番号は、写真図版に付した遺物番号と共通している。
- 6 遺物実測図は、須恵器を断面黒塗り、その他の遺物は断面白抜きとしている。
- 7 遺構図及び遺物実測図の縮尺は、各図に記している。
- 8 写真図版の縮尺は任意である。

目 次

第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 各調査の目的と範囲	2
第Ⅱ章 位置と環境	11
第1節 地理的環境	11
第2節 歴史的環境	12
第Ⅲ章 研究史	15
第Ⅳ章 発掘調査の成果	16
第1節 1区（古墳東辺）	16
1 基本土層	16
2 検出遺構	19
(1) 上層遺構	19
(2) 下層遺構	19
① 墳丘外表	19
② 掘削	20
③ 落ち込み	21
④ 柱穴	21
3 出土遺物	21
第2節 2区（古墳北辺）	23
1 基本土層	23
2 検出遺構	24
(1) 上層遺構	24
(2) 下層遺構	24
① 墳丘外表	24
② 掘削	27
3 出土遺物	27
第3節 3区（古墳西辺）	29
1 基本土層	29
2 検出遺構	30
(1) 上層遺構	30
(2) 下層遺構	30
3 出土遺物	30

第4節 4区(古墳南辺)	31
1 基本土層	31
2 検出遺構	31
(1) 上層遺構	31
(2) 下層遺構	31
① 墳丘	33
② 古墳前庭	33
3 出土遺物	33
第5節 5区(古墳南西隅)	34
1 基本土層	34
2 検出遺構	39
(1) 上層遺構	39
(2) 中層遺構	41
(3) 下層遺構	43
① 墳丘	43
② 墳丘盛土	44
③ 古墳前庭及び西辺掘削底面	44
④ 掘削	45
3 出土遺物	45
第6節 6区(古墳東辺)	48
1 基本土層	48
2 検出遺構	50
(1) 上層遺構	50
(2) 下層遺構	50
① 墳丘外表	50
3 出土遺物	50
第7節 7区(古墳南東隅)	50
1 基本土層	53
2 検出遺構	56
(1) 上層遺構	56
(2) 下層遺構	57
① 墳丘外表	57
② 掘削	57
3 出土遺物	58
第8節 8区(古墳東辺)	59
1 基本土層	59
2 検出遺構	59
3 出土遺物	59

第9節 9区(墳丘東側(墳丘外))	61
1 基本土層	61
2 検出遺構	64
(1) 下層遺構	65
① 掘立柱建物	65
② 盛土	67
③ 石敷	68
3 出土遺物	68
第10節 10区(古墳北東隅)	69
1 基本土層	69
2 検出遺構	69
(1) 上層遺構	71
(2) 下層遺構	71
① 墳丘外表	71
② 掘削	71
③ 掘立柱建物	74
3 出土遺物	75
第11節 石室測量	78
第V章 総括	81
第1節 墳丘規模・形状	81
第2節 築造方法	82
第3節 墳丘と石室の位置関係	85
第4節 古墳及び周辺遺構の時期	85
第5節 古墳の周辺	88
第6節 まとめ	88

挿 図 目 次

図1 菖蒲池古墳位置図	10
図2 菖蒲池古墳と周辺の地形 (S = 1/8,000)	11
図3 調査地と周辺の遺跡 (S = 1/12,500)	13
図4 菖蒲池古墳における初期の記録	14
図5 菖蒲池古墳の地形と調査区位置 (S = 1/1,000)	15
図6 1区位置図	16
図7 1区北壁土層図 (S = 1/50)	17・18
図8 1区平面図 (上層遺構を除く。S = 1/100)	20
図9 墳丘立面図 (S = 1/50)	20

图10 1区出土遺物	22
(1~13 : S = 1/4、14~18 : S = 1/6)		
图11 2区位置図	23
图12 2区平面図(上層遺構を除く。S = 1/100)	24
图13 2区西壁土層図(S = 1/50)	25・26
图14 2区出土遺物(S = 1/4)	28
图15 3区位置図	29
图16 3区北壁土層図(S = 1/50)	29
图17 3区平面図(S = 1/100)	30
图18 4区位置図	31
图19 4区東壁土層図(S = 1/50)	32
图20 4区平面図(S = 1/100)	33
图21 4区出土遺物(32~35 : S = 1/4、36 : S = 1/6)	33
图22 5区位置図	34
图23 5区土層図位置図(S = 1/100)	35
图24 5区南壁土層図(S = 1/50)	36
图25 5区北壁土層図(S = 1/50)	37
图26 5区中央大畦南面土層図(S = 1/50)	38
图27 5区南北畦西面土層図(S = 1/50)	39
图28 5区上層遺構平面図(S = 1/100)	40
图29 5区墳丘西辺東西畦南面土層図(S = 1/50)	40
图30 5区西壁土層図(S = 1/50)	41
图31 4・5区中層遺構平面図(S = 1/100)	42
图32 5区石組溝(0505SD)土層図(S = 1/50)	42
图33 4・5区下層遺構平面図(S = 1/100)	43
图34 5区出土遺物①(S = 1/4)	46
图35 5区出土遺物②(S = 1/6)	47
图36 6区位置図	48
图37 6区土層図(S = 1/50)	49
图38 6区平面図(S = 1/100)	50
图39 7区位置図	50
图40 7区北壁土層図(S = 1/50)	51・52
图41 7区西壁土層図(S = 1/50)	54
图42 7区中央南北畦土層図(S = 1/50)	55
图43 7区平面図(素掘溝を除く。S = 1/100)	56
图44 7区墳丘裾基底石立面図(S = 1/50)	57
图45 7区版築突き棒痕跡平・断面図(S = 1/40)	57
图46 7区出土遺物	58

(73～77 : S = 1/4、78～80 : S = 1/6)

図 47 8区位置図	59
図 48 8区平面図 (S = 1/100)	59
図 49 8区土層図 (S = 1/50)	60
図 50 9区位置図	61
図 51 9区土層図位置図 (S = 1/100)	61
図 52 9区北壁土層図 (S = 1/50)	62
図 53 9区北壁断ち割り部土層図 (S = 1/50)	63
図 54 9区土層図 (調査区壁、部分。S = 1/50)	64
図 55 9区土層図 (部分。S = 1/50)	65
図 56 9区柱穴 (0104SP) 土層図 (S = 1/50)	65
図 57 9区遺構配置図 (S = 1/100)	66
図 58 9区掘立柱建物 (0907SB) 平面図 (S = 1/200)	66
図 59 9区石敷 (0904SX) 平面図 (S = 1/50)	67
図 60 9区出土遺物 (S = 1/4)	68
図 61 10区位置図	69
図 62 10区南壁土層図 (S = 1/50)	70
図 63 10区西壁土層図 (S = 1/50)	72
図 64 10区墳丘北東隅掘削表面の土囊状ブロック立面図 (S = 1/40)	73
図 65 10区平面図 (S = 1/100)	74
図 66 墳丘東辺立面図 (S = 1/50)	74
図 67 墳丘北辺立面図 (S = 1/50)	74
図 68 10区柱穴 (1002SP) 土層図 (S = 1/50)	75
図 69 10区出土遺物①	76
(95 : S = 1/1、98・99 : S = 1/6、それ以外は S = 1/4)		
図 70 10区出土遺物② (S = 1/6)	77
図 71 石室実測図 (S = 1/80)	79
図 72 石室断面図 (S = 1/80)	80
図 73 菖蒲池古墳墳丘復原図 (S = 1/400)	81
図 74 墳丘断面図 (数値は標高値。○は推定値。S = 1/500)	84
図 75 遺構出土土器の一部 (S = 1/4)	86
図 76 古墳墳丘と掘立柱建物 (0907SB) の位置関係 (S = 1/500)	87
図 77 復原した墓域と現地形 (S = 1/800)	90

図 版 目 次

図版 1 (上)	菖蒲池古墳遠景 (南西から)
図版 1 (下)	石室残存状況 (西から)
図版 2 (上)	石室内の家形石棺 (南から)
図版 2 (下)	背面カットとされていた地形 (西から)
図版 3 (上)	1区 上層遺構 (素掘溝) 完掘状況 (西から)
図版 3 (下)	1区 下層遺構検出状況 (東から)
図版 4 (上)	1区 上段墳丘検出状況 (平坦面は未完掘。南東から)
図版 4 (下)	1区 上段墳丘裾基底石検出状況 (東から)
図版 5 (上)	1区 上段墳丘裾平坦面と基底石検出状況 (東から)
図版 5 (下)	1区 上段墳丘と北壁土層 (南東から)
図版 6 (上)	1区 墳丘及び掘割の残存状況 (掘割底面は未検出。南東から)
図版 6 (下)	1区 掘立柱建物 (0907SB) と墳丘の位置関係 (東から)
図版 7 (上)	2区 上段墳丘裾平坦面及び基底石検出状況 (北西から)
図版 7 (下)	2区 上段墳丘裾平坦面及び基底石検出状況 (北から)
図版 8 (上)	2区 墳丘及び掘割の残存状況 (掘割底面は未検出。北から)
図版 8 (下)	2区 上段墳丘裾の残存状況 (北西から)
図版 9 (上)	3区 完掘状況 (下層遺構は検出のみ。東から)
図版 9 (下)	4区 墳丘裾とその南側の整地 (南から)
図版 10	4区 墳丘裾と石室 (南西から)
図版 11 (上)	5区 調査前風景 (南西から)
図版 11 (下)	5区 上層遺構検出状況 (西から)
図版 12 (上)	5区 石組溝 (0505SD) 検出状況 (北から)
図版 12 (下)	5区 石組溝 (0505SD) 完掘状況 (北から)
図版 13 (上)	5区 上層遺構完掘状況 (南西から)
図版 13 (下)	5区 上層遺構完掘状況 (南東から)
図版 14	5区 墳丘南西隅完掘状況 (北東から)
図版 15	5区 墳丘南西隅完掘状況 (南西から)
図版 16 (上)	5区 墳丘南西隅完掘状況 (南東から)
図版 16 (下)	5区 墳丘南西隅の残存状況 (南から)
図版 17 (上)	5区 墳丘南西隅基底石と礎敷 (南西から)
図版 17 (下)	5区 墳丘南西隅の地滑り痕跡 (南東から)
図版 18 (上)	5区 墳丘南西隅の地滑り痕跡 (北西から)
図版 18 (下)	5区 北壁に残る地滑り痕跡 (南から)
図版 19 (上)	5区 西壁に残る地滑り痕跡 (北東から)

図版 19 (下)	・ ・ ・ ・ ・	6区	上段墳丘検出状況(北東から)
図版 20 (上)	・ ・ ・ ・ ・	6区	上段墳丘検出状況(北から)
図版 20 (下)	・ ・ ・ ・ ・	6区	上段墳丘裾基底石検出状況(東から)
図版 21 (上)	・ ・ ・ ・ ・	7区	調査前風景(東から)
図版 21 (下)	・ ・ ・ ・ ・	7区	上層遺構完掘状況(南東から)
図版 22 (上)	・ ・ ・ ・ ・	7区	墳丘東辺の掘削検出状況(南から)
図版 22 (下)	・ ・ ・ ・ ・	7区	墳丘及び掘削完掘状況(南東から)
図版 23 (上)	・ ・ ・ ・ ・	7区	墳丘東辺の掘削(南から)
図版 23 (下)	・ ・ ・ ・ ・	7区	掘削内の南北土層(東から)
図版 24 (上)	・ ・ ・ ・ ・	7区	掘削底面の礫敷と墳丘裾基底石(北から)
図版 24 (下)	・ ・ ・ ・ ・	7区	掘削底面の礫敷(部分。南から)
図版 25 (上)	・ ・ ・ ・ ・	7区	墳丘南東隅残存状況(南東から)
図版 25 (下)	・ ・ ・ ・ ・	7区	墳丘南東隅残存状況(南から)
図版 26 (上)	・ ・ ・ ・ ・	7区	墳丘裾基底石と掘削底面の礫敷(東上方から)
図版 26 (下)	・ ・ ・ ・ ・	7区	北壁にみる墳丘裾埋没過程(南から)
図版 27 (上)	・ ・ ・ ・ ・	7区	墳丘裾基底石抜き取り穴検出状況(南から)
図版 27 (下)	・ ・ ・ ・ ・	7区	抜き取り穴に残る基底石の表面(東から)
図版 28 (上)	・ ・ ・ ・ ・	7区	北壁断ち割り状況(南東から)
図版 28 (下)	・ ・ ・ ・ ・	7区	北壁にみる墳丘築造過程(南から)
図版 29 (上)	・ ・ ・ ・ ・	7区	北壁にみる墳丘築造過程(南東から)
図版 29 (下)	・ ・ ・ ・ ・	7区	北壁にみる墳丘築造過程(南西から)
図版 30 (上)	・ ・ ・ ・ ・	7区	北壁にみる墳丘築造過程(墳丘コアと整地。南から)
図版 30 (下)	・ ・ ・ ・ ・	7区	西壁土層(南東から)
図版 31 (上)	・ ・ ・ ・ ・	7区	調査区北西隅の墳丘断面(北西から)
図版 31 (下)	・ ・ ・ ・ ・	7区	版築検出状況(真上から)
図版 32	・ ・ ・ ・ ・	7区	西壁にみる版築(東から)
図版 33 (上)	・ ・ ・ ・ ・	8区	西側調査区完掘状況(南西から)
図版 33 (下)	・ ・ ・ ・ ・	8区	東側調査区完掘状況(南東から)
図版 34 (上)	・ ・ ・ ・ ・	9・10区	調査前風景(東から)
図版 34 (下)	・ ・ ・ ・ ・	9区	上層遺構検出状況(西から)
図版 35 (上)	・ ・ ・ ・ ・	9区	整地土検出状況(北から)
図版 35 (下)	・ ・ ・ ・ ・	9区	石敷(0904SX)完掘状況(北から)
図版 36	・ ・ ・ ・ ・	9区	石敷(0904SX)と掘削・掘立柱建物(0907SB) (東から)
図版 37 (上)	・ ・ ・ ・ ・	9区	石敷(0904SX)の玉石敷(南から)
図版 37 (下)	・ ・ ・ ・ ・	9区	石敷(0904SX)緑石上面の叩き痕(西から)
図版 38 (上)	・ ・ ・ ・ ・	9区	北壁土層(南東から)

図版 38 (下)	9区 掘立柱建物 (0907SB) 柱穴 (0902SP) と整地土 (北から)
図版 39 (上)	9区 柱穴 (0104SP) 土層 (南から)
図版 39 (下)	10区 掘立柱建物 (0907SB) 柱穴 (1001・1002SP) 検出状況 (東から)
図版 40 (上)	10区 柱穴 (1002SP) 土層 (南から)
図版 40 (下)	10区 掘割検出状況 (西から)
図版 41 (上)	10区 掘割検出状況 (北東から)
図版 41 (下)	10区 墳丘北東隅完掘状況 (北東から)
図版 42 (上)	10区 墳丘北東隅完掘状況 (南西から)
図版 42 (下)	10区 墳丘北東隅完掘状況 (南から)
図版 43 (上)	10区 墳丘北東隅完掘状況 (東から)
図版 43 (下)	10区 墳丘北東隅 (北辺。北から)
図版 44 (上)	10区 墳丘北東隅 (東辺。東から)
図版 44 (下)	10区 基底石掘方と基底石の据え付け (北から)
図版 45 (上)	10区 掘割設定の溝 (1004SD) 検出状況 (南から)
図版 45 (下)	10区 溝(1004SD)内の粘質土ブロック検出状況(南から)
図版 46 (上)	10区 溝 (1004SD) 完掘状況 (南から)
図版 46 (下)	10区 溝 (1004SD) 完掘状況 (東から)
図版 47 (上)	10区 墳丘北東隅の掘割表面 (南西から)
図版 47 (下)	10区 南壁土層 (北から)
図版 48 (上)	10区 西壁土層 (東から)
図版 48 (下)	10区 鋸齒状土層表面の水洗による検出状況 (北から)
図版 49	出土遺物 1 (弥生土器・土師器)
図版 50	出土遺物 2 (須恵器)
図版 51	出土遺物 3 (須恵器・石)
図版 52	出土遺物 4 (鋳造関連遺物)
図版 53	出土遺物 5 (鋳造関連遺物・瓦)
図版 54	出土遺物 6 (磚)
図版 55	出土遺物 7 (磚)
図版 56	出土遺物 8 (磚)
図版 57	出土遺物 9 (磚)
図版 58	出土遺物 10 (磚)
図版 59	出土遺物 11 (磚)

第1章 調査の概要

第1節 発掘調査に至る経緯

菖蒲池古墳は、奈良県橿原市菖蒲町に位置する古墳である。

菖蒲池古墳は非常に美しい2基の家形石棺が納められていることで有名で、少なくとも明治時代以降は墳丘の封土が失われ天井石が露出する、現在の姿となったことが分かっている。

古墳の調査は大正14(1925)年に行われ、その結果を受けて昭和2(1927)年4月8日には菖蒲池古墳は石室及び玄室のみが国史跡に指定された。さらに平成19(2007)年には、「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」の構成資産の1つとして、世界遺産暫定一覧表記載資産候補に記載された。

このように菖蒲池古墳は古くからその重要性を指摘されてきた古墳だが、古墳自体の調査は、石室や石棺の実測調査を除けば行われてこなかった。そこで橿原市では、菖蒲池古墳の範囲を確定し、史跡範囲の見直しを行うために範囲確認調査を計画し、土地所有者及び地元住民の協力を得て、平成20(2008)年度には石室周辺の地形測量を実施した。平成21(2009)年度から国庫補助事業で発掘調査による範囲確認調査を実施した。そして、平成24(2012)年まで4年間にわたる調査の結果、墳丘の規模や形状、古墳の築造に伴う整地土といった古墳自体に直接関わる遺構だけでなく、古墳の変遷を知る上で重要な遺構も検出され、菖蒲池古墳に関わる基本的な情報を得ることができた。

第2節 調査体制

4年間の調査では、平成22(2010)年度調査以降、菖蒲池古墳発掘調査指導・検討委員会(名称・組織は後に変更)の指導の下、発掘調査の計画・実施及び保存に係る問題点の精査を行った。

また、調査成果を公開する方法として、全ての調査で報道発表を行い、平成22(2010)年度以降(平成23(2011)年度は台風のため中止)は発掘調査時に現地説明会を開催し、調査成果を広く公開した。

本報告書は、平成21(2009)年度から平成24(2012)年度の発掘調査成果をまとめたものであり、平成26(2014)年度を充てた。

なお、発掘調査時及び報告書作成時の本市の調査体制は以下の通りである。

平成21(2009)年度

文化財課長 齊藤明彦、課長補佐 豊島和代、係長 濱口和弘、技師 米田一、技師 松井一晃
(調査担当 米田・松井)

平成22(2010)年度

文化財課長 齊藤明彦、課長補佐 濱口和弘、係長 平岩欣太、技術員 石坂泰士(調査担当 平岩・石坂)

平成23(2011)年度

文化財課長 竹田正則、課長補佐 濱口和弘・高瀬友己、保存係長 平岩欣太、事業調整係長 米田一、技師 松井一晃(調査担当)

平成24(2012)年度

文化財課長 竹田正則、課長補佐 濱口和弘・中川明彦、統括調整員 平岩欣太、事業調整係長

米田一、主査 松井一晃（調査担当）

平成 26（2014）年度

文化財課長・歴史に憩う橿原市博物館長 竹田正則、課長補佐・館長補佐 濱口和弘、
統括調整員 平岩欣太・米田一、主査 石坂泰士、歴史に憩う橿原市博物館学芸係長 松井一晃
（報告書担当 松井・石坂）

また、本調査における指導体制は以下の通りである。

平成 22（2010）年度調査 菖蒲池古墳発掘調査指導・検討委員会

委員 石野博信、木下正史、白石太一郎、菅谷文則、深澤芳樹、宮原晋一

平成 22 年 12 月 1 日に委員会名を橿原市菖蒲池古墳調査検討委員会と定める。

委員長 石野博信、副委員長 木下正史、委員 白石太一郎、菅谷文則、深澤芳樹、宮原晋一

平成 23（2011）年度 橿原市菖蒲池古墳調査検討委員会

委員長 石野博信、副委員長 木下正史、委員 白石太一郎、菅谷文則、深澤芳樹、豊岡卓之

平成 24 年 4 月 25 日に委員会名を橿原市史跡等調査保存整備検討委員会と定める。

平成 24（2012）年度 橿原市史跡等調査保存整備検討委員会

委員長 石野博信、副委員長 木下正史、委員 白石太一郎、菅谷文則、杉山 洋、豊岡卓之

第3節 各調査の目的と範囲

以下、各年度の発掘調査の目的と範囲について述べる。

平成 21 年度調査（2009 - 12 次調査。1 ~ 4 区）

菖蒲池古墳における初の発掘調査である。調査はまず、墳形及び墳丘規模の解明に主眼を置き、石室の周囲におおよそ十字になるように調査区を設定した。この調査では、調査地内に生えている樹木を可能な限り避けて調査区を設定したため、石室に対して直交する調査区を設定することはできなかった。調査面積は 120.4 m²である。本調査では実働 28 日、作業員のべ 249 人を要した。

調査はまず、調査地の中で最も調査面積が広く、遺構が良好に残存している事が予想された石室東側の 1 区から実施した。1 区では上下 2 段の墳丘斜面と、上段墳丘裾と思われる平坦面と直線的に延びる基底石を検出した。この成果をもとに石室北側の 2 区、石室西側の 3 区、石室南西の 4 区と調査を進めた。2 区は 1 区と同様、遺構の残存状況が良好で、古墳背面の掘削の他、墳丘北辺の墳丘斜面及び上段墳丘裾平坦面と基底石を検出した。しかし、1・2 区の調査では、安全上の理由から、墳丘裾及び掘削底面の検出は行わなかった。現地形でも大きな削平が認められる 3 区では墳丘が大きく破壊されていることが明らかとなり、墳丘の西辺はほぼ残存しない可能性が想定された。一方 4 区では、墳丘は大きく削平を受けていたものの、古墳南辺の墳丘裾に設置された基底石の抜き取り穴と古墳前庭に敷設された礎敷を検出した。また、この調査成果から想定される墳丘の南辺の位置は、史跡指定地南辺の延長線とほぼ同じ位置にあることが明らかとなった。

平成 22 年度調査（2010 - 4 次調査。5・6 区）

前年度の調査で、菖蒲池古墳の墳形が円墳でない事は確定していたが、方墳か八角形墳かを確定することができなかったため、墳形の確定を調査の目的として調査区を配置した。調査区の位置は、

5区が4区の西側隣接地で、墳丘南西隅の検出が想定される地点、6区が1区の北側隣接地のうち、八角墳の場合には墳丘上段の東辺と北東辺の頂点が想定される地点である。調査面積は86.0㎡である。本調査では実働36日、作業員のべ236人を要した。

5区の調査では、墳丘の南西隅の検出に主眼を置いた。調査の結果、墳丘の南西隅では墳丘裾を検出し、方墳であることが確定した。さらに、藤原宮期に古墳の一部を埋めて整地した後に石組溝を構築したこと、墳丘南西隅は藤原宮期以降の地震による地滑りを起こしたことも明らかとなった。6区の調査成果は、上段も方形であることを示す結果となり、菖蒲池古墳は二段築成の方墳であることが確定した。

平成23年度調査(2011-3次調査。7・8区)

過去2年度の調査を受けて、墳丘の南東隅の検出及び東辺墳丘の残存状況の把握を調査目的とした。調査区の位置は、7区が墳丘南東隅を中心とする範囲、8区は現況で石室東側に東西方向に延びるおよそ1m程度の高さの、北から南に落ちる崖面である。調査面積は174.8㎡である。本調査では実働56日、作業員のべ352人を要した。

7区の調査では、墳丘南東隅に当たる部分と墳丘東辺の墳丘裾及び掘割を検出した。一方で墳丘南辺は近世以降に大きく破壊されたことが明らかとなった。また、墳丘構築に関して、版築を用いている点や、掘割の築造手順が明らかとなった。

8区の調査では、現地形の破壊を最小限に抑えるため、崖面に堆積した表土の除去のみを実施した。しかし、表土が予想以上に厚く堆積していたため、表土を除去すると現地形に変更が及ぶことが明らかとなった。そこで表土層の一部を除去したのみではあるが、調査を終了した。

平成24年度調査(2012-4次調査。9・10区)

前年度の調査では少なくとも墳丘東辺の位置が確定できたことから、9区では古墳周辺の遺構の有無確認、10区では墳丘北東隅の検出による墳丘規模の確定を調査目的とした。調査地は9区が墳丘北東隅の想定位置、10区は平成21(2009)年度調査(1区)で柱穴を検出した古墳東側の平坦地で、調査面積は172.5㎡である。本調査では実働55日、作業員のべ264人を要した。

9区の調査では、古墳の東側において掘立柱建物や石敷を検出した。これらの遺構の中には、菖蒲池古墳との関連性を想定されるものもあり、墓域を検討するうえで重要と考えられた。

10区の調査では、墳丘の北東隅を検出し、墳丘規模や墳形を確定するに至った。また、7区に加えて10区でも掘割の築造手順を確認することができた。

そしてこの調査をもって、菖蒲池古墳の基礎的なデータを得るために実施してきた菖蒲池古墳範囲確認調査を終了した。

次頁に各年度調査の調査日誌抄を掲載する。

2009 - 12 次調査

平成 22 (2010) . 1.13 (水)

調査開始。調査地内の雑木処理。 器材搬入。

1.14 (木)

調査地掘削前写真撮影 (西平は完了)。調査地内の 雑木処理。器材の整理、仮設テントの設置。

1.15 (金)

調査前写真撮影。調査区周辺の整備及び安全対策。石室上部の桐の木について、五葉野町総代と協議の結果、伐採してもよいとの回答を得る。

1.18 (月)

1 区表土除去。調査区東平では、表土下層で地山 (黄褐色バイラン土) を確認。表土より土師器、須恵器、瓦が出土。

1.19 (火)

1 区上層遺構面検出。調査区東平では、地山上面で素掘溝を確認。出土遺物から素掘溝は近世以降と考えられる。古墳に関わる遺構は今のところ認められない。

1.20 (水)

1 区上層遺構面の精査。検出遺構は素掘溝のみ。検出写真を撮影し、素掘溝の調査を実施。

2 区表土の除去。表土下層では古墳関連遺構はない。

1.21 (木)

雨天のため、現地調査中止。

1.22 (金)

1 区素掘溝完掘。写真撮影。旧耕土を除去し、地山のバイラン土粒を含む層を検出。調査区東端で柱穴 2 基を検出。柱穴は一辺 1.3 m、柱間 3.3 m 程度か。遺構の性格を判断するために南側を拡張予定。

4 区表土の除去。

1.25 (月)

1 区墳丘の検出及び側溝掘削。側溝の上層からは墓塚は確認できない。墳丘は 2 段以上か。上段墳丘には基底石と平坦面がある。墳丘は盛土及び化粧土を置いて築造される。なお、墳形は方墳か多角形墳のどちらかと思われる。

1.26 (火)

1 区墳丘検出写真撮影。

2 区表土除去。上層遺構検出後、写真撮影。上層遺構は素掘溝を中心とする。

4 区表土除去。表土の下層は赤褐色の地山ブロックを含むバイラン土である。この土は墳丘盛土の可能性もある。

1.27 (水)

1 区墳丘盛土の前面上留め (土囊のようなものか) を確認。明日は基底石前面に堆積した墳丘完成後、最も初期に堆積した堆積層の調査を行う。

2 区表土除去。

4 区表土除去後、写真撮影。現在の史跡南端部に残存する墳丘が一直線上に並ぶ。調査区南端の北から南に下がる段が造られた時期や性格は不明。

1.28 (木)

雨天のため、現地調査中止。

1.29 (金)

1 区上段墳丘基底石前面の初期堆積層からの遺物はなし。また、平坦面の岩盤の上面には厚さ 1 cm 程の置き土とみられる堆積がある。平坦面検出写真撮影後、下段墳丘面検出。

2 区背面カット部の検出。掘削理土の下層で地山を確認。

3 区表土除去。

4 区上層遺構完掘。

2. 1 (月)

雨天のため、現地調査中止。

2. 2 (火)

1 区上段完掘写真撮影。調査区北壁土層の分層。

2 区上段墳丘基底石を検出。背面部は地山の削り出し。

2. 3 (水)

1 区掘削の調査及び土層の分層。上段墳丘の構築方法が明らかとなる。

2 区上段墳丘掘削平坦面の確認を確認。

3 区表土除去。

2. 4 (木)

1 区墳丘写真撮影。

2 区墳丘掘削平坦面検出写真撮影。

3 区完掘。墳丘は削平され、一部墳丘構築土が残るのみである。

4 区側溝掘削後、分層。墳丘基底石を検出するも、石材は抜き取られて表面を残すのみである。

2. 5 (金)

1 区上層及び墳丘写真撮影。

2 区掘削の調査。

4 区墳丘の調査。昨日検出した基底石の前面で礎石を検出。礎石南端は後世に破壊されて残存せず。北端も基底石を抜き取られた際に破壊されている。基底石は全て抜き取られる。

2. 8 (月)

1 区墳丘写真撮影。

2 区掘削の調査。

3 区完掘写真撮影。

4 区墳丘基底石の調査。基底石の抜き取りラインは一直線にならないので、墳形を確定できない。

2. 9 (火)

1 区上段墳丘掘削平坦面の礎石検出。砂礫層にめり込むような礎の敷設状況である。上層図作成。

2 区礎石の清掃。

2.10 (水)

1 区上層図、平面図作成。

2 区掘削の調査。安全面から掘削前面の検出を断念。

2.12 (木)

1 区掘削断ち割り調査。

2.13 (金)

雨天のため現地調査中止。

2.16 (火)

1 区掘削の上層図作成及び写真撮影。特に掘削上部では人為的な埋戻しの痕跡が明確である。

2 区分層。1 区とは異なり、粗い単位での土層の堆積が認められる。

2.17 (水)

2 区完掘写真のための清掃。

3 区平面図、上層図作成。

4 区完掘写真撮影。

完了検査。

2.18 (木)

1 区平面図作成。

- 2区完掘写真撮影。
3区土層図作成。
- 2.19 (金)
1区平面図作成。
2区土層図作成。
4区平面図作成。埋戻し。
埋め戻しの際には、墳丘部分は土壌で覆い、その他はシートで遺構面を保護することとする。
- 2.22 (月)
1区埋戻し。
2区土層図作成。
3区埋戻し。
4区平面図作成。
奥田尚氏による石材分析。
- 2.23 (火)
1区立面図作成、埋戻し。
2区土層図、平面図作成。
4区平面図、立面図作成。
- 2.24 (水)
1区埋戻し。
3区平面図、土層図作成。
4区土層図作成。
- 2.25 (木)
1区埋戻し完了。
2区図面作成完了。
3区埋戻し完了。
4区土層図作成。
覆い屋の北側の桐の木の伐採。石材分析では、4区古墳前庭の礎石に椋原石が含まれていることを確認。
- 2.26 (金)
2区、4区埋戻し完了。フェンス解体。現地作業終了。

2010 - 4次調査

平成22(2010) .10.12(火)

- 調査地フェンス設置。調査区周辺の下草除去後、調査前写真撮影。光波測距機により調査区位置設定。軸は昨年度調査で把握した墳丘主軸に合わせる。調査区は南西部(昨年度4区の西)を5区、北東部(上段コーナ一部)を6区とする。
- 10.13 (水)
フェンス設置完了。調査区周辺の整理。5区の掃土置き場脇に大量のミツバチが発生。果敢へうつす。明日、回収予定。
- 10.14 (木)
調査開始。5区に菖蒲池古墳が八角形墳とした場合、南西辺に直交する形で畦を設定し、その北半部の調査区から調査を始める。表土除去終了。竹の根が多く時間がかかる。
- 10.15 (金)
5区旧耕土除去。地表下約0.2mで比較的しまりの良い黄褐色砂質土を抽出。墳丘盛土上面の可能性あり。ただし、竹の根や畑の耕作による混入が激しい。調査区北西隅にて断ち割りを実施。地表下0.7mで地山と思しき層を抽出。5区のうち、4区と重複した部分の遺構の再検出を行う。
測量の打ち合わせ。
- 10.18 (月)
5区畦以东の調査。東部で墳丘裾の基礎石抜き取りと思われる落ち込みを抽出。4区西端から約1.5m西まで続き、その西側は耕作によって削平されている。方墳である可能性高ま

- る。
- 10.19 (火)
5区畦以西の南半を掘り下げ。土層遺構検出写真撮影。土層遺構は素掘溝のみ。この面ですでに5区東端から2mほどの位置で、4区で礎石を検出した標高よりも低い。
- 10.20 (水)
5区墳丘検出。墳丘裾の基礎石抜き取り穴の土層断面を再検討。抜き取り穴の平面検出。
5区北西側の平坦部分を断ち割り調査。
- 10.21 (木)
雨天のため、現地調査中止。
- 10.22 (金)
5区南東部、墳丘裾基礎石の抜き取り穴の検出写真撮影。
5区北西の断ち割り部では現地地表下1m弱まで下がるようである。墳丘はほぼ垂直に0.3mほど落ちる段になっている。この段が当初のものであるかは、面的に確認する必要あり。
- 10.25 (月)
雨天のため、現地調査中止。
- 10.26 (火)
5区西側平坦部にて墳丘検出。2列の石列を検出。南北に並列していることから、溝となる可能性がある。この場合、墳墓の排水溝となる可能性あり。ただし、調査区中央より南では削平されていると思われる。溝が構築されているベース面の性格は要検討。他の墳丘盛土より、ややしり弱い。
- 10.27 (水)
5区墳丘検出。昨日抽出した石列は石組溝となる。方位は南北で長さ約2m。石組溝検出写真及び墳丘南辺の墳丘裾基礎石の抜き取り穴完掘写真撮影。
- 10.28 (木)
雨天のため、現地調査中止。
- 10.29 (金)
石室上部の養生シートの再養生。石室内清掃。
5区溝(0501SD)の調査。
台風接近中のため、台風養生。
- 11.1 (月)
5区古墳前庭の礎石を検出。4区西端から西に約1.5m続く。それより西側は、削平され存在せず。
溝(0501SD)の調査。完掘には至らず。
- 11.2 (火)
5区溝(0502SD)の調査。調査区南東の礎石付近まで溝が延びることを確認。溝は検出面から最大0.5mほどの深さ。5区平坦部の石組溝及び石組溝ベース土は古墳よりも後世のものである可能性があるため、堆積時期の再検討が必要。
- 11.4 (木)
5区土層遺構の溝の調査。溝(0501SD)の底面で基礎石となりそうな一辺0.25mの方形の石材を2個検出する。石の上面は古墳前庭の礎石より0.5m以上低い。北辺断ち割りを墳丘まで延長。この地点でも上述の基礎石の延長と考えられる石材と、その西に礎石(幅0.1m)を検出。溝(0501SD)下の石より近く0.8m以上高いことから、基礎石のレベルは南から北へ高くなる可能性がある。石組溝(0505SD)の調査。溝は深さ約0.3mで、飛鳥時代の須臾蓋が出土。
- 11.5 (金)
5区墳丘部分の土層の再検討。墳丘は未検出であることが判明したため、遺構面検出を行う。調査区南辺にて古墳前庭

- の礫数が西に下って続いている（現在の西端から西に2m地点で0.5m程度低くなる）ことを確認。
- 11.8 (月)
- 5区礫数を検出。礫数は調査区西端まで続く。溝(0501SD)は石組溝(0505SD)より新しく上層断面で確認。図面作成。
- 6区調査開始。現地表下0.4mで素掘溝を検出し写真撮影。
- 11.9日(火)
- 5区藤原宮期遺構面の完掘写真撮影。図面作成。
- 6区現地表下0.7mで、墳丘と考えられる赤色粘土が混じる上層の広がりを検出。平面形から方墳である可能性高まる。
- 11.10(水)
- 5区南半において墳丘面を検出。藤原宮期の面から最大約0.6m下面で、礫数・砂礫数を検出。砂礫数は古墳前庭のような0.1m大の礫を密に敷設するのではなく、細砂に少量の直径数cm大の礫を混ぜたような状態である。
- 11.11(木)
- 5区藤原宮期遺構面を一部を残し、掘り下げる。藤原宮期の整地土は厚さ0.6m程度。墳丘西側には小さな礫が混じる砂質土が広がる。その上に0.05mの灰白色粘質土(流土か)があり、整地はその上面から開始される。灰白色粘質土の上面に直径0.3mの炭化物の広がりがあり、整地前に何か行った痕跡か。墳丘南辺・西辺の墳丘層基底石検出。西辺の基底石は上面が外へ傾きがちである。
- 11.12(金)
- 5区平面図作成。古墳前庭の遺構検出。墳丘南西隅までは礫数の密度が高いことを確認。墳丘南西隅付近の礫数上で榛原石小片が数点出土。
- 11.15(月)
- 5区畦及び墳丘層基底石抜き取り穴の写真撮影及び図面作成。墳丘西辺の遺構面検出。
- 11.16(火)
- 5区畦の調査。墳丘南西隅の基底石を検出。上層遺構の溝(0501SD)の掘削は基底石の直上まで及び、墳丘南西隅基底石の北隣の石は抜き取られている。墳丘南西隅付近の石は上面が陥る。もう一段上に石が存在した可能性もあるが削平により不明。奈良県立橿原考古学研究所長の菅谷文樹氏による現地指導。段の形状は畝坂段ノ塚古墳(舒明陵)に近いのでは、との助言をいただく。
- 11.17(水)
- 5区墳丘・礫数の検出。礫数清掃後、図面作成。流土上面及び藤原宮期整地土上の転落石の取り上げ。
- 6区遺構面検出。調査区南端で上段墳丘層基底石を検出。
- 11.18(木)
- 5区完掘写真撮影に向けての清掃作業。墳丘層の西側に設定していた畦および石組溝の畦を記録後除去。
- 6区遺構検出。基底石が北に延びることを確認。石の上面は暗赤褐色粘土に覆われているが、一部はそれが流出し、上面が見えている。
- 11.19(金)
- 5区完掘写真撮影。奈良県立橿原考古学研究所の現地検討会において、墳丘南西隅一帯の段差は地滑りによるものではないかと指摘を受ける。段差部分の断面などから、その可能性は高いと考えられる。水平方向には数十cmも動いてないが、垂直方向には0.7m以上落下している場所も認められる。地滑りの時期は藤原宮期の整地後か。奥田氏による石材検討。
- 6区基底石検出。上段墳丘層平坦面の礫数を検出。
- 11.22(月)
- 雨天のため、現地作業中止。
午後から現地で葛藤池古墳調査検討委員会を開催。現地検討後、かしはら万葉ホールに移動し検討委員会会議。
- 11.23(火)
- 現地説明会及び記者発表の準備。
5区礫数の平面図作成。
- 11.24(水)
- 現地説明会及び記者発表の準備。
5区上層の再検討。地滑り痕跡を確認。藤原宮期整地土も地滑りを起こしていることから、地滑りは藤原宮期以降と判明。なお藤原宮期整地層は墳丘と基底石を覆う。図面作成。
- 6区完掘。
- 11.25(木)
- 記者発表。
5区図面作成及び調査区壁面の写真撮影。
6区完掘写真撮影。
- 11.26(金)
- 現地説明会準備。
5区・6区図面作成。
- 11.27(土)
- 現地説明会。650名来場。
- 11.29(月)
- 図面作成完了。石室覆屋を単管で補強。午後から産業技術研究所の寒川旭氏に5区を現地確認してもらう。“地滑り”で問題ないとのこと。盛土直後に地滑りが起きることが多いと御教示を受ける。石材が割れるには震度6以上の規模が必要だが、地滑りであればそれ以下の地震でも起きうること。12月8日(水)に文化庁の視察予定のため、それまで現場埋め戻しを行う。
- 12.9(木)
- 調査区埋め戻し開始。遺構面をシートと土嚢で保護し、埋め戻す。6区埋め戻し完了。
- 12.10(金)
- 調査区埋め戻し。
- 12.13(月)
- 埋め戻し完了。器材撤収するも、10時頃から強雨のため、作業中止。
- 12.14(火)
- 器材撤収。
- 12.15(水)
- 器材撤収完了。現地調査終了。
- 2011-3次調査
平成23(2011)・7・4(月)
- 調査前風景撮影。
8区表土除去を開始。ビニール、電球が出土。
- 7.5(火)
- 8区表土除去。調査区西平では、盛土のみしか検出できず。調査区東平地点では、調査区の東部において地山のパイラントを検出したが、それよりも西側では現代の盛土内の調査に止まった。
- 7.6(水)
- 7区表土除去。1/3程度終了。
- 7.7(木)

- 雨天のため、現地調査中止。
7. 8 (金)
7区表土除去はほぼ終了。
- 7.11 (月)
7区旧耕土層の掘り下げ。北東部1/4はほぼ完了。部分的に地山のバイラン土を確認。古墳東辺の掘割らしきものも確認した。
- 7.12 (火)
7区旧耕土の除去。調査区東半はほぼ終了。
- 7.13 (水)
7区調査区西半において旧耕土の除去。
- 7.14 (木)
7区旧耕土の除去。一部で古墳盛土らしき土層を確認する。
- 7.15 (金)
7区旧耕土の除去。台風6号接近のため、現場養生。
- 7.19 (火)
台風6号接近のため、現地調査中止。現場見回り。
- 7.20 (水)
台風6号接近のため、現地調査中止。現場見回り。
- 7.21 (木)
7区遺構検出及び検出写真撮影のための清掃。
- 7.22 (金)
7区写真撮影のための清掃。旧耕土除去時の現場写真撮影。調査区東半の表掘溝の調査。遺構は重複が重なり、掘割と掘割理土の上質の違いは明確である。表掘溝から磁器が出土。
- 7.25 (月)
7区表掘溝の調査。地山と掘割理土の差は明確である。地山は前庭部があると思われる位置でも検出している。しかし磁器は痕跡も含めて全くなく、耕作により全て削平された可能性が高い。表掘溝からは0.05m程の礫が出土する。なお、掘割理土は大きく何層かにまどめられるようである。
- 7.26 (火)
7区表掘溝の調査。調査時の想定ラインとはほぼ同じ位置で掘割を検出。その他、墳丘裾の延長上に東西方向の溝を検出。この溝の理土は旧耕土である。この溝により古墳南辺の墳丘裾は完全に破壊されている。
- 7.27 (水)
7区表掘溝の調査（東半はほぼ終了）。西半は最上部のみ完掘したが、今のところ墳丘構築上と下段の理土の区別がつかないので、明日以降検討予定。
- 7.28 (木)
7区西半表掘溝の調査。
- 7.29 (金)
7区西半表掘溝の調査。
8. 1 (月)
7区表掘溝完掘写真のための清掃。
8. 2 (火)
7区表掘溝完掘写真撮影。墳丘裾想定ライン付近の東西溝の調査。古墳東辺の墳丘裾基石抜き取り穴を検出する。抜き取り穴は、最も浅いところでは深さ3m程が残存するのみである。また、古墳東辺では礫敷も確認した。古墳南辺は近世以降の溝による破壊が激しく、基石の掘え付け箇所すら残っていない状況である。
8. 3 (水)
7区掘割理土の調査。出土遺物は殆どない。各々の層の完掘後、写真撮影を行うこととする。
8. 4 (木)
7区掘割理土の調査。殆ど出土遺物はない。
8. 5 (金)
7区掘割理土の調査。
8. 8 (月)
7区掘割理土の調査。古墳東辺の掘割の斜面を検出する。掘割の東斜面は地山ではなく、盛土により構築されている可能性がある。掘割の東斜面をほぼ検出完了。南北趾土層写真撮影後、盆休みのための現場養生。南北趾、北壁土層図作成。
- 8.12 (金)
盆休みのため現地調査中止（16日まで）
- 8.17 (水)
7区墳丘裾基石抜き取り穴検出写真撮影。北壁土層図作成。
- 8.18 (木)
7区東辺墳丘裾基石の検出。抜き取り穴の北側で4石を確認。地区杭の打設及び1/100略測図作成。掘割の外側で、これまで地山と考えていたバイラン土について整地土の可能性を指摘されたため、調査の最終段階で確認することとする。
- 8.19 (金)
午前中で作業中止。現場養生。
- 8.22 (月)
7区完掘写真撮影のための清掃。
- 8.23 (火)
7区完掘写真撮影。墳丘構築上の分離。墳丘面近くで赤褐色ブロック土を確認した。これは1区上段と同じ状況と考えられ、墳丘の化粧を想定できる。平面図作成。
- 8.24 (水)
7区完掘写真撮影。平面図作成。
- 8.25 (木)
雨天のため、現地調査中止。現場排水。
- 8.26 (金)
雨天のため、現地調査中止。
- 8.29 (月)
雨天後の現場清掃。菖蒲池古墳調査検討委員会を現地及び万葉ホールにて開催。今後の調査方針として、7区北・西壁の新し割り調査の実施と、古墳東辺の抜き取り穴について南半のみ発掘調査を行うことが決定される。
- 8.30 (火)
報道発表。7区完掘写真撮影のための清掃。
- 8.31 (水)
平面図作成。7区完掘写真撮影。台風12号接近のため現場養生。五条野町住民15人来訪。
9. 1 (木)
台風12号接近のため、現地調査中止。現場見回り。現地説明会（9月3日）中止を決定。
9. 2 (金)
台風12号接近のため、現地調査中止。現場見回り。
9. 5 (月)
平面図作成。3D測量のための清掃。雨天のため、作業は平日で中止。
9. 6 (火)
石室内3D測量。平面図作成。器材の整理。調査区の清掃（3D測量のため）。

9. 7 (水)
3D測量(調査区、周辺地形)。平面図作成。
8区土壌による埋戻し。
9. 8 (木)
7区平面図作成及び土層図注記。調査区壁面の斯ち割り調査開始。今のところ墳丘コアが地山なのか盛土なのか不明。
8区埋戻し完了。
9. 9 (金)
7区平面図作成。調査区北壁西平の斯ち割り調査から想定される墳丘の構築方法は、①地山を平坦にする、②1次盛土、③2次盛土、④基底石据え付け、⑤化粧の順である。2次盛土から須恵器環が出土。
- 9.12 (月)
7区斯ち割り調査。
- 9.13 (火)
7区斯ち割り調査。平面図作成。2次盛土は、地山(パイラン土)と粘質土を大きく互層に積むものである。それぞれの層の厚さが非常に薄いことから版築の可能性が高い。
- 9.14 (水)
7区斯ち割り写真撮影及び斯ち割り土層図作成。基底石採取の調査の結果、3石分を新たに検出。
- 9.15 (木)
7区平面図及び土層図作成。版築の可能性のある土層の上で突き棒の痕跡らしき直径0.05m程の円形のくぼみを多数検出。くぼみとくぼみの間には隙間があり、くぼみの大きさはどれも同じ程度である。土層断面の状況とあわせると、墳丘の下段(南平)は版築による築造と考えられる。
- 9.16 (金)
7区斯ち割り土層の写真撮影及び平面図・土層図作成。北壁の精査。版築は基底石の据え付けの高さ付近まで行っているようで、高さが増すにつれて次第に積みが粗くなり版築でなくなる。感じとしては、1区で検出した上段の墳丘コアの構築土と共通するようである。未週以降、突き棒痕跡の実測等に入る予定。なお、突き棒痕跡の取り上げ方法を奈良国立橿原考古学研究所の奥山誠義氏に相談。
- 9.20 (火)
7区図面作成。台風15号接近のため現場養生。
- 9.21 (水)
台風15号接近のため、現地作業中止。
- 9.22 (木)
7区図面作成。奥田氏による石材の分析。
- 9.26 (月)
7区図面作成。埋戻しの準備。奥山氏と土層割ぎ取りの打ち合わせ。29日(木)に実施。
- 9.27 (火)
7区埋戻し開始。
- 9.28 (水)
7調査区埋戻し。土層の割ぎ取りの打ち合わせ、奥山氏の指導のもとで横間・松井が作業を行うこととなる。
- 9.29 (木)
7区埋戻し。土層の割ぎ取り(版築、墳丘部分)。西壁は終了。北壁(2×5m)は、割ぎ取り未了。
- 9.30 (金)
7区北壁土層割ぎ取り完了。
10. 3 (月)
7区埋戻し。版築の突き棒痕跡取り上げのための下準備。
10. 4 (火)
7区埋戻し。突き棒痕跡切り取り作業を奥山氏指導のもとで、横間が作業を行う。
10. 5 (水)
7区埋戻し。
10. 6 (木)
7区埋戻し。調査地内の清掃。
10. 7 (金)
調査地及び周辺の清掃。器材撤収。現地調査終了。
- ## 2012 - 4次調査
- 平成24(2012) .12.11 (火)
調査開始。9区表土除去。地表下約0.3mでベース面が検出できるようである。
- 12.12 (水)
9区表土除去。木の根が多く難航。東京国立博物館の古谷毅氏が来訪。塚廻り古墳の漆棺保存のための参考資料として助言を頂くため、菖蒲池古墳の南館の現状を確認してもらう。
- 12.13 (木)
9区表土除去完了。まだ遺構面の検出は行っていない。出土遺物に瓦器塚、土師皿、須恵器蓋、磚がある。
- 12.14 (金)
9区遺構検出。調査区東平で整地土のような土を帯状に検出。飛鳥時代の整地の可能性がある。排水溝を掘った際に確認する予定。また、1区で検出した柱穴の東側で、柱穴となりそうなしみを検出。
- 12.17 (月)
9区遺構検出。1区よりも東側に1基の柱穴を検出。柱穴は一辺1.4mまでの隅丸方形で、柱間は約3.0m(10尺)。また、柱穴の掘り込み層が整地層である事を確認。整地は盛土によってなされ、今のところ大きく2段階に分かれる。新しい盛土は単位が粗く、古い盛土は単位が細かく水平に近い「版築状」を呈する。この層から遺構の出土はない。柱穴の検出を受け、9区の東側を拡張する。
- 12.18 (火)
9区排水溝掘削及び遺構検出。排水溝掘削時に検出した石敷(0904SX)と盛土の関係は以下のとおり。それぞれの盛土の特徴を記す。
盛土(古):1つ1つの層が厚く、かたくしまる(この上に石敷が敷設される)。
盛土(中):版築状でかたくしまる。厚さ約5cmの山土と青灰土の互層。
盛土(新):各層の単位が大きい。石敷を埋める。
堆積状況から盛土(古)は石敷を敷設する目的。盛土(中)は、盛土(古)との間に自然堆積層がないことから、盛土(古)と一連の造成と考えられる。盛土(新)は石敷を埋めている。
- 12.19 (水)
9区排水溝掘削及び遺構検出。石敷(0904SX)は東側が調査区外に延びる。盛土と柱穴の関係は、遺構の新旧関係から盛土(新)は柱穴より古い。盛土(新)の最下層では飛鳥II新段階-藤原初期の遺物を含む層があるので、盛土(新)も藤原初期以前と考えられる。
- 12.20 (木)
9区拡張部遺構検出及び遺構面精査。柱穴を2基検出。藤原初期の盛土よりも新しいことが土層・平面で確認できた。

- 柱列は柱間 10 尺の幅となるが、今後、南北方向に並ぶ柱穴の検出があれば、孤立柱建物の間仕切になる可能性がある。
- 12.21 (金)
9 区道横溝調査及び調査区拡張。東京学芸大学名誉教授の木下正史氏来訪。柱穴について御指導を頂く。柱穴の性格を確定するために、調査区の南側を拡張が必要との事。
室内に温湿度計を設置。
- 12.25 (火)
9 区拡張部道横溝検出。柱穴は T 字に並ぶ。道横としては、間仕切りのある南北棟(梁間 3 間以上)の可能性が想定できる。
- 12.26 (水)
9 区検出写真撮影。年末年始の休暇にむけて現場養生。年内の調査は本日で終了。
- 12.27 (木)
現場確認。異常なし。
- 12.28 (金)
仕事納め。
- 平成 25 (2013) . 1. 7 (月)
新年の調査開始。9 区石敷の検出。整地上を層毎に掘り下げたが遺物は全くない。石敷(09045X)は南北方向が主軸で、西端の縁石は長さ 0.3m ほどの石を用いた玉石敷である。
1. 8 (火)
9 区柱穴及び石敷(09045X)の検出写真撮影。
- 10 区表土掘削。
1. 9 (水)
9 区北壁分層。10 区表土除去。
基準点測量及び 9 区地区杭打設の打ち合わせ。
1. 10 (木)
バルコン・発電機を搬入、設置。
1. 11 (金)
10 区道横溝検出。東西方向の素掘溝のみである。
1. 15 (火)
10 区表土除去。
1. 16 (水)
10 区土層道横溝検出写真撮影。素掘溝の調査。
1. 17 (木)
10 区素掘溝の調査。下層道横(古墳に関わる道横)検出。掘削の東側で柱穴を検出。9 区の柱穴と同一道横と考えられる。東西 5 間(15m)、南北 4 間以上(柱穴は 10 尺等間)の可能性が。明日以降、調査区を東側と南側で拡張する。
1. 18 (金)
10 区土層道横(素掘溝)完掘、下層道横(古墳掘削、柱穴)検出。検出写真撮影。調査区拡張及び掘削内断ち割り。
1. 21 (月)
10 区拡張区土層道横(素掘溝)の調査。掘削断ち割り調査。掘削理土の上層部分は、1 区の上層のような細かい単位で埋め戻してはならない可能性が高い。
1. 22 (火)
雨天のため、現地調査中止。
1. 23 (水)
10 区掘削断ち割り調査。調査区西辺の断ち割りでは、現地表下 1.5m 付近で墳丘の可能性のある面を確認。
拡張区の柱穴検出。
1. 24 (木)
10 区拡張区表土除去及び素掘溝の調査。掘削内理土のうちの上層部分の調査。遺物は少量。
1. 25 (金)
10 区拡張区道横検出。柱穴らしきラインがあるがまだ未確定。掘削の調査。理土中に飛鳥田-藤原宮期の遺物を含む。
1. 28 (月)
10 区掘削の調査。掘削の斜面が見え始める。
1. 29 (火)
10 区掘削の調査。大きな進展なし。拡張区でも柱穴を確認。柱間 10 尺である。
1. 30 (水)
10 区掘削の調査(掘削内)。先日、墳丘の可能性のある面といったものは、平面的な広がりから墳丘ではなく、理土の中の中層である可能性があり、慎重に検討する必要がある。
1. 31 (木)
10 区南壁(掘内)断ち割り。墳丘?検出写真撮影。
2. 1 (金)
10 区掘削の調査。調査区南壁において掘削内の上層確認。現地表下 2.3m で墳丘を確認。予想される基成石の検出深度は現地表下 3.5 m 付近。なお、先日墳丘かと考えられた面は、結果的には全て掘削内の理土であることが明らかとなった。
2. 4 (月)
雨天のため、現地調査中止。
2. 5 (火)
10 区掘削の調査。一部粘土と山砂を互層に積んだ部分あり。9 区平断面図作成。
2. 6 (水)
雨天のため、現地調査中止。
2. 7 (木)
10 区掘削の調査(中層)。磚(棟原石)が 2 点出土。9 区土層図の作成。
2. 8 (金)
10 区掘削の調査。棟原石の磚が 3 点出土。いずれの磚も墳丘に近い地点からの出土である。
2. 12 (火)
9 区土層図作成。奥田尚氏による石材分析。石材は飛鳥田、寺川、高取川、大淀付近、宇陀市付近のものとのこと。
- 10 区掘削の調査(下層)。掘削背面は全面が整地され、バイラン土と粘質土が互層になっている。
2. 13 (水)
9 区土層図作成。完掘写真撮影の準備。
- 10 区掘削完掘。墳丘基成石は良好に残存。
2. 14 (木)
完掘写真撮影。広報広聴課のビデオ撮影。
2. 15 (金)
雨天のため、現地調査中止。
2. 18 (月)
雨天のため、現地調査中止。
2. 19 (火)
橿原市史跡等調査保存整備検討委員会開催。9 区で検出した石敷は、外堀と断言しない方がよいことと、10 区で検出した掘削は未完掘の可能性もあるので、確認のために西壁を地山に到達するまで断ち割りを行うことに加え、柱穴も半蔵することが現時点での見解及び今後の調査方針となった。
2. 20 (水)

- 報道発表。完掘写真撮影のための清掃。
- 2.21 (木)
完掘写真撮影。3D測量。現地説明会準備。葛蒲町、五条野町住民への現地説明会。
- 2.22 (金)
完掘写真撮影。現地説明会準備。
- 2.23 (土)
現地説明会。581名来場。
- 2.25 (月)
補足調査(9・10区柱穴断ち割り)。遺物なし。平断面図作成。
- 2.26 (火)
10区掘割断ち割り調査。掘割は①→②の工程で完成させる。
①地山を掘削する。②粘質土とバイラン土を互層に積む。なお、②の粘質土は断面形から土壌の可能性がある。
- 2.27 (水)
9区平断面図作成。
10区掘割断ち割り調査。掘割の底面に整地部分の幅に溝が掘られていることが判明。柱穴写真撮影。
- 2.28 (木)
9・10区平・断面図作成。漆塗籠棺残片の保存に関する研究会(東京国立博物館主催)を開催。
- 3.1 (金)
9区埋め戻し準備。
10区平・断面図作成。午後は天候不順のため調査中止。
- 3.4 (月)
10区平・断面図作成。埋め戻し準備中。
- 3.5 (火)

- 9区版築状盛土の精査。平面検出で突き棒痕跡の確認を試みるも、確認できず。埋め戻し準備。
- 10区断面図作成。
- 3.6 (水)
完了検査。
9区埋め戻し。
10区平断面図作成。
- 3.7 (木)
9区埋め戻し。
10区補足図面作成。
- 3.8 (金)
10区掘割埋土中の断面状の土層の調査。噴霧器で表面の砂を洗い流したところ、粘土表面に布目痕はないが、皺状の凹凸があることを確認できた。
10区埋戻し。
- 3.11 (月)
10区埋め戻し。器材撤収。
- 3.12 (火)
10区埋め戻し。器材撤収。
- 3.13 (水)
10区埋め戻し完了。器材撤収。
- 3.14 (木)
器材撤収。
- 3.15 (金)
周辺清掃。器材撤収。現地調査終了。



図1 葛蒲池古墳位置図

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 地理的環境

菖蒲池古墳は、奈良県橿原市菖蒲町に所在する。菖蒲町は橿原市の南東部に位置し、高市郡明日香村と接する。橿原市の地形を概観すると、市の東側から南東側にかけては龍門山系から派生する低丘陵の端部にあたり、市の北西部に向かって南東から北西に低くなる沖積地となる。菖蒲町は、龍門山系から派生する低丘陵上に位置する。この低丘陵は小支谷が発達し、谷地形が丘陵の奥深くにまで複雑に入り込んでいるため、様々な方向に延びる小さな尾根筋の集合とでもいうような形状を呈する。またこれらの尾根筋には、長年の堆積及び侵食作用による尾根筋の分断が認められる。甘樫丘や雷丘をはじめとする橿原市から明日香村小山周辺にかけて点在する小丘陵は、このようにして形成されたものである。丸山古墳や植山古墳、菖蒲池古墳等の古墳は、いずれもこの尾根筋上に立地する。

菖蒲池古墳は、細川谷から高取川に向けて東西に延びる谷地形によって形成された小丘陵の南斜面に立地している。この谷地形は現在の県道多武峯見瀬線にあたる。また谷を挟んで古墳のほぼ南には、野口ノ大墓古墳（天武・持統天皇陵）が位置する。

なお、菖蒲池古墳周辺は近年の宅地造成により、当時の丘陵の形状を見ることはできない。



図2 菖蒲池古墳と周辺の地形（S = 1/8,000。橿原市教育委員会 2014 より転載）

第2節 歴史的環境

橿原市には縄文時代以来、多くの遺跡が分布する。

縄文時代は、橿原の黎明期といえる時代で、晩期になると人々の活動が活発になる。橿原遺跡は、畝傍山東麓の平地に所在する集落遺跡である。遺跡からは、土器や土偶、獣骨や石器など、多様な遺物が出土している。特に土器には、東北地方の亀ヶ岡式土器も含まれ、広域に及ぶ交流を示している。また、橿原遺跡は「橿原式土器」の標識遺跡でもある。橿原式土器は、七宝形文を施文する土器で、大和の当該期を代表する土器型式であるだけでなく、中国地方から関東地方まで分布するため、当時の地域間交流を解明するうえでも重要である。また、橿原市の西部には、新堂遺跡や観音寺本馬遺跡といった集落遺跡がある。

弥生時代になると、主に河川を単位とした集落が営まれる。曾我川や飛鳥川、寺川と米川といった河川には、それぞれ新堂遺跡や川西根成柿遺跡、四分遺跡、坪井・大福遺跡がある。これらの遺跡の中には、川西根成柿遺跡や四条シナノ遺跡のように弥生時代前期のうちに廃絶する集落がある一方で、坪井・大福遺跡のように弥生時代を通して存続する集落もある。なお、菖蒲池古墳周辺の丘陵上では、当該期の集落は確認されていない。

古墳時代になると遺跡数が増加し、橿原市内においても集落遺跡や古墳、古墳群などが数多く存在する。調査地周辺では丘陵の縁辺部において、古墳時代前期から中期に属する遺跡が点在する。古墳時代中期になると、明日香村内だけでなく橿原市内でも、新堂遺跡や内膳・北八木遺跡、四条遺跡など渡来系遺物や鋳造関連遺物が出土する遺跡が散見されるようになる。特に新堂遺跡では、朝鮮半島南部に位置する咸安で製作されたと考えられる陶質土器が出土している点が注目される。菖蒲池古墳の所在する丘陵の縁辺部にも、渡来系遺物や鋳造関連遺物が出土する遺跡がある。藤原京東京十一一条一坊や丈六南遺跡などがこれにあたり、韓式系土器の他、鞠の羽口や鉄鏃が出土している。古墳は、前期古墳としてスイセン塚古墳や新沢千塚 500 号墳、弁天塚古墳があるものの、古墳の数としては少数である。古墳はむしろ中期に増加し、平地部には四条古墳群や内膳古墳群、曲川古墳群、南曾我遺跡などが、丘陵部には新沢千塚古墳群が分布する。特に新沢千塚 126 号墳はシルクロードとの関連を示す遺物が多く出土したことで有名である。また、菖蒲池古墳の周辺にも大和で最後の前方後円墳で、蘇我稲目の墓との説もある丸山古墳がある。

飛鳥時代には、宮が明日香村大字宮を中心におかれ、その周辺には、宮殿に関連する施設や寺院などが多く造られる。明日香村内においては、飛鳥京跡苑池遺構や酒船石遺跡、飛鳥水落遺跡や石神遺跡等の宮殿関連遺跡の他、飛鳥寺や川原寺、橘寺等多くの寺院が分布する。甘樫丘陵遺跡においても、当該期の石敷遺構や焼土をはじめとする様々な遺構が検出されている。飛鳥京の周辺部にあたる橿原市域でも、飛鳥時代の遺跡は多く、菖蒲池古墳の北東の丘陵には、皇子の邸宅と公的施設と考えられる五条野内垣内・向イ遺跡がある他、和田廃寺や田中廃寺などの寺院が分布している。特に阿倍山田道の周辺は、蘇我氏に関わる邸宅や遺跡が多い地点である。

天武天皇により、天武 5（676）年に計画された藤原京は、天武の死による中断を経て、妻の持統天皇による持統 8（694）年の遷都をもって完成する。藤原京は東西 5.3 km、南北 4.8 km の方形の京城を持つ、日本最初の都城であるが、その南限の様相についてはあまり分かっていない。しかし、菖蒲池古墳と谷を挟んだ東側隣接地の奈良県立明日香養護学校内では、「旦波国」荷札木簡や土器等が

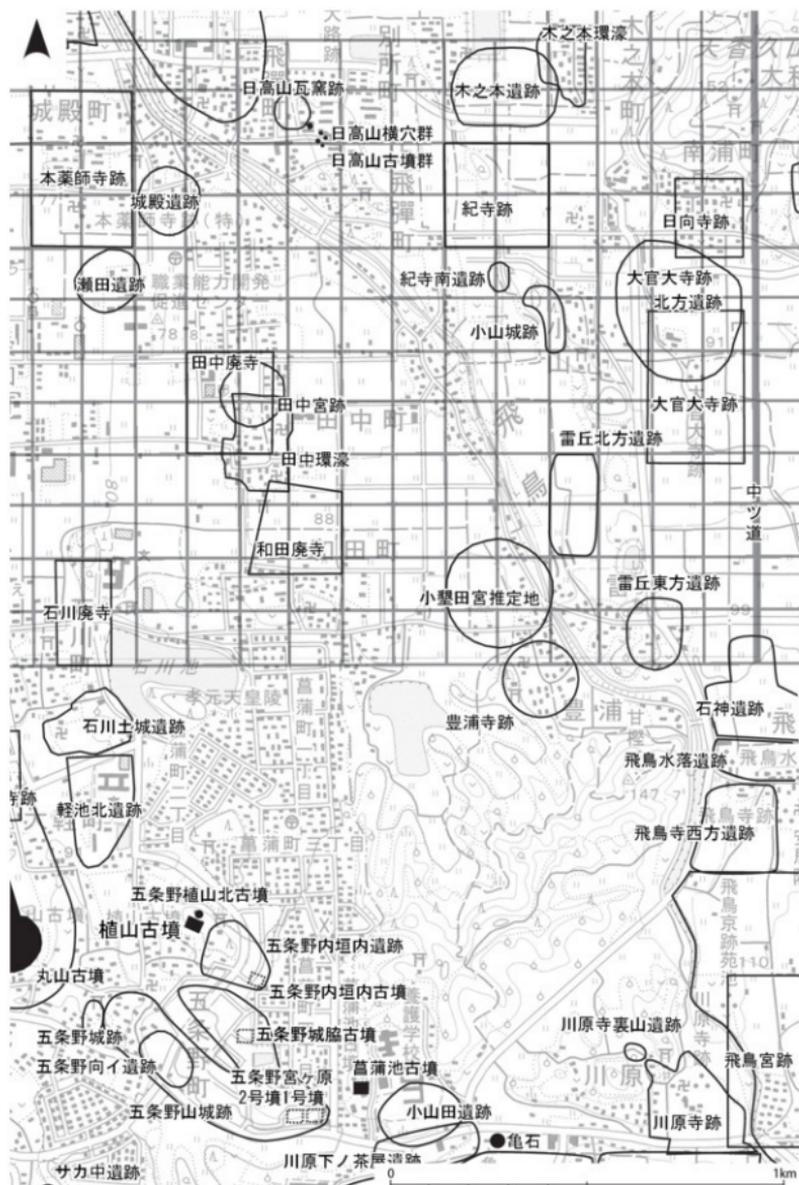


図3 調査地と周辺の遺跡 (S = 1/12,500)

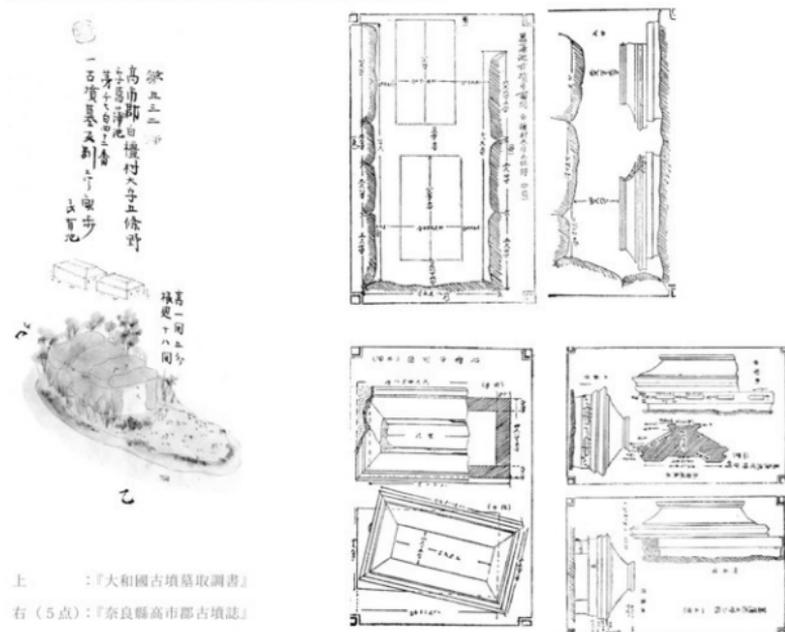
出土しており、この場所に藤原宮期の遺跡があったことが明らかとなっている。

終末期の古墳は、菖蒲池古墳の所在する丘陵の一角に多く認められる。特に菖蒲池古墳を南限とする丘陵上には、植山古墳をはじめ五条野宮ヶ原1・2号墳があるが、これらの古墳は墳形が方墳を中心とする点で共通し、この地域に隣接して蘇我氏の邸宅が存在したと考えられる事から、この一帯を蘇我氏の墓域とする意見もある。また、菖蒲池古墳の築造された丘陵と谷を挟んだ丘陵にも、多くの終末期古墳が点在する。しかしその性格は、菖蒲池古墳を南限とする丘陵に築造された古墳とは大きく異なり、野口ノ王墓古墳（天武・持統天皇陵）や中尾山古墳、高松塚古墳といった、天皇陵を含む古墳から形成される。

この様に橿原市は、明日香村とともに飛鳥時代から藤原京の時期にかけて日本の政治、経済の中核の地域となったが、平城京遷都以降は急速に田園化した。さらに中世以降は現代にまでつながっていく環濠集落の形成が始まり、古代以前の面影は失われていったのである。

参考文献（報告書・発掘調査概報は除く）

- 白石太一郎・前岡実知雄 1973「明日香遺跡学校校庭出土の本簡」『青陵22』奈良県立橿原考古学研究所
 竹田政敏 2001「五条野古墳群の形成とその被葬者についての推説」『橿原考古学研究所紀要 考古学論叢』第24冊
 河上邦彦 2005「大和の終末期古墳の偏年と分布」『大和の終末期古墳』学生社



上 : 『大和國古墳墓取調書』
 右(5点) : 『奈良縣高市郡古墳誌』

図4 菖蒲池古墳における初期の記録

第三章 研究史

菖蒲池古墳は、明治時代には石室の天井石が露出した状態となっていた。明治26(1893)年発行『大和国古墳墓取調書』や、大正12(1923)年発行『奈良縣高市郡古墳誌』に、石棺や石室の記載がある(図4)。石室内の調査は、大正14(1925)年に上田三平によって実施され、その成果は昭和2(1927)年発行『奈良縣に於ける指定史蹟 第1冊』に記載された。この中では現在は確認できない棺台の存在が記述されていることから、部分的に発掘調査を実施したのかもしれない。

古墳の本格的な調査はその後行われず、昭和60(1985)年に橿原市教育委員会による石室周辺の測量調査の他には、昭和63(1988)年に河上邦彦らによって実施された石室内の測量調査があるのみであった。しかし墳丘部分の地形改変が激しいため、地形測量からは菖蒲池古墳の墳形や規模を決定づける成果は得ることができず、主に石室構造や石棺の形状分析を通して、その築造年代を推定することしかできなかった。その中で推定される菖蒲池古墳は、築造時期が7世紀半ばの直径約30mの円墳又は一辺20m余りの方墳で、被葬者は蘇我倉山田石川麻呂とその長男の興子である可能性も指摘されている。

その後、橿原市教育委員会が平成20(2008)年に実施した菖蒲池古墳一帯の地形測量(図5)では、先行研究でも指摘された石室背面から東に延びる「冂」字形の丘陵のカット面の他に、史跡南端部で北西方向に向かって弧を描く地形の落ちを確認している。しかしこの調査でも墳丘の形状に関する手掛かりは得られなかった。以上の経緯から、範囲確認調査によって、古墳自体の時期や形状だけでなく、菖蒲池古墳における諸問題の解決が期待されることとなった。

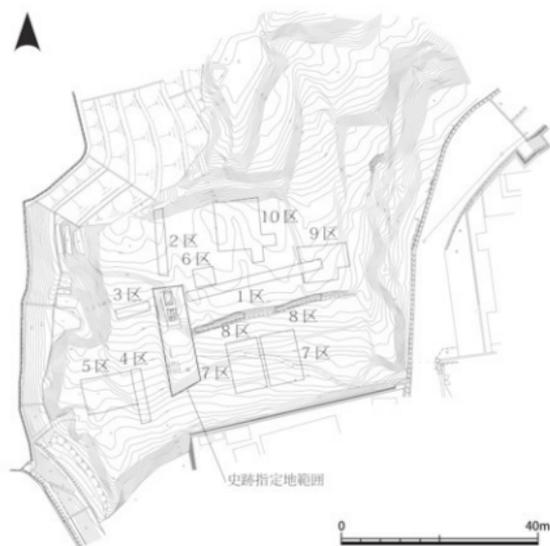


図5 菖蒲池古墳の地形と調査区位置 (S = 1/1,000)

第IV章 発掘調査の成果

本報告では、2009年度から2012年度までの4次にわたる発掘調査の成果を報告する。報告にあたっては、古墳の部位毎に複数の調査区の調査成果をまとめて報告する方が分かりやすいが、発掘調査では、調査の進展に従い明らかになった問題点を解決するために、次年度の調査計画をたてた。そこで本報告書では、各調査区毎に調査成果をまとめることとする。

発掘調査では、上層遺構として、各調査区において近世の素掘溝や溝を検出した。遺構の多くは畑作の耕作溝であるため、上層遺構の報告は一部の遺構を除いて割愛する。

土層の記述は、土層の性質毎にまとめて記述する。まとめた層番号はローマ数字で表記し、異なる調査区でのローマ数字の層番号は共通させていない。また、土層の番号表記について、5区のみは調査担当者の意見を尊重し、通し番号を採用していない。

調査区の設定位置は（図5）の通りである。

第1節 1区（古墳東辺）

1区は、古墳東辺の調査のために設定した。本来ならば調査区は石室主軸に対して主軸を平行または直交して設定すべきものであるが、1～4区は、調査ときに生育していた樹木の伐採を最小限に止めたために、調査区が石室主軸に対して平行または直交していない。

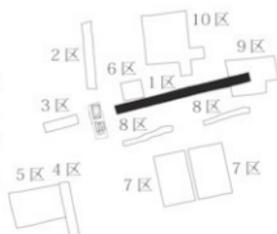


図6 1区位置図

1 基本土層

調査区北壁土層（図7）は堆積状況や土質から、大きくI層：腐植土及び旧耕土、II層：掘割埋土、III層：墳丘構築土、IV層：地山の4層に分類できる。

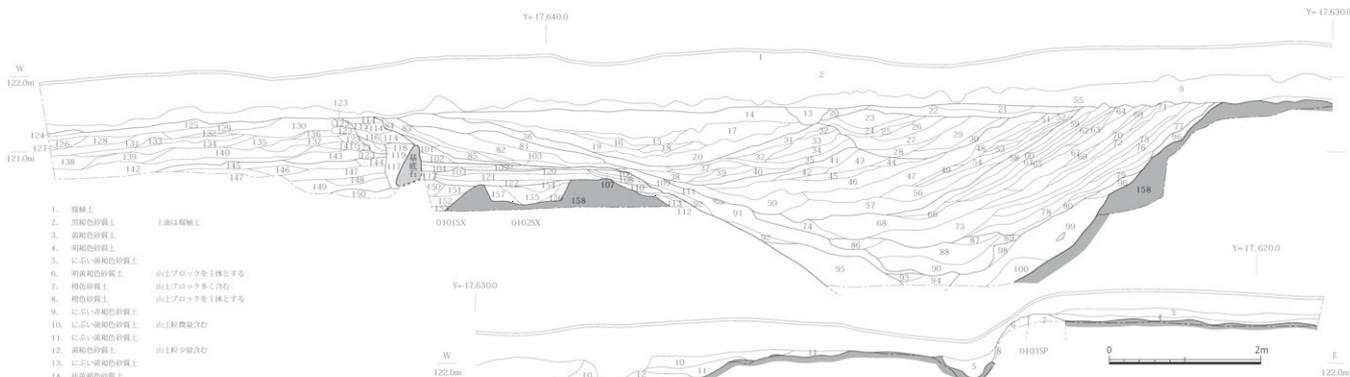
I層（1～5・9～13・97層）は、腐植土及び黒褐色砂質土、褐色砂質土を主体とする。出土遺物に陶磁器の細片などを含むため、近世以降の層であることは明らかである。上面の標高は、調査区東端で123.0m、調査区西端で121.9mである。

II層（14～96・98～102層）は、大きく2層にまとめることができる。

上層（14～80層）は地山（IV層）に由来する黄褐色パイラン土を含む褐色砂質土を主体とし、各層が薄い。土層からは埋め戻しの際の作業の単位として5つの単位（14～20層、21・22層、23～30層、31～57層、58～80層）を認めることができる。堆積状況から、掘割の埋め戻しは主に掘割の東側から行われたと考えられる。下層（81～96・98～102層）も大きく2層にまとめることができる。上層は砂質が極めて強い砂質土からなり、下層は黄褐色砂質土やにぶい赤褐色粘質土からなる。特に下層の堆積土の中には、墳丘完成後の第1次堆積層（101・102層）が確認できる。

下層は層が非常に厚く、人為的な埋め戻し痕跡が顕著な上層とは対照的である。上面の標高は121.5mである。

III層（103～157層）は、褐色～黄灰色砂質土を主体とし、地山（IV層）に由来するパイラン土を含む。



1. 礫層上
2. 黄褐色砂質土 土壌は礫層上
3. 黄褐色砂質土
4. 明褐色砂質土
5. 低い・黄褐色砂質土
6. 明黄褐色砂質土 山上ブロッケを主体とする
7. 褐色砂質土 山上ブロッケを主体とする
8. 褐色砂質土 山上ブロッケを主体とする
9. 低い・黄褐色砂質土
10. 低い・黄褐色砂質土 山上積層状含む
11. 低い・黄褐色砂質土
12. 黄褐色砂質土 山上積層状含む
13. 低い・黄褐色砂質土
14. 黄褐色砂質土
15. 低い・黄褐色砂質土 礫層・泥状物・山上積少量含む
16. 低い・黄褐色砂質土 山上ブロッケ少量含む
17. 黄褐色砂質土 礫層や砂・山上積含む
18. 黄褐色砂質土 山上積層状含む
19. 明黄褐色砂質土 礫層・泥状物・山上ブロッケ少量含む
20. 黄褐色砂質土 バイラン土層・山上積含む
21. 低い・黄褐色砂質土
22. 低い・黄褐色砂質土 山上積含む
23. 低い・黄褐色砂質土 バイラン土層・山上積や砂含む
24. 黄褐色砂質土 バイラン土層少量・山上積や砂含む
25. 黄褐色砂質土 バイラン土層少量・山上積や砂含む
26. 黄褐色砂質土 バイラン土層・山上積少量含む
27. 黄褐色砂質土 バイラン土層・山上積や砂含む
28. 低い・黄褐色砂質土 バイラン土層・山上積や砂含む
29. 黄褐色砂質土 バイラン土層・山上ブロッケ少量含む
30. 黄褐色砂質土 バイラン土層・山上ブロッケ少量含む
31. 低い・黄褐色砂質土 バイラン土層・山上積や砂含む
32. 低い・黄褐色砂質土 バイラン土層・山上積や砂含む
33. 黄褐色砂質土 バイラン土層・山上積や砂含む
34. 低い・黄褐色砂質土 バイラン土層・山上ブロッケ少量含む
35. 低い・黄褐色砂質土 バイラン土層・山上積や砂含む
36. 明黄褐色砂質土 礫層・泥状物・山上積少量含む
37. 明黄褐色砂質土 礫層・泥状物・山上積少量含む
38. 黄褐色砂質土 礫層・泥状物・山上積少量含む
39. 黄褐色砂質土 バイラン土層少量・山上積や砂含む
40. 黄褐色砂質土 山上積少量含む
41. 明褐色砂質土 バイラン土層・山上ブロッケ多く含む
42. 明褐色砂質土 バイラン土層・山上積や砂含む
43. 低い・黄褐色砂質土 バイラン土層・山上積や砂含む
44. 低い・黄褐色砂質土 バイラン土層・山上積や砂含む
45. 明褐色砂質土 山上ブロッケを主体とする
46. 明褐色砂質土 山上ブロッケを主体とする
47. 低い・黄褐色砂質土 山上ブロッケを主体とする
48. 低い・黄褐色砂質土 バイラン土層・山上積含む

49. 褐色砂質土 山上ブロッケ少な
50. 褐色砂質土 山上ブロッケ少量含む
51. 褐色砂質土 バイラン土層・山上積少量含む
52. 褐色砂質土 バイラン土層少量・山上積少量含む
53. 褐色砂質土 バイラン土層・山上積少量含む
54. 黄褐色砂質土 バイラン土層少量・山上積少量含む
55. 低い・黄褐色砂質土 山上積や砂含む
56. 低い・黄褐色砂質土 バイラン土層少量・山上積や砂含む
57. 低い・黄褐色砂質土 バイラン土層少量・山上積や砂含む
58. 黄褐色砂質土 バイラン土層少量・山上積少量含む
59. 黄褐色砂質土 バイラン土層少量・山上積少量含む
60. 黄褐色砂質土 バイラン土層少量・山上積少量含む
61. 黄褐色砂質土 バイラン土層少量・山上積少量含む
62. 黄褐色砂質土 バイラン土層少量・山上積少量含む
63. 黄褐色砂質土 バイラン土層少量・山上積少量含む
64. 明褐色砂質土 バイラン土層少量・山上積少量含む
65. 黄褐色砂質土 バイラン土層少量・山上積少量含む
66. 明黄褐色砂質土 山上ブロッケを主体とする
67. 明褐色砂質土 礫層・泥状物・山上積少量含む
68. 褐色砂質土 山上積層状含む
69. 低い・黄褐色砂質土 バイラン土層少量・山上積少量含む
70. 褐色砂質土 山上積層状含む
71. 低い・黄褐色砂質土 バイラン土層少量・山上積少量含む
72. 低い・黄褐色砂質土 バイラン土層少量・山上積少量含む
73. 褐色砂質土 バイラン土層・泥状物・山上積少量含む
74. 低い・黄褐色砂質土 山上積層状含む
75. 低い・黄褐色砂質土 山上積層状含む
76. 黄褐色砂質土 バイラン土層少量・山上積少量含む
77. 低い・黄褐色砂質土 泥状物・山上積少量含む
78. 褐色砂質土 バイラン土層少量・山上積少量含む
79. 褐色砂質土 山上積層状含む
80. 褐色砂質土 山上積層状含む

81. 低い・黄褐色砂質土 山上積や砂含む
82. 低い・黄褐色砂質土 山上ブロッケ少量含む
83. 低い・黄褐色砂質土 山上ブロッケを主体とする
84. 低い・黄褐色砂質土 山上ブロッケを主体とする
85. 低い・黄褐色砂質土 山上ブロッケを主体とする
86. 明褐色砂質土
87. 明褐色砂質土
88. 明褐色砂質土
89. 黄褐色砂質土 砂質層に多い
90. 明褐色砂質土 砂質層に多い
91. 黄褐色砂質土 砂質層に多い
92. 低い・黄褐色砂質土 砂質層に多い
93. 明褐色砂質土
94. 明褐色砂質土 砂質層に多い
95. 低い・黄褐色砂質土 砂質層に多い
96. 低い・黄褐色砂質土 砂質層に多い
97. 低い・黄褐色砂質土 砂質層に多い
98. 低い・黄褐色砂質土
99. 低い・黄褐色砂質土
100. 明褐色砂質土 山上ブロッケ少量含む
101. 低い・黄褐色砂質土
102. 明褐色砂質土
103. 低い・黄褐色砂質土
104. 低い・黄褐色砂質土
105. 明褐色砂質土
106. 明褐色砂質土
107. 褐色砂質土
108. 褐色砂質土
109. 褐色砂質土
110. 褐色砂質土
111. 褐色砂質土
112. 褐色砂質土

113. 褐色砂質土
114. 明褐色砂質土
115. 低い・黄褐色砂質土
116. 黄褐色砂質土
117. 低い・黄褐色砂質土
118. 低い・黄褐色砂質土
119. 黄褐色砂質土
120. 低い・黄褐色砂質土
121. 黄褐色砂質土
122. 褐色砂質土
123. 明褐色砂質土
124. 低い・黄褐色砂質土
125. 黄褐色砂質土
126. 黄褐色砂質土
127. 褐色砂質土
128. 低い・黄褐色砂質土
129. 黄褐色砂質土
130. 黄褐色砂質土
131. 褐色砂質土
132. 低い・黄褐色砂質土
133. 低い・黄褐色砂質土
134. 低い・黄褐色砂質土
135. 褐色砂質土
136. 低い・黄褐色砂質土
137. 明黄褐色砂質土
138. 黄褐色砂質土
139. 黄褐色砂質土
140. 低い・黄褐色砂質土
141. 黄褐色砂質土
142. 褐色砂質土
143. 黄褐色砂質土
144. 明褐色砂質土

145. 褐色砂質土 山上積少量含む
146. 黄褐色砂質土 山上積や砂含む
147. 黄褐色砂質土 山上積含む
148. 明黄褐色砂質土 山上ブロッケ多く含む
149. 明黄褐色砂質土 山上ブロッケを主体とする
150. 明黄褐色砂質土 山上積や砂多く含む
151. 黄褐色砂質土 山上積含む
152. 褐色砂質土 山上積や砂含む
153. 明褐色砂質土 山上ブロッケ少量含む
154. 明黄褐色砂質土 バイラン土層少量含む
155. 低い・黄褐色砂質土 バイラン土層少量含む
156. 黄褐色砂質土 山上ブロッケ含む
157. 低い・黄褐色砂質土 山上ブロッケ多く含む
158. 明黄褐色砂質土 山上ブロッケを主体とする

図7 1区北嶺土層図(S=1/50)

堆積状況から、墳丘構築に関わる土層（120～157層）と墳丘化粧に関わる土層（103～119層）の2層にまとめることができる。

墳丘構築に関連する土層は層の単位が粗く、整地などを行いつつ墳丘の大まかな形を整えている。また墳丘構築の際の土層のうち、最も外側にあたる123層は、楕円形の土を斜めにカットした形状である。墳丘化粧に関わる土層は、基底石の据え付けに関する土層（117～119層）と、墳丘斜面及び上段墳丘裾平坦面の仕上げに関する土層（103～116層）に分けられる。基底石の据え付けは、墳丘構築後に行われる。基底石よりも一回り大きな掘方を掘り基底石を据え、掘方を埋め戻して完成させる。

墳丘斜面上は、褐色粘質土及び赤褐色粘質土を主体とする土で化粧され、114層は、123層と同様の形状を呈する。なお本調査区では、土層観察で版築の痕跡は確認できなかった。また、上段墳丘裾平坦面の完成は、下段墳丘斜面の完成後である。上面の標高は121.5mである。

IV層は地山からなる。墳丘の下段及び掘削と古墳の東側で確認した。風化が進み非常に軟らかいパイラン土からなる部分と岩盤質で硬い部分がある。出土遺物はない。上面の標高は調査区西部で120.6m、中央部で121.7m、東端で122.5mである。

なお、本調査区で検出した遺構は全てI層下面で検出している。

2 検出遺構

検出遺構は、素掘溝、墳丘、掘削、溝、土坑、柱穴である。このうち素掘溝が上層遺構であり、その他の遺構は下層遺構である。なお、本調査区の調査では安全面を考慮して、墳丘裾基底石及び掘削底面の検出は断念した。

(1) 上層遺構

素掘溝は、東西方向を主軸とするもので調査区の全域で確認した。幅約0.5m、深さ約0.1mを残す。出土遺物には磁器や須恵器、土師器があるが、いずれも細片である。遺構の形状及び出土遺物から、近世以降の耕作溝と考えられる。

(2) 下層遺構

検出遺構には、墳丘外表、掘削、落ち込み、柱穴がある（図8）。墳丘は石室との位置関係から古墳東辺と考えられる。落ち込みは、土層観察から古墳築造に関わる遺構と考えられる。また、柱穴は調査時にはどのような遺構の一部なのか不明であったため、遺構の概略のみを本項で記し、詳細は9区で記述する。

①墳丘外表

遺構の形状と遺構の位置関係から、検出したのは下段墳丘斜面、上段墳丘裾平坦面、上段墳丘裾基底石、上段墳丘斜面である。

下段墳丘斜面は、東西幅2.6m、高さ1.5mを検出した。墳丘裾基底石は未検出のため、正確な高さは不明である。傾斜は一定で、傾斜角は30°である。斜面上には石材や貼石等の痕跡はなく、褐色粘質土によって化粧されている。斜面上及び化粧土内からの出土遺物はない。

上段墳丘裾平坦面は、東西幅2.9mを測り、南北長1.4mを検出した。平坦面は裾が南北方向に直線的に延びる。上面には一辺0.1mの礫敷を敷設する。平坦面からの出土遺物はほぼ皆無である。上

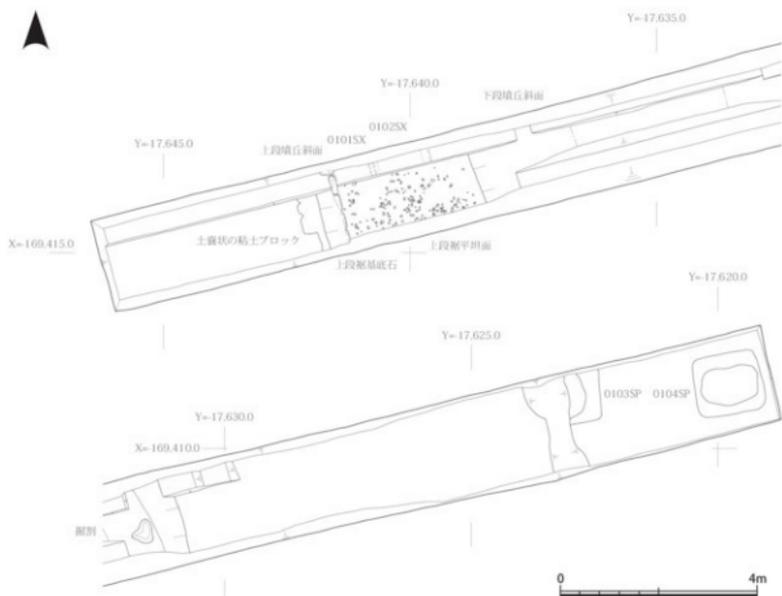


図8 1区平面図（上層遺構を除く。S = 1/100）

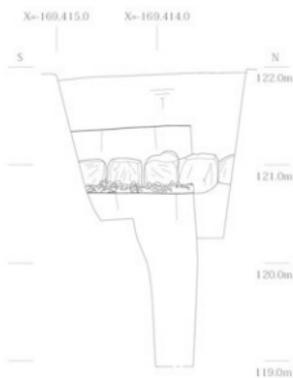


図9 墳丘立面図（S = 1/50）

面の標高は上段墳丘裾基底石付近で 120.9m である。

上段墳丘裾基底石は、石英閃緑岩の自然石を半加工したものである。南北方向に幅 1.5m、5 石を検出した。基底石は 1 段で、平らな面を外に向けて立て並べている。地上に露出したそれぞれの基底石の大きさは、幅 0.4m、高さ 0.2m だが、基底石の据え付けによって墳丘下に埋まった部分を含めると、高さ 0.5m 程を測る（図 9）。基底石の上面は化粧土で覆われ、古墳完成時には基底石は側面しか見えていなかったと考えられる。上面の標高は 121.1m である。

上段墳丘斜面は、東西幅 0.6m、高さ 0.4m を検出した。傾斜は一定で、傾斜角は 34.5° である。下段墳丘斜面と同様、斜面上には貼石等の痕跡はなく、明赤褐色粘質土によって化粧されている。この明赤褐色粘質土はブロック状のまとまりを縦横に並べたもので、各ブロックは幅 0.4m、奥行き 0.3 ~ 0.5m、高さ 0.15m で、墳丘の中心部に近い辺は丸味を帯びる（図 8）。斜面上及び化粧土内からの出土遺物はない。

②掘割

掘割は地山（IV層）が露出した法面を検出した。法面は緩

やかな階段状の凹凸を持ちながら東から西に下がり、その規模は東西 2.7m 以上、深さ 2.4m 以上で、傾斜角は 41° である。掘削内は、人為的な埋め戻しの堆積状況を示し、掘削の外側から土を入れたことが明らかである。掘削の仕上げに関し、本調査区では地山(Ⅳ層)と掘削埋土(Ⅱ層)の間に盛土はない。出土遺物には土師器や須恵器、土製品、瓦、磚がある。図 7-94 層から出土した榛原石の磚は、東から西に向けて滑り落ちた出土状況であるため、掘削の外側から投棄された可能性がある。

③ 落ち込み

落ち込み(0101SX)は、地山(Ⅳ層)上面から掘り込まれる。幅 5.6m 以上で、東から西に下がる。埋土(図 7-150~153 層)は褐色砂質土などからなる。断ち割り調査のため、平面形は不明だが、石室方向に向かって掘られた落ち込みの東端部であることが確実で、石室を構築するための墓壇の可能性はある。出土遺物はない。

落ち込み(0102SX)は、落ち込み(0101SX)の東で検出した。掘り込み面は落ち込み(0101SX)と同じく地山(Ⅳ層)である。南北方向に延び、幅 1.2m、深さ 0.4m で、断面形は逆台形である。埋土(図 7-154~157 層)は灰黄褐色砂質土などからなる。出土遺物はなく、石や礫も含まれていない。

④ 柱穴

柱穴(0103SP)は、平面形が一辺 1.3m の隅丸方形を呈し、深さ 0.6m を残す。遺構の西半は破壊され、失われている。柱は抜き取られている(図 7-6 層)。掘方埋土(図 7-7・8 層)は、橙褐色砂質土を主体とする。出土遺物はない。

柱穴(0104SP)は、平面形が一辺 1.3m の隅丸方形を呈する。不整形の柱抜き取り穴がある。遺構の保護のために調査は検出のみにとどめたため、柱穴(0103SP)と一連の遺構である以外は不明である。

3 出土遺物

土師器(1~6)、須恵器(7~9)、土製品(10・11)、瓦(12・13)、磚(14~18)が出土した(図 10)。いずれも掘削埋土(Ⅱ層)からの出土である。

土師器環 C(1)は、口径 9.9 cm、口縁部と底部の境に稜をもち、口縁部内面に沈線がめぐる。器面調整は、外面は底部が横ヘラ削り、口縁部が横ナデで、内面は一段放射暗文である。

土師器環 G(2)は、口径 10.5 cm、口縁部は緩やかに開き、口縁部に至る。器面調整は無調整の底部外面を除き、横ナデである。

土師器環 A(3)は、口径 18.0 cm、平底の底部から直線的に立ち上がり、端部を面取りし、肥厚させた口縁部に至る。器面調整は、外面は底部から口縁部の一部が横ヘラ削り、口縁部上半が粗い横ミガキで、内面は二段放射暗文であるが、底面の螺旋暗文は破片のため確認できない。

土師器環 C(4)は、口径 15.1 cm、丸底気味の底部から内彎気味に立ち上がり、内面に面を持った口縁部に至る。器面調整は、内外面共にナデである。

土師器高環(5)は、環部の一部のみの残存である。器面調整は、外面は脚部が縦ヘラ削りしている以外は、器壁が荒れて調整不明である。

土師器蓋(6)は、環 A の蓋と考えられ、つまみのみ残存する。つまみは最大径 4.3 cm、頂部が平坦で、扁平である。器面調整は内外面ともにナデである。

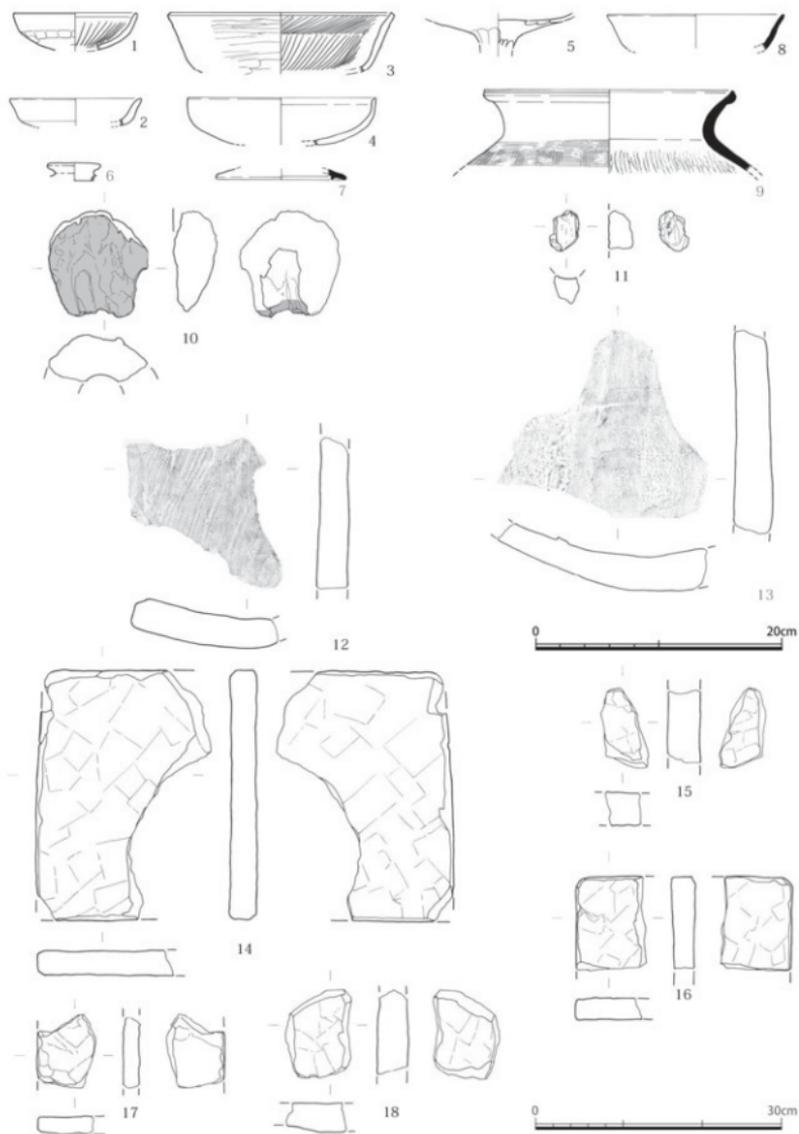


图 10 1区出土遗物 (1~13: S=1/4, 14~18: S=1/6)

須恵器蓋(7)は、坏Gの蓋で口径 10.6 cm、端部のみ残存する。かえりは口縁端部と同じ高さである。器面調整は内外面ともにロクロナデである。

須恵器坏(8)は、坏Gか坏Bで口径 14.2 cm。口縁部は開き気味に直線的に立ち上がる。器面調整は内外面ともにロクロナデである。

須恵器甕(9)は、口径 20.0 cm、やや肩の張った胴部から、短く外反する口縁部に至る。口縁端部は、外面を肥厚させ、1条の沈線をめぐらせる。器面調整は、外面は胴部がカキ目及び平行引き、口縁部がロクロナデで、内面は胴部が当て具の青海波文、口縁部はロクロナデである。

輪の羽口(10・11)は、いずれも破片である。輪の穴の口径は 3.8 cm程度と考えられる。10の外面の全面及び11の外面の一部は被熱のため発泡し、色調が黒変している。

平瓦(12・13)は、共に軟質である。12は側面を面取りし、器面調整は側面はヘラ切りである。12・13ともに表面に布目痕を残すが、12はヘラ削りて表面を調整する。裏面はいずれもナデである。

磚(14～18)は、椽原石の割石である。15・18は端部がなく、14三辺、16は二辺、17は一辺を残す。厚さは 1.5～4.1 cmと幅があるが、約 3 cm前後のものが多い。最も良好に残存するのは 14で、一辺が完存していることから、平面形が一辺 31.0 cmの方形で、厚さ 3.0 cmと推測できる。磚は割石の側面を直線的に整えて加工したもので、割石の表面は無調整である。

第2節 2区(古墳北辺)

2区は、古墳北辺の調査のために設定した。1区の調査成果から、古墳北辺及び墳丘背面の地形改変に関する遺構の検出が想定された。なお本調査区でも、安全上の理由から掘削底面の検出は行っていない。

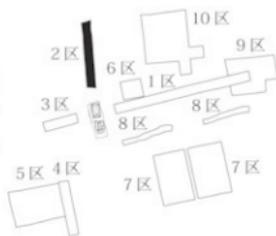


図 11 2区位置図

1 基本土層

調査区西壁土層(図 13)は堆積状況や土質から、大きく I 層:腐植土及び旧耕土、II 層:掘削埋土、III 層:墳丘構築土、IV 層:地山の 4 層に分類できる。

I 層(1～12 層)は、腐植土及び黒褐色砂質土、褐色砂質土を主体とする。出土遺物に陶磁器の細片などを含まため、近世以降の層であることは明らかである。上面の標高は、調査区北端で 124.4m、調査区南端で 122.5m である。

II 層(13～66 層)は、土質の共通性から大きく 2 層にまとめることができる。上層(13～64 層)は人為的な埋土である。褐色砂質土や黄褐色砂質土を主体とし、地山(IV 層)の黄褐色パイラン土を含む。堆積状況から、掘削の埋め戻しは墳丘側からも行われたと考えられる。下層の堆積層(65・66 層)は、墳丘完成後に上段墳丘裾平坦面に堆積した第 1 次堆積層である。上面の標高は調査区北端で 122.8m、調査区南端で 121.9m である。

III 層(67～70 層)は、にぶい赤褐色粘質土を主体とする。一部のみの検出であるため詳細は不明だが、1区と同様、それぞれの層はブロック状である可能性が想定される。それぞれのブロックの大きさは、幅 0.5m 以上、高さ 0.2m 以上である。上面の標高は 121.8m である。

IV層(71層)は、地山である。下段墳丘及び掘割で確認した。風化が進み非常に軟らかいバイルン土からなる部分と岩盤質で硬い部分がある。出土遺物はない。上面の標高は掘割側で123.2m、下段墳丘で120.7mである。

なお、本調査区で検出した遺構は全てI層下面で検出している。

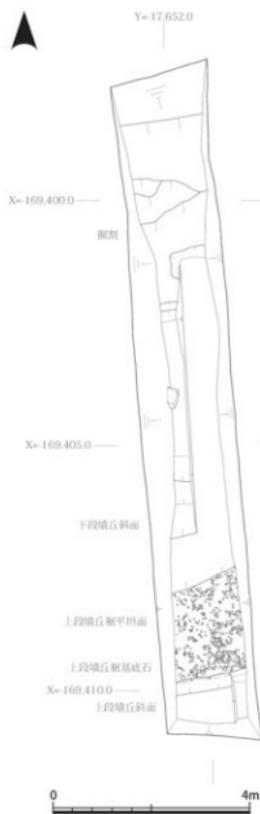


図12 2区平面図

(上層遺構を除く。S=1/100)

上段墳丘掘基底石は、石英閃緑岩を半加工したものである。東西方向に幅1.5m、4石を検出した。基底石は1段で、平らな面を外に向けて立て並べている。地上に露出したそれぞれの基底石の大きさは、幅0.4m、高さ0.3mである。基底石の上面は化粧土で覆われ、古墳完成時には基底石は側面しか見えていなかったと考えられる。上面の標高は121.3mである。

上段墳丘斜面は、南北幅0.7m、高さ0.5mを検出した。傾斜は一定で、傾斜角は35°である。斜

2 検出遺構

検出遺構は、素掘溝、墳丘外表、掘割である。このうち素掘溝が上層遺構であり、その他の遺構は下層遺構である。なお、本調査区の調査では上述のように安全面から、墳丘掘基底石及び掘割底面の検出は行わなかった。

(1) 上層遺構

素掘溝は、東西方向を主軸とするもので調査区の南半で検出した。幅約0.2m、深さ約0.1mを残す。出土遺物には磁器や須恵器、土師器があるが、いずれも細片である。遺構の形状及び出土遺物から、近世以降の耕作溝と考えられる。

(2) 下層遺構

検出遺構には、墳丘外表、掘割がある(図12)。墳丘は石室との位関係から古墳北辺である。

① 墳丘外表

遺構の形状と位置関係から、検出したのは下段墳丘斜面、上段墳丘掘基底石、上段墳丘斜面である。

下段墳丘斜面は、南北幅1.8m、高さ0.8mを検出した。墳丘掘基底石が未検出のため、正確な高さや幅は不明である。墳丘斜面は削平を受けているのか段状になっており、最も傾斜が急な地点では傾斜角32°、平均傾斜角は25°である。斜面上には貼石等の痕跡はなく、1区で確認した褐色粘質土の有無も定かではない。斜面上からの出土遺物はない。

上段墳丘掘基底石は、東西幅1.5mを測り、南北幅2.0mを検出した。平坦面は掘が東西方向に直線的に延びる。上面には一辺0.1mの角礫をやや密に敷設する。上段墳丘平坦面の礫敷の敷設は、下段墳丘斜面の完成後である。出土遺物は細片のみである。上面の標高は基底石付近で121.1mである。

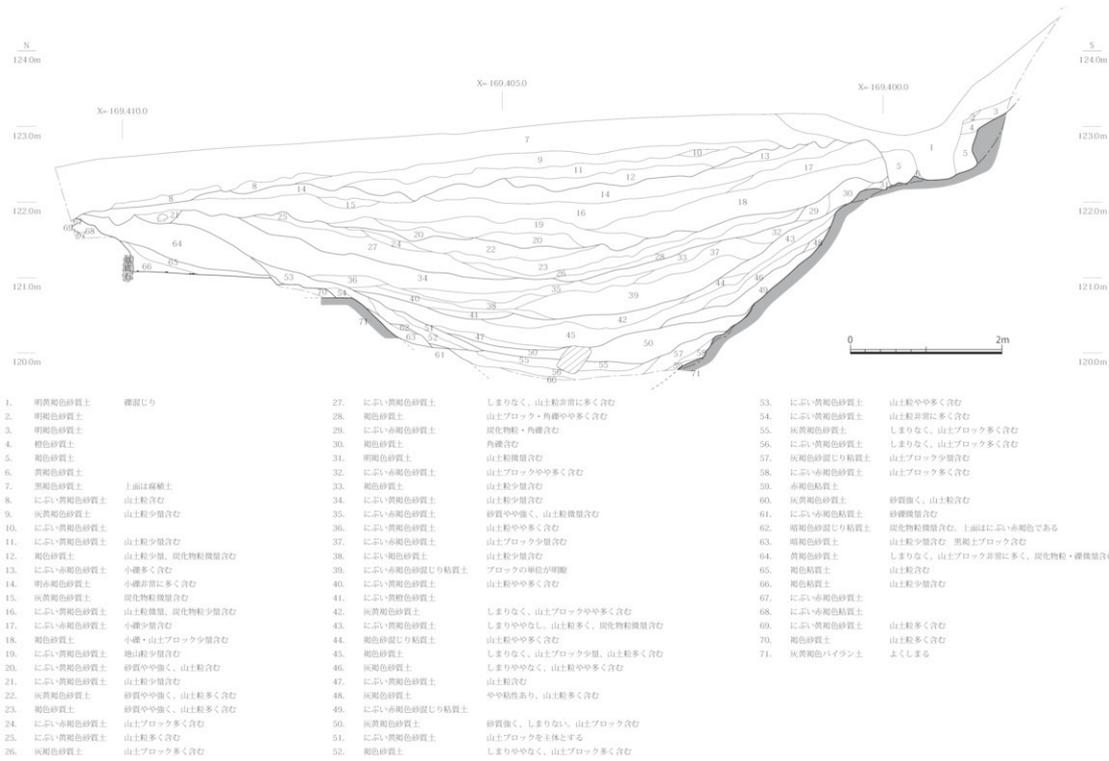


図13 2区西壁土層図(S=1/50)

面上には貼石等の痕跡はなく、にぶい赤褐色粘質土ブロックにより化粧されている。このにぶい赤褐色粘質土ブロックは、奥行き0.4m以上、高さ0.2m以上で平面形は不明である。土層観察の限りでは、1区と同様に土糞状の形態である可能性がある。斜面上からの出土遺物はない。

②掘割

掘割は地山(Ⅳ層)が露出した法面を検出した。法面は2段で北から南に下がる。段の上半は後世の削平も含まれ、古墳築造時の形態をどの程度残しているかは不明である。下段は、南北幅2.0m以上、深さ2.2m以上、傾斜は一定で、傾斜角は47°である。掘割内の堆積は、人為的な埋戻しの堆積状況を示すが、1区とは違い、古墳側と古墳外の両方から土を落としたことが明らかである。掘割の仕上げに関し、本調査区では地山(Ⅳ層)と掘割埋土(Ⅱ層)の間に盛土はない。出土遺物には土師器、須恵器、土製品、鉄滓がある。図13-21層出土の須恵器壺(22)には漆が付着している。

3 出土遺物

土師器(19・20)、須恵器(21～24)、鉄滓(25～31)が出土した。いずれも掘割埋土(Ⅱ層)からの出土である(図14)。

土師器環H(19・20)は、19が口径9.6cm、20が口径12.8cmを測る。口縁部と底部の境に稜をもち、口縁部はやや開き気味に立ち上がり、丸くおさまった口縁端部に至る。器面調整は、底部外面が無調整で、それ以外は内外面ともに横ナデである。

須恵器甕(21)は、頸部径20.8cmを測る。肩の張った胴部から屈曲し、やや開きながら立ち上がる口縁部に至る。器面調整は、外面は胴部が格子叩きだが自然軸により見えにくい。口縁部には2条の沈線と、その上部に波状文がある。内面は胴部が当て具の青海波文、口縁部はロクロナデである。

須恵器壺(22・23)は漆が付着する。22は長頸壺の胴部で、胴最大径14.0cm、頸部径4.9cm、底径9.4cmを測る。凸型の底面から屈曲して肩の張った胴部に至り、屈曲して口縁部に至る。付着した漆は黒色で、内面の広範囲と断面に付着する。器面調整は、外面が底部付近が回転ヘラ削りである以外は内外面ともロクロナデで、胴部上半には自然軸がかかる。23は、胴部の一部のみの残存で、胴最大径16.1cmを測る。内面の全面に黒色の漆が付着する。器面調整は、外面が胴下半を回転ヘラ削りする以外は、内外面ともにロクロナデである。

須恵器平瓶(24)は、口縁部のみ残存で、口径11.4cmを測る。口縁端部は内彎気味である。器面調整は、外面の口縁部に1条の沈線をめぐらせる以外は、内外面ともにロクロナデである。

鉄滓(25～31)は、椀形滓と考えられる。全ての個体を合算した総重量は1827.8gを測る。大きさはバリエーションに富み、最も小さな27は、縦3.9cm、横3.8cm、厚さ2.0cm、重さ33.4gを測り、最大の28は、縦11.5cm、横11.3cm、厚さ4.2cm、重さ601.9gを測るものの、大きくは重さ200g未満の25・27・29・30と、重さ400gを超える26・28・31の2種類に分けることができる。鉄滓は内部にスサを含み、表面には錆が発生し、発泡している箇所もある。

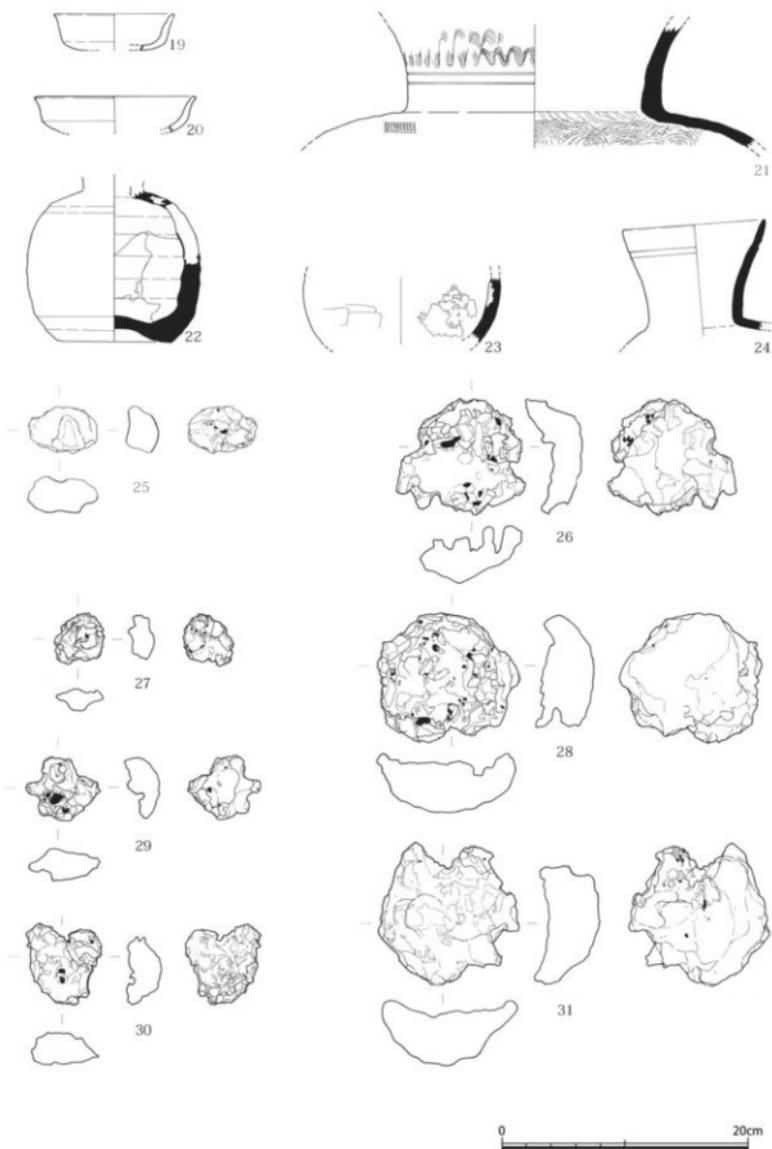


图 14 2区出土遗物 (S = 1/4)

第3節 3区（古墳西辺）

古墳西辺の調査のために設定した。本調査区でも、1・2区と同様、墳丘に関連する遺構の検出が想定されたものの、大きく削平を受け、残存状況が良好でないことが予想された。

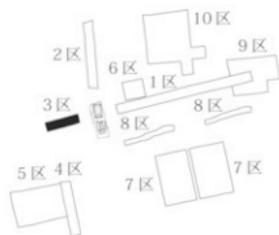


図15 3区位置図

1 基本土層

調査区北壁土層（図16）は堆積状況や土質から、大きくI層：腐植土や現代の擾乱及び旧耕土、II層：落ち込み（0302SX）・落ち込み（0303SX）埋土、III層：地山の3層に分類できる。

I層（1～3層）は、腐植土及び褐色砂質土を主体とする。1区と土質が共通するため、近世以降の層である。土師器や須恵器の細片を少量含む。上面の標高は調査区東端・西端ともに120.9mである。

II層（4～23層）は2基の遺構の埋土からなる。4～15層は、落ち込み（0302SX）埋土で褐色砂質土やにぶい黄褐色砂質土を主体とし、地山（III層）のブロックを含む層が多い。西から東に下がる落ち込みの埋土である。どの層も水平に堆積し、層の厚さも0.1mと共通することから、人為的な埋め戻し土と考えられる。上面の標高は120.6mである。16～23層は落ち込み（0303SX）埋土で、褐色砂質土やにぶい黄褐色砂質土を主体とし、地山（III層）のブロック土を含む。人為的な埋め戻し土と考えられるが、土層が西から東に向けて下がる点で、水平堆積する落ち込み（0302SX）とは異なる。上面の標高は120.6mである。

III層（24層）は、地山である。III層の下面及びI層下面で検出した。風化が進み、非常に軟らかいバイラン土からなる。出土遺物はない。上面の標高は調査区西端で120.4mである。

なお、本調査区で検出した遺構は全てI層下面で検出している。

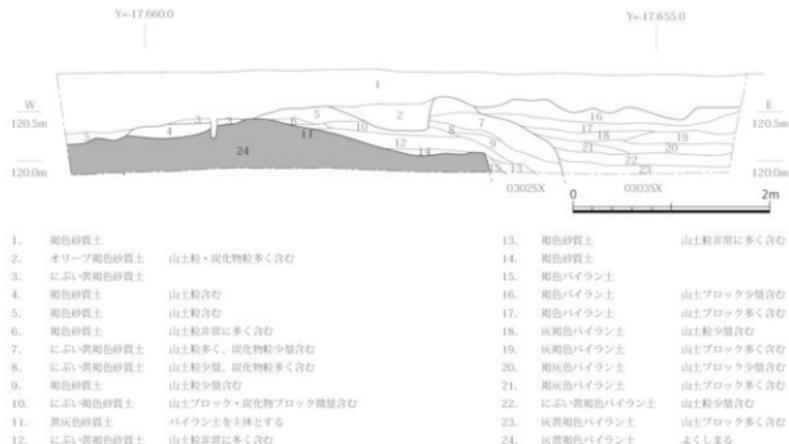


図16 3区北壁土層図（S = 1/50）

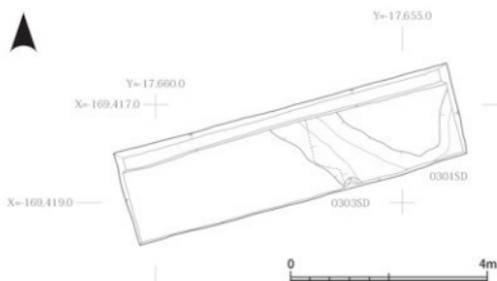


図 17 3区平面図 (S = 1/100)

2 検出遺構

検出遺構は、溝と落ち込みである。このうち溝が上層遺構であり、落ち込みは下層遺構である。

(1) 上層遺構

溝 (0301SD) は、西北西から東南東に延び、ほぼ直角に北方向に屈曲する遺構で、調査区外に延びる (図 17)。平面形は幅 1.1m、深さ 0.2m を残す。埋土はオリブ褐色砂質土で、炭化物ブロックを多く含む。出土遺物には土師器、須恵器がある。埋土から近世以降の遺構と考えられる。

(2) 下層遺構

検出遺構には、落ち込み (0302SX・0303SX) がある。

落ち込み (0302SX) は、地山 (Ⅲ層) 上面から掘り込まれる。土層観察では存在を確認できたが、埋土が地山 (Ⅲ層) と極めて類似していたため平面検出ができなかった (図 16)。しかし土層観察では掘方の西端がある可能性が高く、その場合は東西幅 3.2m 以上、深さ 0.7m 以上となる。断面形は落ち込み (0303SX) と類似するが、緩やかに下がる部分が高い。埋土 (5～15層) は落ち込み (0303SX) よりも土層の単位が粗く、掘方の西側から土を投入している。出土遺物はない。遺構の形状の共通性から掘り込み (0303SX) と一連の遺構と考えられる。

落ち込み (0303SX) は、南北方向に主軸を持ち、調査区外に延びる (図 17)。調査区内では遺構の西側を検出した。規模は全長 1.5m 以上、幅 3.0m 以上、深さ 0.7m 以上、主軸方位は $N - 13.5^\circ - W$ である。断面形は緩やかな傾斜から急激に落ちる形状である。埋土 (16～23層) は上述の通り、各層がほぼ同じ厚さで水平に堆積し、人為的な堆積であることは明らかである。掘り込み面は落ち込み (0302SX) である。出土遺物はない。落ち込み (0302SX) よりも新しい。

落ち込み (0302・0303SX) は、西側の上端のみの検出で、石室に向かって落ち込む。1区には石室方向に向けて東から西に落ちる落ち込み (0101SX) があり、落ち込み (0101SX) と落ち込み (0302・0303SX) は 1つの遺構の可能性があり、これが墓塚とすれば、その規模は東西 16.4m となる。

3 出土遺物

土師器、須恵器が少量出土しているが、いずれも細片で、器種や時期の特定は困難である。

第4節 4区（古墳南辺）

4区は、古墳南辺の調査のために設定した。墳裾や墳丘側平坦面などの遺構の検出が想定された。

1 基本土層

調査区東壁土層（図19）は堆積状況や土質から大きくI層：腐植土及び旧耕土、II層：墳丘構築土及び古墳築造時の造成土の2層に分類できる。

I層（1～15層）は、腐植土及び黒褐色砂質土、褐色砂質土を主体とする。出土遺物に陶磁器の細片などを含むため、近世以降の層であることは明らかである。15層は、基底石抜き取り穴の埋土である。上面の標高は、調査区北端で124.4m、調査区南端で122.5mである。

II層（16～60層）は、にぶい黄褐色～褐色砂質土を主体とし、地山に由来するバイラン土を含む。堆積状況から、墳丘構築に関わる土層（16～38・57～60層）と墳丘南側の整地及び古墳前庭の造成に関わる土層（39～56層）の2層にまとめることができる。

墳丘構築に関連する土層は墳丘コアの構築に関わる土層（57～60層）と墳丘外表の構築に関わる土層（16～38層）に分けることができる。この2つの土層は、上述の通り土質は共通するものの、墳丘コアに関わる土層は厚さ0.1～0.15mであるのに対し、墳丘外表に近い土層は厚さ0.1m未満と、盛土の丁寧さに違いがある。また、37・38層は基底石据え付け穴の埋土である。上面の標高は調査区北端で118.5mである。

墳丘構築前の整地及び古墳前庭の造成に関わる層は、黄褐色砂質土及び褐色砂質土を主体とし、地山に由来するバイラン土を多く含む。土層観察から、墳丘築造前の整地と古墳前庭の造成は一体であることが明らかである。基底石の据え付け（37・38層）もこの段階で行われる。土層は厚さ0.1m未満のものが多い。上面の標高は117.3mである。

なお、本調査区で検出した遺構は全てI層下面で検出している。

2 検出遺構

検出遺構は、溝、墳丘、古墳前庭である（図20）。このうち溝が上層遺構であり、その他は下層遺構である。

（1）上層遺構

溝（0401SD）は、を東西方向を主軸とし、調査区の北端で検出した。規模は南北幅1.5m、深さ0.3mを残し、断面形はU字形である。出土遺物には土師器や須恵器があるが、いずれも細片である。埋土から、近世の耕作溝と考えられる。

（2）下層遺構

検出遺構には、墳丘、古墳前庭がある。墳丘裾基底石は石室との位置関係から古墳南辺である。なお下層遺構の記述に際し、5区で本調査区の一部を含めた調査を実施しているため、本項では4区の

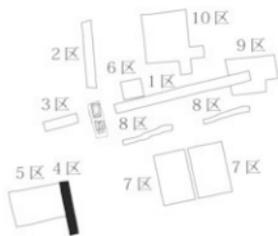


図18 4区位置図

X=109.4300

X=109.4350

S
118.0m

X=109.4400

117.0m

116.0m



1. 灰褐色砂質土

2. に近い黄褐色砂質土

3. に近い黄褐色砂質土

4. 灰褐色砂質土

5. 灰褐色砂質土

6. 灰褐色砂質土

7. 灰褐色砂質土

8. 褐色砂質土

9. 褐色砂質土

10. 黄褐色砂質土

11. 褐色砂質土

12. に近い黄褐色砂質土

13. 褐色砂質土

14. 褐色砂質土

15. 新石台洞内浮

16. 褐色砂質土

17. 褐色砂質土

18. に近い黄褐色砂質土

19. 褐色砂質土

20. 褐色砂質土

21. 褐色砂質土

22. 褐色砂質土

23. 黄褐色砂質土

24. に近い黄褐色砂質土

25. 褐色砂質土

26. 明褐色砂質土

27. 明褐色砂質土

28. 黄褐色砂質土

29. 灰色砂質土

30. 灰色砂質土

31. 褐色砂質土

32. 灰褐色砂質土

33. 褐色砂質土

34. に近い黄褐色砂質土

35. 灰色砂質土

36. 褐色砂質土

37. 褐色砂質土

38. に近い黄褐色砂質土

39. に近い黄褐色砂質土

40. に近い黄褐色砂質土

41. 灰褐色砂質土

42. 灰褐色砂質土

43. 灰褐色砂質土

44. に近い黄褐色砂質土

45. 褐色砂質土

46. 黄褐色砂質土

47. 褐色砂質土

48. 褐色砂質土

26. 明褐色砂質土

27. 明褐色砂質土

28. 黄褐色砂質土

29. 灰色砂質土

30. 灰色砂質土

31. 褐色砂質土

32. 灰褐色砂質土

33. 褐色砂質土

34. に近い黄褐色砂質土

35. 灰色砂質土

36. 褐色砂質土

37. 褐色砂質土

38. に近い黄褐色砂質土

39. に近い黄褐色砂質土

40. に近い黄褐色砂質土

41. 灰褐色砂質土

42. 灰褐色砂質土

43. 灰褐色砂質土

44. に近い黄褐色砂質土

45. 褐色砂質土

46. 黄褐色砂質土

47. 褐色砂質土

48. 褐色砂質土

48. 黄褐色砂質土

49. 黄褐色砂質土

50. 褐色砂質土

51. 褐色砂質土

52. 灰褐色砂質土

53. 褐色砂質土

54. に近い黄褐色砂質土

55. 灰オリーブ色砂質土

56. 褐色砂質土

57. 褐色砂質土

58. に近い黄褐色砂質土

59. に近い黄褐色砂質土

60. に近い黄褐色砂質土

26. 明褐色砂質土

27. 明褐色砂質土

28. 黄褐色砂質土

29. 灰色砂質土

30. 灰色砂質土

31. 褐色砂質土

32. 灰褐色砂質土

33. 褐色砂質土

34. に近い黄褐色砂質土

35. 灰色砂質土

36. 褐色砂質土

37. 褐色砂質土

38. に近い黄褐色砂質土

39. に近い黄褐色砂質土

40. に近い黄褐色砂質土

41. 灰褐色砂質土

42. 灰褐色砂質土

43. 灰褐色砂質土

44. に近い黄褐色砂質土

45. 褐色砂質土

46. 黄褐色砂質土

47. 褐色砂質土

48. 褐色砂質土

26. 明褐色砂質土

27. 明褐色砂質土

28. 黄褐色砂質土

29. 灰色砂質土

30. 灰色砂質土

31. 褐色砂質土

32. 灰褐色砂質土

33. 褐色砂質土

34. に近い黄褐色砂質土

35. 灰色砂質土

36. 褐色砂質土

37. 褐色砂質土

38. に近い黄褐色砂質土

39. に近い黄褐色砂質土

40. に近い黄褐色砂質土

41. 灰褐色砂質土

42. 灰褐色砂質土

43. 灰褐色砂質土

44. に近い黄褐色砂質土

45. 褐色砂質土

46. 黄褐色砂質土

47. 褐色砂質土

48. 褐色砂質土

図 19 4区東壁土層区 (S = 1/50)

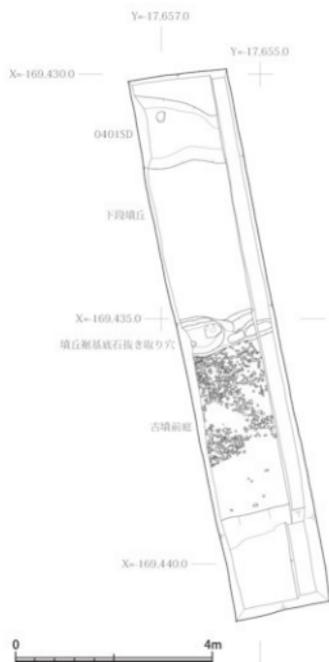


図20 4区平面図 (S = 1/100)

調査で明らかとなった事項のみを記述し、詳細は5区で述べる。

①墳丘

遺構の形状と遺構の位置関係から、検出したのは下段墳丘、墳丘裾基底石である。

下段墳丘は、後世の削平により大きく破壊され、古墳完成時の墳丘斜面は全く残存していない。

墳丘裾基底石は全て抜き取られているものの、4石分を検出した。抜き取り穴の中には、基底石の表面が剝離した状態で残存しているものもある。抜き取り穴に残る基底石は、幅0.4～0.6mで、奥行0.2mである。しかし、基底石の抜き取り穴の南辺が直線的に伸びる点を勘案すると、基底石の奥行は最大で0.6m程であった可能性がある。また、基底石据え付け時に地中に埋めた部分は0.2mである。基底石抜き取り穴からの出土遺物には、須恵器(32～34)、丸瓦(35)がある。

②古墳前庭

古墳前庭は東西幅1.4m、南北幅2.3mを検出した。東西方向は、調査区外に延び、南北方向の規模は不明である。平坦面上には一辺0.1mの角礫を用いた礫敷が敷設される。礫敷の密度は密である。出土遺物には須恵器があるが、細片である。

3 出土遺物

土師器、須恵器(32～34)、瓦(35)、磚(36)が出土した(図21)。土師器は細片のため、図化できない。

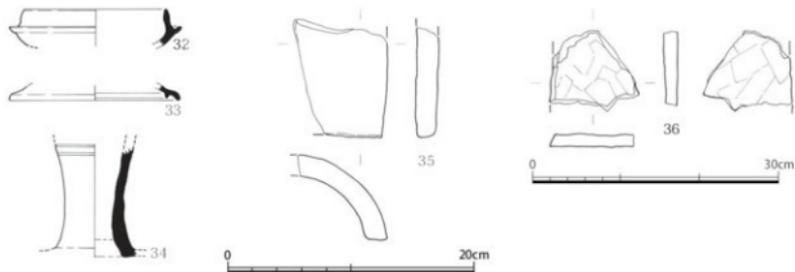


図21 4区出土遺物(32～35: S = 1/4, 36: S = 1/6)

須恵器環(32)は、口径11.4cmを測る。受部は端部が丸く、斜め上方に突き出す。口縁端部の段は退化している。器面調整は、内外面ともにロクロナデである。

須恵器蓋(33)は、口縁部のみが残存で、口径13.9cmを測る。口縁部は屈曲し、かえりは口縁端部よりも高い位置にある。器面調整は、内外面ともにロクロナデである。

須恵器長頸壺(34)は、口縁部のみが残存である。頸部径6.3cmを測る。口縁部に2条の沈線をめぐらせる。器面調整は、内外面ともにロクロナデである。

丸瓦(35)は、下端部のみが残存である。厚さ1.8cmを測る。焼成は軟質である。器面調整は内外面ともに器壁が荒れて不明である。

磚(36)は、榑原石の割石で、一辺の一部を残す。厚さ1.8cmを測る。磚は割石の側面を直線的に整えて加工したもので、割石の表面は無調整である。

第5節 5区(古墳南西隅)

5区は、1～4区の調査成果から下段墳丘の南西隅が検出されると予想された地点に設定した調査区である。上段墳丘の墳形確認を目的とする6区の調査とあわせて、墳形の確定を主な目的とした。

なお、調査は東に隣接する4区北半の再検出も実施し、調査成果の再検証を行った。そのため5区の調査範囲の中には4区の一部も含まれる。

調査前地形には5区の東半部分に、あたかも八角形のコーナーを描くかのような南東—北西方向のコンターラインが存在していた。結果として、このラインは古代以降に発生した地滑りに由来するものであった。

5区の調査では墳丘の南西隅を検出し、下段墳丘が方形であることが明らかとなった。その他、藤原宮期頃の整地層や石組溝、古代以降の地滑り痕跡などを確認した。以下に、その詳細を述べる。

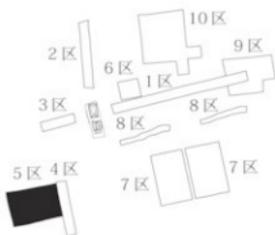


図22 5区位置図

1 基本土層

調査区北・西・南壁及び大畦土層(図24～26・30。層番号は図24～27・30で共通)は大きく1層:腐植土及び旧耕土、II層:藤原京期整地土、III層:古墳構築土、IV層:地山の4層に分類できる。

I層(1～56層)は、腐植土(表土)及び灰黄色・黄褐色土を主体とする。陶磁器の破片などが含まれ、近世以降の自然堆積層・耕作層と考えられる。上層遺構埋土もここに含む。上面の標高は最も高い調査区北東側で118.9m、最も低い南西側で117.0mである。I層の厚さは調査区東側(墳丘部分)で約0.25～0.6m、西側(掘割・藤原宮期の整地部分)で約0.5～0.8mである。

II層(57～97層)は藤原宮期頃の整地層である。にぶい黄色・褐色・褐灰色系の良くしまった砂質土・粘質土を主体とし、粘土ブロックや微砂を含む。II層の分布範囲は概ね調査区西半全体である。整地によって墳丘南西隅付近の掘割は埋められ、一部は墳丘上にも盛土が施されている。

III層(101～123層)は古墳構築に関わる土層である。灰黄褐色・黄褐色・灰白色・明褐色系



図23 5区土層図位置図 (S = 1/100)

の砂質土・粘質土・粘土を主体とし、粘土ブロックを全体に多く含む。Ⅲ層はさらに古墳前庭と西側の掘削面を構築する土層(101～117層)と、墳丘盛土(118～123層)とに分けることができる。前者には掘削面・古墳前庭の礫敷層を含む。ただし、基礎石据え付けの工程上、両者の差異が明確でない部分も存在する。5区では、墳丘盛土は調査区北壁沿いの断割で部分的に確認したのみである。墳丘盛土のうち墳丘表面に近い部分には赤褐色・橙色系の粘質土が盛られている。墳丘から南～西にかけての掘削・古墳前庭の構築土は厚さ約0.05～0.20mで水平に土が盛られ、その上面に礫敷(101・115層)が敷設される。Ⅱ層が存在しない調査区東半ではⅠ層直下でⅢ層が検出される。なお、Ⅱ層とⅢ層の間には自然堆積層がわずかに存在する(98～100層)。褐灰・灰褐色粘質土からなり、厚さは0.05m程度である。出土遺物は須恵器長頸壺(57)の小片があるのみである。

Ⅳ層は(124層)は古墳築造以前の地山の黄褐色砂質粘土である。Ⅳ層は調査区北壁中央付近のみ確認している。調査区北壁での地山上面高は116.9mである。上面はここから南に向かって低くなると考えられるが、当該範囲は地滑りによって全体に大きく沈下し、確認はできていない。調査区北壁部分では地山から約0.3m上に墳丘裾基礎石の底面が位置する。地山上に古墳築造時の旧表土面などがいないため、築造前の地山を削って作業面を整形した後に、墳丘盛土を施したことが窺える。

詳細は次項で後述するが、地滑りの痕跡を平面及び土層断面で確認している。調査区の北・西・南の各壁面においてⅡ～Ⅳ層に断層が確認できる。地滑りは最大で垂直方向に約0.8m沈下する大規模なものであり、痕跡は現地表面(=Ⅰ層上面)にも看取できる。

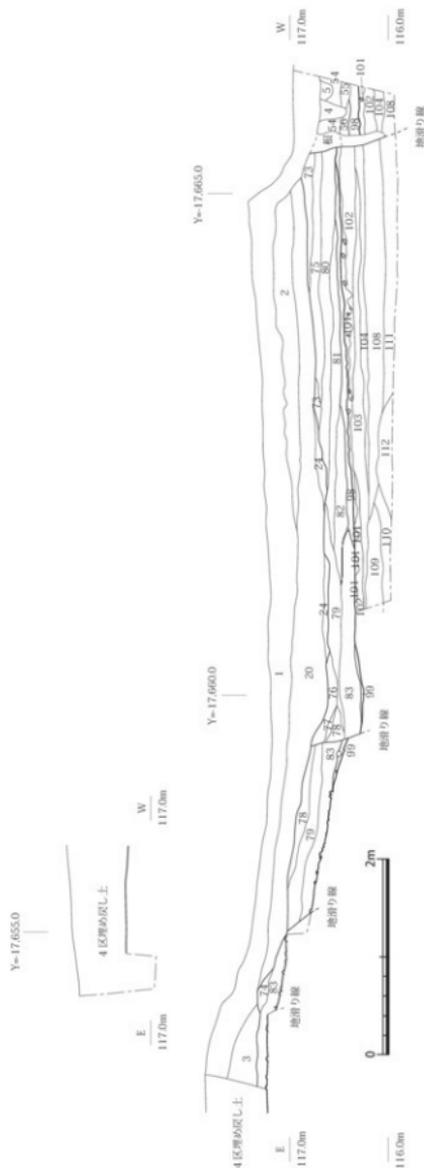
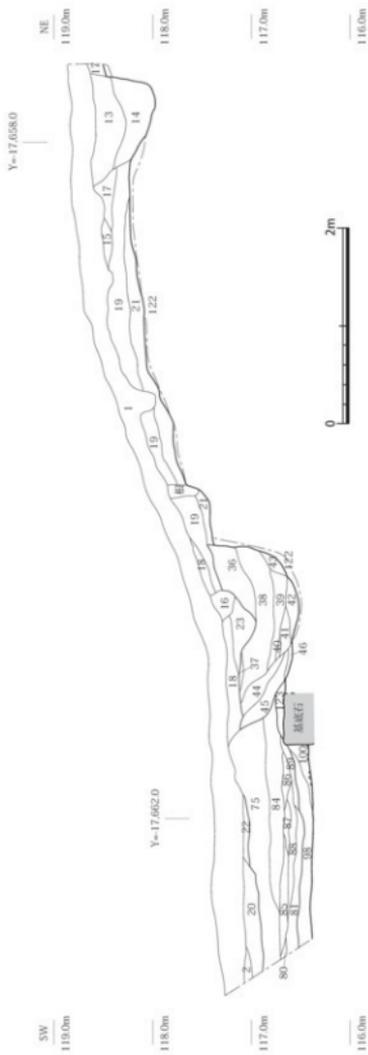


図 24 5区南壁土層区 (S = 1/50)

- | | | | |
|---------------|---------------|-----------------|-------------------|
| 1. 表土 | 75. 細かい褐色粘質土 | 83. 灰褐色粘質土 | 相色粘土上アロックス層を含む |
| 2. 灰褐色砂質土 | 76. 細かい褐色粘質土 | 98. 褐色細砂まじり粘質土 | |
| 3. 灰褐色土 | 77. 細かい灰色細砂土 | 99. 細かい相色粘質土 | |
| 4. 灰褐色砂質土 | 78. 灰褐色砂質土 | 101. 灰褐色細砂土 | |
| 5. 灰褐色土 | 79. 灰褐色砂質土 | 102. 相色細砂まじり粘質土 | 相色・相色粘土上アロックス含む |
| 20. 暗灰褐色土 | 80. 灰褐色砂質土 | 103. 相色粘土 | 相色粘土上アロックス層を含む |
| 24. にぶい黄褐色砂質土 | 81. にぶい褐色土 | 104. 灰褐色土 | 相色粘土上アロックス層を含む |
| 54. 暗灰褐色土 | 82. にぶい黄褐色砂質土 | 108. にぶい黄褐色粘質土 | 黄褐色粘土上アロックス層を含む |
| 55. にぶい黄褐色砂質土 | | 109. 灰褐色粘土 | 相色・相色粘土上アロックス層を含む |
| 56. 灰褐色砂質土 | | 110. にぶい黄褐色粘土 | |
| 73. 灰褐色土 | | 111. 黄褐色粘土 | |
| 74. にぶい小褐色粘土 | | 112. にぶい黄褐色粘土 | アロックス含む |



- | | | | |
|----------------|-----------------|-----------------|--------------------|
| 1. 表土 | 36. におい、黄褐色砂質土 | 81. におい、黄褐色土 | 81. 黄褐色粘土プロック層混含む |
| 2. 灰褐色砂質土 | 37. におい、灰色細砂土 | 84. 灰褐色土 | 84. 明土褐色粘土プロック多く含む |
| 13. 黄褐色砂質土 | 38. 黄褐色砂質土 | 85. 暗灰黄色細砂土 | 85. 暗土粘土プロック層混含む |
| 14. におい、黄褐色土 | 39. におい、灰色細砂土 | 86. におい、灰色細砂土 | 86. 暗土粘土プロック層混含む |
| 15. におい、黄褐色土 | 40. 灰黄色細砂土 | 87. におい、黄色細砂土 | 87. 暗土粘土プロック層混含む |
| 16. 淡黄色土 | 41. 暗灰黄色砂質土 | 88. 黄褐色砂質土 | 88. 暗土粘土プロック層混含む |
| 17. におい、黄褐色砂質土 | 42. 灰黄色細砂質土 | 89. 灰黄色粘土 | 89. 暗土粘土プロック層混含む |
| 18. におい、灰色土 | 43. 灰褐色色まじり暗土粘土 | 98. 暗灰色細砂まじり粘質土 | |
| 19. 暗褐色土 | 44. におい、黄褐色粘質土 | 100. 灰褐色粘質土 | |
| 20. 暗灰褐色土 | 45. 灰黄色細砂土 | 122. 黄褐色土 | |
| 21. におい、黄褐色粘質土 | 46. におい、灰色細砂土 | 123. 暗褐色土 | |
| 22. オリーブ褐色土 | 75. 灰黄色細砂土 | | |
| 23. 黄褐色粘質土 | 80. におい、灰色粘質土 | | |

図 26 5 区中央大畦南面土層図 (S = 1/50)

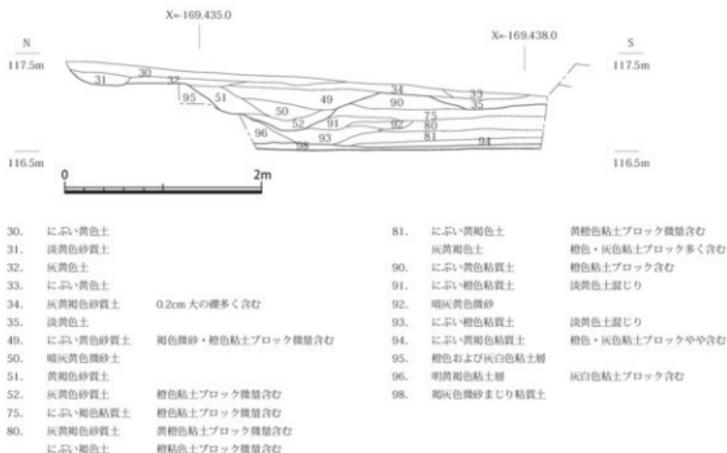


図 27 5区南北畦西面土層図 (S = 1/50)

2 検出遺構

検出遺構は大きく上層遺構、中層遺構、下層遺構の3層に分かれる。上層遺構は古代よりも後の遺構で、便宜上、地滑り痕跡も含める。中層遺構は藤原宮期頃の遺構である。菖蒲池古墳本体に関わる遺構を下層遺構とする。

(1) 上層遺構

上層遺構はⅡ層上面で検出しており、溝2条がある(図28)。上層遺構の時期は古代よりも後であると考えられる。各遺構は詳細な時期を決定できる遺物に乏しいが、Ⅰ層全体からの出土遺物から考えると近世以降である可能性が高い。

溝(0501SD)は調査区北西隅に位置する東西溝である。南北幅0.5m以上を残す。遺構の大部分は調査区外に存在するため、その規模は不明である。出土遺物には土師器(40・42)、須恵器(51・60)、磚(67・68・71)がある。

溝(0502SD)は調査区南半に位置する東西溝である。東西長約8.5m以上、南北幅約1.7m、深さ約0.7mを測る。溝(0502SD)はⅡ層を掘り込み、東端部では地滑りで崩落した後の填丘南西隅の填丘裾基底石にまで達する。南西隅の填丘裾基底石はこの溝(0502SD)の掘削時に抜き取られた可能性がある。出土遺物には須恵器(48・52)、輪の羽口(63)がある。

この他、調査区西半の平坦地では近代以降の畑に伴うと考えられる深さ0.1m未満の浅い南北溝群も確認している。この南北溝群はⅠ層でも上層中に含まれ、Ⅱ層上面まで掘り下げを行った段階で消失しているため、平面図上では表現していない。

Ⅰ層からの出土遺物として土師器(37)、須恵器(45～47・49・53～55・58・59・61)があるが、いずれも中層・下層遺構の遺物の混入である。

地滑り痕跡については、5区一帯で地滑りが生じていることを確認している。調査区北東部を除い

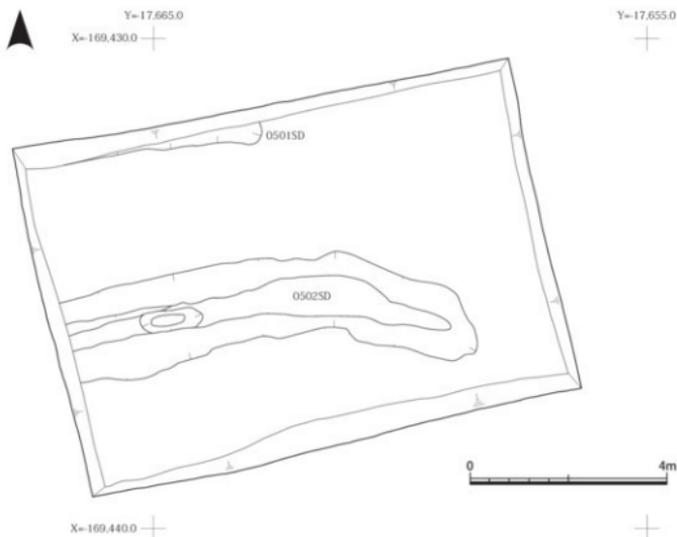


図28 5区上層遺構平面図 (S = 1/100)

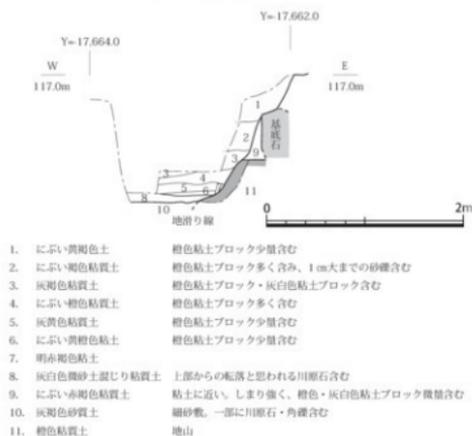
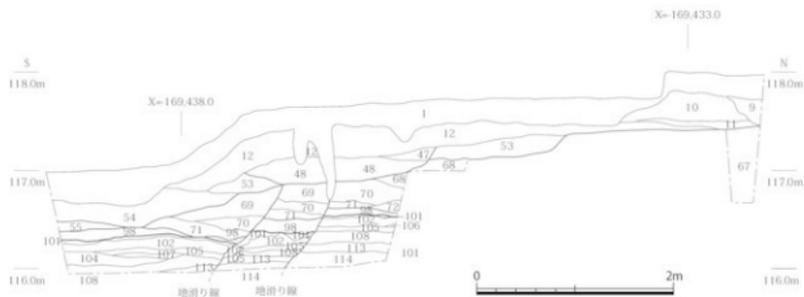


図29 5区填丘西辺東西断面土層図 (S = 1/50)

たー帯が南西方向に地滑りを起こして沈下しており、地滑りによって生じた段差を調査区中央付近で確認できる(図31)。検出した古墳の基底石と礎敷に見られる段差は、この地滑りの状態を如実に示している。土層断面でも地滑りの断層面が確認でき(図24・25・29・30)、最大で垂直方向に約0.8m移動していることがうかがえる。その一方で水平方向の移動距離は小さく、最大でも0.2m程度であると推測できる。なお、沈下の程度は地点によって差がある。



1.	表土	70.	暗灰色粘質土	褐色・灰色・黄色粘土ブロック多く含む
9.	黄灰色土	71.	にぶい・黄褐色粘土	褐色粘土ブロック・炭化物微量含む
10.	にぶい・黄褐色砂質土	72.	暗灰色砂質粘土	
11.	暗灰黄色土	98.	暗灰色微砂まじり粘質土	褐色粘土ブロック含む
12.	灰黄褐色土	101.	灰黄褐色微砂土	
47.	にぶい・黄色粘質土	102.	暗灰色微砂まじり粘質土	黄色・褐色粘土ブロック含む
48.	暗灰黄色微砂土	104.	灰白色粘土	黄褐色粘土ブロック微量含む
53.	灰黄色砂質土	105.	黄褐色粘土	
54.	暗灰黄色土	106.	明黄褐色砂質土	
55.	にぶい・黄褐色粘土	107.	浅黄褐色粘土	
67.	明黄褐色・灰白色粘土	108.	にぶい・黄褐色砂質粘土	
68.	にぶい・赤褐色粘質土	113.	にぶい・褐色微砂質粘土	
	明黄褐色・灰白色粘土	114.	明黄褐色粘土	灰色・黄褐色粘土ブロック含む
69.	黄褐色砂質土			

図30 5区西壁土層図 (S = 1/50)

地滑りによる断層は地山及び古墳、藤原宮期整地層に生じており、I層には見られない。そのため、地滑りが生じた時期は藤原宮期以降、近世以前であると考えられる。

地滑りが生じた原因は、大規模な地震である可能性が高い。現在は古墳のすぐ南と西が崖面になっているが、かつては南北方向に尾根が伸びていた。その尾根の先端方向に向かって広範囲で地滑りを起こしたと考えられる。藤原宮期以降、現代に至るまでに震度5を超えるような大規模な地震は幾度も発生しており、地滑りの原因となった地震を今回の成果から特定することは困難である。

菖蒲池古墳の周辺では、これまでも高松塚古墳、カヅマヤマ古墳、酒船石遺跡など、地震の影響を受けている飛鳥時代の遺跡が複数確認されている。菖蒲池古墳も新たにその例に加わることとなる。

(2) 中層遺構

中層遺構はII層上面で検出した藤原宮期頃の遺構である(図31)。また、II層自体が藤原宮期頃の整地層であり中層遺構と一体のものであるため、ここに含める。

整地層は調査区北東の高台部分を除く範囲に広がっており、古墳の基底石上及び礎墩上にも及んでいる。整地が行われた時期は、整地層中及び上面の遺構の出土遺物から、藤原宮期頃であると考えられる。整地層の厚さは最大約0.7mであり、その上面に遺構が構築されている。整地層は概して北側ほど厚いが、調査区南側は後世の遺構や耕作によってII層上面がかなり削平されているため、当初の姿を反映した状態かは不明である。

整地層中からは土師器(38・39・41)、須恵器(43・44・56)、籾の羽口(62・64)、土製品(65・66)、磚(69・70・72)が出土している。このうち、磚はいずれも整地層底面から出土しており、



図31 4・5区中層遺構平面図 (S = 1/100)



図32 5区石組溝 (0505SD) 土層図

(S = 1/50)

整地を行う際に周辺に存在していたものを捨てた可能性が高いと考えられる。この他、少量ながら弥生土器や埴輪の細片も含まれる。

調査区北西部では石組溝 (0505SD) を検出している。

石組溝 (0505SD) は北でわずかに西に振れる南北溝であり、その方向は埴丘とほぼ平行する。石組溝 (0505SD) は、石を2列に並べて溝の側面を構築する。溝の底面に石は敷かれていない。溝底は周辺地形及び遺構と同様、北から南に向かって低くなる。整地層の上面に石の据え付け掘方は存在せず、周辺の整地盛土と並行して石を据えて溝を構築している。石組溝 (0505SD) の規模は長さ約 2.8m、内幅約 0.3m、深さ約 0.3m である。溝の南端は溝 (0502SD) に、北端は溝 (0501SD) にそれぞれ破壊されて、調査区北壁断面 (図 25) には石組溝 (0505SD) は現れていない。現存する石組溝の南東部分は石材が存在しないが、抜き取り痕跡などは無く、石組溝は溝の一部のみだったと考えられる。なお、石の上面外側は本来、盛土で覆われていたと考えられる (図 32)。

石組溝 (0505SD) を構成する石の大きさは一辺約 0.2 ~ 0.6m と幅があり、形状も差異が見られる。西辺南半は立方体に近い大型の石を使用している。石材は石英閃緑岩が主だが、一部に榛原石が含まれる。使用石材や大きさ、加工の状況などは埴丘の基底石とよく似通っており、基底石を抜き取って



図33 4・5区下層遺構平面図 (S = 1/100)

再利用している可能性もある。

石組溝 (0505SD) からは須恵器坏蓋 (50) が東側壁面に貼り付くように出土している。須恵器坏蓋 (50) の時期は飛鳥Ⅳと考えられる。

なお、整地層及び上面の遺構が良好に遺存している調査区北西部一帯 (=古墳の掘削内に収まる範囲) は、古墳の遺構をみまでの面的な掘り下げは行わず、現地で中層遺構面を保存している。この範囲以外については後世の削平による整地層上面の遺存状況が良くないこともあり、上面で遺構は検出されなかった。

(3) 下層遺構

墳丘や掘削など、古墳に直接関わる遺構を下層遺構としてここにまとめる (図33)。

① 墳丘

墳丘の南西隅を検出した。これは墳丘裾基底石列の屈折点を確認されたことによって明確となった。基底石及びその抜き取り痕跡の並びが、調査区中央のやや南で直角に折れ曲がる。このことから、下段墳丘は方形と判断できる。墳丘南西隅一帯の墳丘裾基底石は、地滑りによって築造当初の位置から垂直方向に約0.7m程度沈下した状態であるが、水平方向での平面的な位置については南西方向にわずかに動いた程度であると考えられる。

墳丘裾基底石はいずれも外側 (墳丘表面側) に平坦な面を有している。石材は他の調査区で検出した基底石と同様に石英閃緑岩を用いる。

検出した埴ヶ堀基底石は、埴ヶ南辺の3石と、埴ヶ西辺の9石である（南西隅の1石は南辺として数えている）。埴ヶ南辺の基底石は隅から東へ1.7m分のみが残されている。それよりも東の基底石は抜き取り穴を確認している。ただし、後世の地形改変によって、その痕跡も削平されてしまっている部分もある。埴ヶ西辺の基底石は、隅石の北隣の1石が欠けているが、他は全て残存している。欠けた1石は溝（O502SD）の底面に位置し、溝が掘削された際に石が取り除かれた可能性が高い。

埴ヶ南西隅の基底石は南辺と西辺の両方に平坦な面を有している。また、上面にも他の基底石よりも広い五角形を呈する平坦面を有している。埴ヶ南西隅の基底石上には埴ヶ盛土は遺存していなかったため、築造時にこの基底石の上面がどの程度露出していたかは不明である。他の基底石が長さ約0.3～0.5m、奥行約0.1～0.2m程度であるのに対し、埴ヶ南西隅の基底石は長さ約0.7m、奥行約0.6mを測る大型の石である。埴ヶ隅に意識的にこのような大型の石を配したと考えられ、ことによると構築作業の基準点となった可能性も考えられる。埴ヶ西辺の基底石は長さや奥行（厚さ）が不揃いな傾向にあり、小振りの石も含まれる。前面に残された基底石が少ないため比較対象として不安は残るが、概して側面（西辺）よりも前面（南辺）に見映える良い石を据えているようである。

埴ヶ堀基底石は平面的には直線に並んでいるが、立面的には埴ヶ南西隅に向かって段々に低くなる状態で検出されている。これは上層遺構の項で述べたとおり、埴ヶ南西隅一帯が丘陵広範囲での地滑りの影響を受けた結果である。埴ヶ西辺では検出した北端の基底石と南端の基底石とで約0.7mの比高差がある。西辺中央付近の基底石は上部がやや外傾しているが、これも地滑りの影響である可能性がある。西辺の北端3石分と南辺の東半部分（石痕跡のみ残る）部分は、築造当初の位置を保っていると考えられる。両者の標高は約117.2m（石の接する礫敷面の高さ）でほぼ一致する。

②埴ヶ盛土

埴ヶは全体に後世の削平を受け、築造当初の埴ヶ表面はほぼ残されていないと考えられる。特に南西隅付近は削平が著しく、盛土自体がほとんど残っていない。検出した埴ヶ盛土上面高は最も高くなる調査区北東隅で約118.4mである。5区の調査では埴ヶ盛土については断ち割り調査を含む掘り下げを行っておらず、わずかに調査区北壁で部分的に断面を確認しているのみである。なお、4区東辺沿いでは埴ヶ及び古墳前庭の断ち割り調査を実施している（図20）。

③古墳前庭及び西辺掘割底面

古墳前庭には3～5cm大の川原石を密に敷いた礫敷が存在する。古墳前庭の礫敷は埴ヶ西辺の延長線上付近まで広がっている。西辺よりも西側は南西隅基底石の周囲約0.5mの範囲のみ同様の礫敷が施されている。その外側（西）、掘割内およびその南側延長部分には、灰黄褐色微～粗砂土（図24・30－101層）が広範囲に薄く敷かれている。この中には3～5cm大の川原石も少量混ざるが、古墳前庭の礫敷と比較するとその数は非常に少ない。古墳前庭と埴ヶ西辺の延長線上とでは礫敷の在り方に明確な違いがあったことがうかがえる。なお、掘割部分の礫敷については『現地説明会資料』や『平成22年度福原市文化財調査年報』といった既往の調査報告では、砂利敷と呼称している。

検出した掘割面（礫敷上面）はほぼ全体が地滑りで沈下しており、築造当初の傾斜がどのようであったかについては正確には不明である。地滑りの影響を受けていないと考えられる調査区南東の古墳前庭礫敷面と調査区北壁中央にわずかに残る礫敷面との標高がともに約117.2mでほぼ同一であることから、調査区一帯では概ね平坦ないし南に向かってわずかに低くなる傾斜であったと考えられる。調査区西端よりさらに西側については、後世に削平された崖面が調査区の傍まで迫っており、埴ヶ西

側掘割の西外側への展開は明らかにし難い。なお、検出した掘割の東西幅は約 5.2m であり、墳丘南西隅付近での掘割幅がそれ以上の規模であった点は確かである。

④掘割

掘割・礎敷面の構築にあたっては、地山の上に一定以上の盛土が施されている。調査区北側では厚さ約 0.3m、南側では厚さ約 0.6m 以上（南では地山面を確認していない）である。少なくとも古墳南西一帯では地山をある程度削り出した後に盛土を施して古墳を構築していることが窺える。

古墳前庭の礎敷直上から須恵器長頸壺（57）の小片が出土している。この他に、当初の形状を保っている下層遺構面直上ないし遺構内からの出土遺物は無い。

3 出土遺物

土師器（37～42）、須恵器（43～61）、土製品（62～66）、磚（67～72）が出土した（図 34・35）。

土師器環 C（37～39）は、口径は 37 が 10.5 cm、38・39 は 12.0 cm を測る。底部から緩やかに立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部の形状は、39 が段を持つ他は丸くおさめる。器面調整は、外面は 37・38 は底部が横ヘラ削り、口縁部が横ナデで、39 は全面を横ナデである。内面は 37 は調整不明だが、38・39 は一段放射暗文である。

土師器皿 A（40）は、口径 21.0 cm を測り、平底の底部から内彎気味に立ち上がり、肥厚させた口縁端部に至る。器面調整は、外面は底部を横ヘラ削り、口縁部が横ミガキで、内面は底部が二重螺旋暗文、口縁部が一段放射暗文である。

土師器甕（41）は、口径 13.5 cm を測る。なで肩の胴部から緩やかに外反し、面取りした口縁端部に至る。器面調整は、胴部外面が縦ハケで、それ以外は内外面ともに横ナデである。

土師器壺（42）は、小型品で、口径 9.3 cm を測る。底部は平底で、なで肩の胴部から緩やかに開いて口縁端部に至る。器面調整は、外面が胴部下半が横ハケ、胴部上半が縦ハケ、口縁部は横ナデである。内面は、胴部下半が強いナデ、胴部上半及び口縁部が横ハケである。

須恵器環 G（43～45）は、口径 8.6～9.6 cm を測る。平底の底部から屈曲して直線的に立ち上がり、丸くおさめた口縁端部に至る。器面調整は、外面が底部が 43 が無調整、44 は回転ヘラおこし、45 は回転ヘラおこし後、ヘラ削りである。その他は内外面ともロクロナデである。なお、45 は他の 2 つと比べて、器高が高い。

須恵器環 B（46）は底部のみ残存し、底径 14.5 cm を測る。高台は底部の縁に貼り付けられ、外に開く形状を呈する。器面調整は、外面は底部が回転ヘラ削り、高台がロクロナデで、内面はロクロナデである。

須恵器蓋（47～50）は、環の蓋である。口径は 47 が 10.2 cm と小さく、その他は 12.0～14.1 cm を測る。かえりはいずれも退化しつつあり、口縁部よりも下がるものはなく、端部も丸味を帯びる。天井部は 47 が高く盛り上がる他は、いずれも低く、平坦である。つまみはいずれの土器も欠失する。器面調整は、内面は 46 が天井部に一方方向の指ナデがある以外は全てロクロナデで、外面はいずれも口縁部がロクロナデ、天井部が回転ヘラ削りである。

須恵器蓋（51）は、口径 9.9 cm を測る。高くドーム型の天井部からやや開く口縁部に至り、口縁

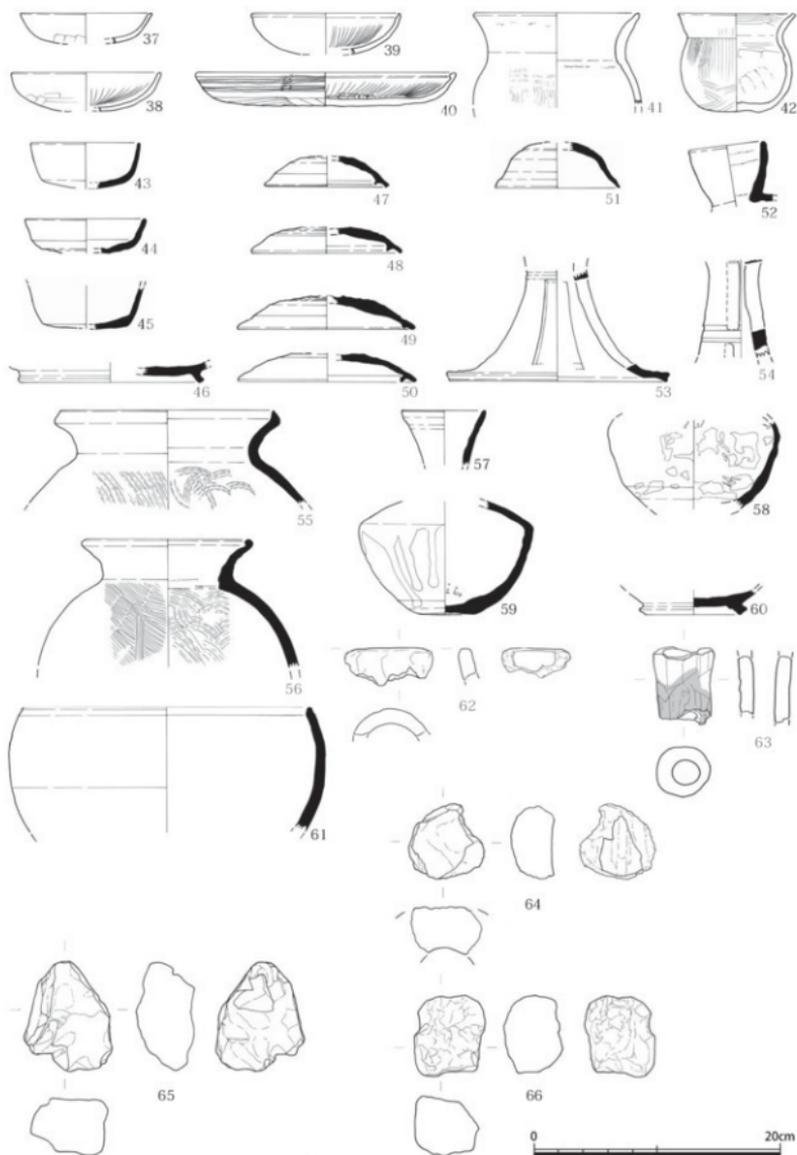


图 34 5 区出土遺物① (S = 1/4)

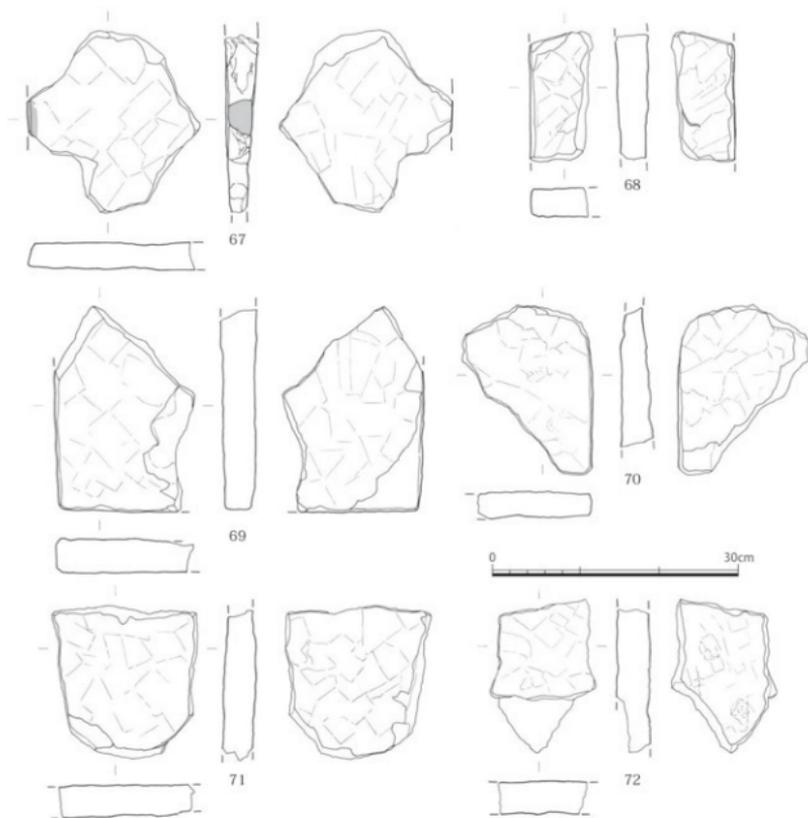


図 35 5区出土遺物② (S = 1/6)

端部は内彎気味で端部をやや尖り気味におさめる。かえりはない。器面調整は、内外面ともにロクロナデである。

須恵器平瓶 (52) は、口縁部のみが残存で、口径 5.9 cm を測る。口縁端部は内彎気味である。器面調整は、内外面ともにロクロナデで、口縁部内面には粘土紐の接合痕が残る。

須恵器高坏 (53・54) は、脚台部のみが残存で、口径 17.5 cm を測る。ラッパ状に大きく開く脚台部から、面取りした端部に至る。透かしは二段の二方透かしで上段と下段の間は一条の沈線によって区画される。器面調整は、内外面ともにロクロナデである。

須恵器甕 (55・56) は、ともに胴下半を欠失し、口径は 55 が 17.2 cm、56 が 13.1 cm を測る。肩の張った胴部から屈曲して大きく開き、内彎気味の口縁端部に至る。口縁端部は、55 は面を持ち、端部が尖るのに対し、56 は内側に肥厚させる。器面調整は共通し、外面は胴部が平行叩き、口縁部がロクロナデで、内面は胴部が当て具の青海波文、口縁部がロクロナデである。

須恵器長頸壺（57～60）は、いずれも破片である。口径は57が6.6cmを測る以外は不明である。器形はいずれも似た形状と考えられ、平底の底部から稜を持って立ち上がり、胴最大径に至る。胴最大径は胴部上半にあり、肩部との境は稜を持つ。口縁部は長く緩やかに開き、口縁端部を丸くおさめる。底部に関し、60では底部外縁部にふんばり、面を持つ高台をつける。器面調整は、底部外面が回転ヘラおこし、胴部下部の外面が回転ヘラ削りである以外は、内外面ともロクロナデである。なお、58は、内外面に漆が付着し、59は自然釉が厚い。

須恵器鉢（61）は、底部を欠失し、口径23.0cmを測る。底部から緩やかに立ち上がり、内彎する口縁部に至る。口縁端部は外面に浅い沈線がめぐり、内側に面取りする。器面調整は内外面ともにロクロナデである。

輪の羽口（62～64）は、いずれも一部のみの残存で、62が上端部、63が下端部である。輪の穴の口径は62が5.6cm、63が2.2cm、64が5.4cmを測る。63は、外面が被熱のため発泡し、色調が黒変している。

土製品（65・66）は、形状不明の破片である。いずれも内面に平滑な面を持つ。器厚は65が5.0cm、66は5.9cmを測り、非常に緻密である。鑄型の可能性があるが、詳細は不明である。

碑（67～72）は、榛原石の割石である。67・68・70は一辺が、69は二辺が残存する。厚さは4.0～4.4cmを測る。もとの形状は、69を参考にすれば方形と考えられる。碑は割石の側面を直線的に整えたもので、割石の表面は無調整である。

第6節 6区（古墳東辺）

6区は、墳形確定のために設定した。1区の調査成果から、上段墳丘斜面、上段墳丘裾基底石及び上段墳丘裾平坦面の検出が想定された。

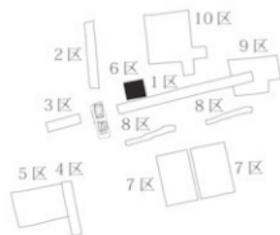


図36 6区位置図

1 基本土層

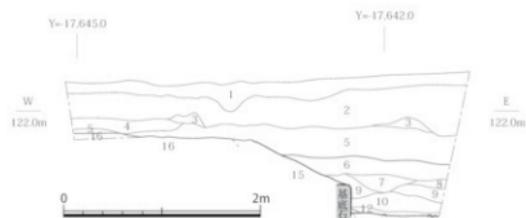
土層（図37）は堆積状況や土質から、大きくI層：腐植土及び旧耕土、II層：掘削埋土、III層：墳丘構築土の3層に分類できる。

I層（1～5層）は、腐植土及び灰黄褐色砂質土を主体とする。出土遺物に陶磁器の細片などを含むため、近世以降の層であることは明らかである。上面の標高は122.4mである。

II層（6～14層）は、土質の共通性から大きく2層にまとめることができる。上層（6～13層）は人為的な埋土である。にぶい黄褐色砂質土を主体とし、地山の黄褐色パイラン土を含む。下層（14層）は褐色粘質土からなり、墳丘完成後に上段墳丘裾平坦面に堆積した第1次堆積層である。上面の標高は121.5mである。

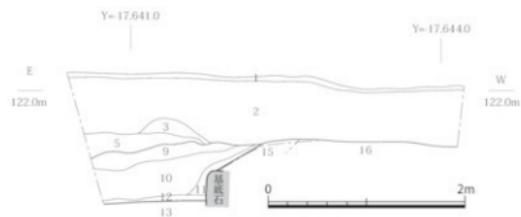
III層（15～16層）は、赤灰色粘質土及び橙色砂質土からなる。上面の標高は121.5mである。

なお、本調査区で検出した遺構は全てI層下面で検出している。



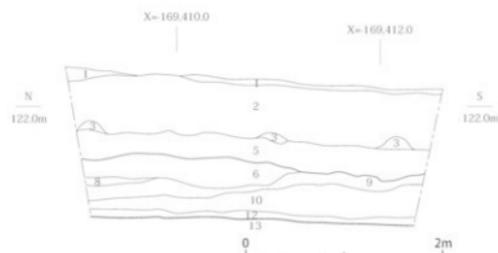
①北壁

- | | |
|----------------|------------------------|
| 1. 腐植土 | |
| 2. にがい・黄褐色砂質土 | しまりなし |
| 3. 灰黄褐色粘質土 | |
| 4. 灰黄色粘質土 | |
| 5. にがい・黄褐色砂質土 | |
| 6. 黄褐色砂質土 | |
| 7. 暗灰黄色粘質土 | |
| 8. にがい・棕色粘土 | |
| 9. にがい・黄褐色砂質土 | 棕色・黄色・灰色粘土
ブロック微量含む |
| 10. にがい・黄褐色粘質土 | 棕色・黄色・灰色粘土
ブロック多く含む |
| 12. 期灰色粘質土 | |
| 13. 灰黄褐色砂礫 | 礫物の確含む |
| 14. 期灰色粘土 | |
| 15. 赤灰色粘質土 | 棕色粘土ブロック微量
含む |
| 16. 棕色砂質土 | |



②南壁

- | | |
|----------------|------------------------|
| 1. 腐植土 | |
| 2. にがい・黄褐色砂質土 | しまりなし |
| 3. 灰黄褐色粘質土 | |
| 5. にがい・黄褐色砂質土 | |
| 9. にがい・黄褐色砂質土 | 棕色・黄色・灰色
粘土ブロック微量含む |
| 10. にがい・黄褐色粘質土 | 棕色・黄色・灰色粘土
ブロック多く含む |
| 11. 赤灰色粘質土 | 15層の流出土 |
| 12. 期灰色粘質土 | |
| 13. 灰黄褐色砂礫 | 礫物の確含む |
| 15. 赤灰色粘質土 | 棕色粘土ブロック微量
含む |
| 16. 棕色砂質土 | |



③東壁

- | | |
|----------------|------------------------|
| 1. 腐植土 | |
| 2. にがい・黄褐色砂質土 | しまりなし |
| 3. 灰黄褐色粘質土 | |
| 5. にがい・黄褐色砂質土 | |
| 6. 黄褐色砂質土 | |
| 8. にがい・棕色粘土 | |
| 9. にがい・黄褐色砂質土 | 棕色・黄色・灰色粘土
ブロック微量含む |
| 10. にがい・黄褐色粘質土 | 棕色・黄色・灰色粘土
ブロック多く含む |
| 12. 期灰色粘質土 | |
| 13. 灰黄褐色砂礫 | 礫物の確含む |

図 37 6区土層図 (S = 1/50)

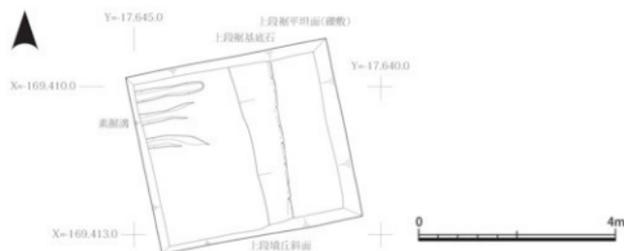


図 38 6区平面図 (S = 1/100)

2 検出遺構

検出遺構は、素掘溝、墳丘である(図38)。このうち素掘溝が上層遺構で、墳丘は下層遺構である。

(1) 上層遺構

素掘溝は、東西方向を主軸とし、調査区の南半分で検出した。幅0.2m、深さ0.1mを残す。出土遺物には磁器や土師器、須恵器があるが、いずれも細片である。近世の耕作溝と考えられる。

(2) 下層遺構

検出遺構には、墳丘外表がある。墳丘は石室との位置関係から古墳東辺である。

① 墳丘外表

遺構の形状と位置関係から、検出したのは上段掘平坦面、上段掘基底石、上段墳丘斜面である。

上段掘平坦面は、東西幅1.1m以上、南北幅3.2m以上を検出した。平坦面は裾が東西方向に直線的に延びる。上面には1区と同様の角礫を敷設する。平坦面からの出土遺物はない。上面の標高は調査区北端の基底石付近で121.0mである。

上段掘基底石は、石英閃緑岩を半加工したものである。東西方向に幅3.2m、8石を検出した。基底石は1段で、平坦面を外に向けて立て並べている。地上に露出したそれぞれの基底石の大きさは、幅0.4～0.6m、高さ0.3mである。基底石の上面は化粧土で覆われ、古墳完成時には基底石は側面しか見えていなかったと考えられる。上面の標高は121.3mである。

上段墳丘斜面は、東西幅0.8m、高さ0.4mを検出した。傾斜は一定で、傾斜角は32.5°である。斜面上には貼石等の痕跡はなく、赤灰色粘質土(図37-15層)により化粧されている。この赤灰色粘質土の単位は不明瞭である。斜面上からの出土遺物はない。

3 出土遺物

土師器・須恵器・磁器が少量出土しているが、時期不明である。

第7節 7区(古墳南東隅)

7区は、墳丘の東西幅確定のために設定した。5区の調査成果から、墳丘南東隅及び掘割に関する遺構の検出が想定された。

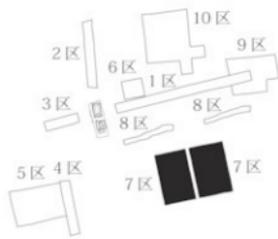
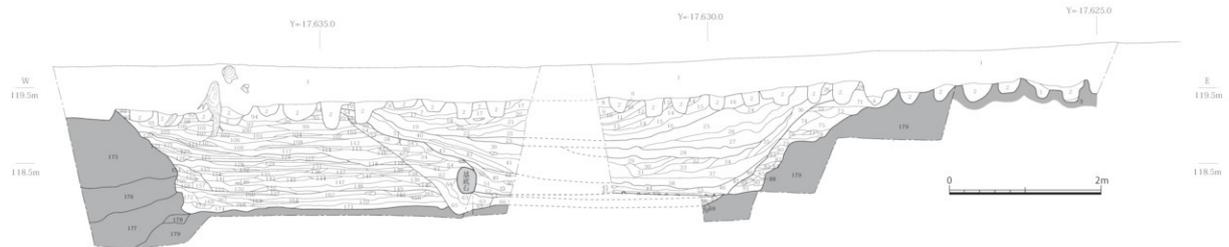


図 39 7区位置図



1. 濃い黄褐色砂質土	41. 褐色砂質土	に高い黄褐色粘質土ブロック少量含む	81. 褐色粘質土	バイラン土粒少量含む	121. 濃い褐色バイラン土	161. 明褐色粘質土	バイラン土ブロック含む
2. 濃い黄褐色砂質土	42. 褐色砂質土	山土ブロック少量含む	82. 濃い黄褐色バイラン土	ブロックを主体とする	122. 濃い褐色粘質土	162. 褐色粘質土	バイラン土粒含む
3. 濃い黄褐色砂質土	43. 褐色粘質土	ブロックを主体とする	83. 褐色バイラン土	ブロックを主体とする	123. 褐色粘質土	163. 褐色粘質土	バイラン土粒含む
4. 濃い黄褐色砂質土	44. 褐色粘質土	赤褐色粘質土ブロック含む	84. 濃い黄褐色バイラン土		124. 褐色バイラン土	164. 褐色粘質土	黄褐色粘質土ブロック含む
5. 褐色砂質土	45. 褐色粘質土	バイラン土ブロック・小礫含む	85. 濃い黄褐色砂質土		125. 褐色粘質土	165. 褐色粘質土	バイラン土粒含む
6. 濃い黄褐色砂質土	46. 褐色粘質土		86. 褐色バイラン土		126. 褐色粘質土	166. 褐色粘質土	
7. 濃い黄褐色砂質土	47. 濃い黄褐色粘質土		87. 濃い黄褐色砂質土	よくしまり、山土粒含む	127. 黄褐色バイラン土	167. 褐色バイラン土	
8. 濃い黄褐色砂質土	48. 褐色粘質土		88. 褐色バイラン土	ブロックを主体とする	128. 褐色粘質土	168. 褐色バイラン土	
9. 濃い黄褐色砂質土	49. 濃い黄褐色粘質土	ブロックからなる	89. 褐色バイラン土		129. 濃い黄褐色バイラン土	169. 明黄褐色バイラン土	
10. 濃い黄褐色砂質土	50. 褐色灰色バイラン土	濃い赤褐色粘質土ブロック含む	90. 濃い褐色バイラン土	ブロックを主体とする	130. 濃い褐色粘質土	170. 明オリーブ灰褐色バイラン土	
11. 濃い黄褐色砂質土	51. 濃い赤褐色粘質土	礫砂の層を含む	91. 灰黄褐色粘質土	山土ブロック非常に多く含む	131. 黄褐色粘質土	171. 濃い黄褐色粘質土	よくしまり、バイラン土粒多く含む
12. 濃い黄褐色砂質土	52. 濃い赤褐色バイラン土	砂礫含む	92. 濃い黄褐色砂質土		132. 暗黄褐色粘質土	172. 暗黄褐色粘質土	バイラン土粒少量含む
13. 濃い黄褐色砂質土	53. 黄褐色砂礫		93. 濃い黄褐色バイラン土		133. 黄褐色バイラン土	173. オリーブ褐色バイラン土	
14. 濃い黄褐色砂質土	54. 濃い黄褐色粘質土		94. 褐色バイラン土	ブロック多く含む	134. 褐色粘質土	174. 黄褐色粘質土	黄褐色粘質土ブロック含む
15. 灰黄褐色砂質土	55. オリーブ褐色バイラン土		95. 濃い黄褐色バイラン土	とてもよくしまり、ブロック含む	135. 黄褐色バイラン土	175. 褐色粘質土	
16. 黄褐色粘質土	56. オリーブ褐色バイラン土	ブロック含む	96. 濃い黄褐色バイラン土		136. 黄褐色粘質土	176. 褐色粘質土	よくしまる
17. 黄褐色砂質土	57. オリーブ褐色バイラン土		97. 濃い黄褐色バイラン土	ブロック少量含む	137. 灰黄褐色バイラン土	177. 濃い黄褐色粘質土	バイラン土粒含む
18. 黄褐色砂質土	58. 灰赤色粘質土		98. 褐色バイラン土		138. 黄褐色粘質土	178. 濃い黄褐色粘質土	バイラン土粒含む
19. 黄褐色バイラン土	59. 灰赤色粘質土	バイラン土粒少量含む	99. 濃い黄褐色バイラン土	よくしまり、ブロックやや多く含む	139. 灰黄褐色バイラン土	179. 黄褐色バイラン土	
20. 濃い黄褐色砂質土	60. 灰赤色粘質土		100. 濃い黄褐色バイラン土		140. 黄褐色バイラン土		礫
21. 濃い黄褐色砂質土	61. 褐色粘質土	青灰色バイラン土粒含む	101. 濃い黄褐色バイラン土	ブロック含む	141. 褐色粘質土		バイラン土粒含む
22. 濃い黄褐色砂質土	62. 褐色バイラン土		102. 濃い黄褐色バイラン土		142. 灰黄褐色バイラン土		しまりややなし
23. 褐色粘質土	63. 濃い黄褐色バイラン土		103. 褐色バイラン土		143. 黄褐色バイラン土		
24. 灰黄褐色砂質土	64. 青灰色バイラン土		104. 褐色バイラン土		144. 黄褐色バイラン土		黄褐色粘質土ブロック含む
25. 灰黄褐色砂質土	65. 褐色バイラン土	ブロック多く含む	105. 灰黄褐色バイラン土	礫で、ブロック含む	145. 灰黄褐色バイラン土		しまりなし
26. 灰黄褐色砂質土	66. 濃い黄褐色バイラン土	礫である	106. 濃い黄褐色バイラン土	山土粒含む	146. 黄褐色粘質土		バイラン土粒含む
27. 濃い黄褐色砂質土	67. 明褐色バイラン土	バイラン土粒微量含む、礫	107. 褐色バイラン土	ブロック多く含む	147. 黄褐色バイラン土		
28. 黄褐色砂質土	68. 濃い褐色バイラン土	礫	108. 褐色バイラン土	ブロック含む	148. 濃い黄褐色バイラン土		
29. 黄褐色砂質土	69. 褐色バイラン土	礫	109. 濃い黄褐色バイラン土	山土ブロック含む	149. 黄褐色バイラン土		
30. 褐色粘質土	70. 濃い褐色バイラン土	礫	110. 濃い黄褐色粘質土		150. 黄褐色バイラン土		しまりややなし
31. 濃い黄褐色砂質土	71. 濃い褐色バイラン土	ブロックを主体とする	111. 濃い黄褐色バイラン土	灰色粘土粒少量含む	151. 明褐色バイラン土		
32. 褐色砂質土	72. 濃い褐色バイラン土	ブロックを主体とする	112. 濃い黄褐色バイラン土		152. 褐色バイラン土		しまりなし
33. 灰褐色粘質土	73. 褐色バイラン土	ブロックを主体とする	113. 濃い黄褐色バイラン土	ブロック含む	153. 黄褐色粘質土		
34. 灰褐色粘質土	74. 明黄褐色バイラン土	ブロックを主体とする	114. 褐色バイラン土		154. 濃い黄褐色粘質土		
35. 濃い黄褐色砂質土	75. 褐色バイラン土	水平方向の層構造が明瞭	115. 褐色バイラン土		155. 黒褐色粘質土		
36. 灰黄褐色砂質土	76. 灰黄褐色砂質土	バイラン土ブロック含む	116. 褐色バイラン土		156. 黄褐色粘質土		
37. 褐色粘土粒少量含む	77. 褐色バイラン土	ブロックを主体とする	117. 褐色バイラン土	ブロックやや多く含む	157. 黄褐色粘質土		
38. 暗黄褐色粘質土	78. 明褐色バイラン土	ブロックを主体とする	118. 褐色バイラン土	ブロック含む	158. 濃い黄褐色粘質土		
39. 濃い黄褐色砂質土	79. 黄褐色バイラン土	ブロックを含む	119. 黄褐色バイラン土		159. 黄褐色粘質土		バイラン土粒含む
40. 褐色砂質土	80. 黄褐色バイラン土		120. 灰白粘質土		160. 褐色粘質土		

図40 7区北埋土層面(S=1/50)

1 基本土層

調査区北壁土層(図40)は堆積状況や土質から、大きくI層:腐植土及び旧耕土、II層:掘削埋土、III層:填丘構築土、IV層:掘削構築土、V層:地山の5層に分類できる。

I層(1~5層)は、腐植土及び黒褐色砂質土、褐色砂質土を主体とする。出土遺物に陶磁器の細片などを含むため、近世以降の耕作土であることは明らかである。上面の標高は119.8mである。

II層(6~52層)は、にぶい黄褐色砂質土や黄褐色砂質土を主体とし、地山(V層)の黄褐色バイラン土を含む。土質の共通性から6~16層、17~27層、28層、29~43層、44~52層の5層に分けることができる。これは掘削の埋め戻しの作業工程によるものである。堆積状況から、掘削の埋め戻しは主に掘削の外側から行われたと考えられる。上面の標高は120.1mである。

III層(53~70・92~174層)は、バイラン土を主体とする。土層の堆積状況から盛土と考えられる。土層は水平に堆積し、それぞれの層の厚さはおおよそ0.1mである。上面の標高は119.4mである。

堆積状況から、填丘構築に関わる土層(66~70・92~174層)と填丘化粧に関わる土層(53~65層)の2層にまとめることができる。

填丘構築に関わる土層は、さらに1次整地土、1次填丘盛土、2次填丘盛土に分類が可能である。1次整地土(66~70層・153~174層)は、明褐色粘質土を主体とし、地山(V層)のバイラン土粒を多く含む。各層は厚さ0.1mで水平に堆積し、全体の厚さは0.3mである。石室に近い部分にのみ、にぶい黄褐色粘質土や黄灰色粘質土を主体とする盛土(153~158層)を行っている。上面の標高は、調査区西端で118.5mであるが、それ以外は118.1mで水平である。

2次填丘盛土(92~152層)は、上層(92~119層)と下層(120~152層)に分けられる。上層は、にぶい黄褐色バイラン土を主体とする。それぞれの層は厚さ0.1m程で、堆積は水平に近いが、均一ではない。各土層の上面に版築の突き棒痕跡はない。上面の標高は119.3mである。下層は灰褐色粘質土と黄褐色バイラン土を主体とする。それぞれの層の厚さは0.1m未満が殆どで、水平に堆積する特徴があり、両者が互層となっている部分もある。各土層の上面には、突き棒の痕跡である深さ0.01m程の凹凸が認められるため、版築であることが明らかである(図45)。版築の厚さは0.5mで、上面の標高は最も填丘コアに近い地点で118.9m、最も填丘外表に近い地点で118.5mである。版築内から須恵器坏身(75)が出土している。

填丘化粧に関わる土層(53~65層)は、填丘掘基底石の据え付けに関する土層(63~65層)と、下段填丘斜面の仕上げに関する土層(54~62層)、東側掘削底面の仕上げに関する土層(53層)に分けられる。基底石の据え付けは、填丘構築後に行われ、基底石よりも一回り大きな掘方を掘った後、基底石を据えて完成させる。下段填丘斜面は灰赤色粘質土を主体とする土で仕上げが行われる。この土の断面形は1区で検出した上段填丘斜面の仕上げ土(図7-114層)と同様、片面がカットされた長楕円形の、土嚢状の形状を呈する。填丘掘平坦面は、黄褐色砂礫からなる。上面の標高は117.9mである。なお、下段填丘斜面の完成と東側掘削底面の完成の前後関係は土層観察からは不明である。

IV層(71~91層)は、褐色~にぶい黄褐色砂質土を主体とし、地山(V層)に由来するバイラン土を含む。掘削の外表面には、ブロック状の土が積み重ねられている箇所がある(81・86・87・89層)。

V層(175~179層)は、地山である。風化が進み非常に軟らかいバイラン土からなる部分と岩

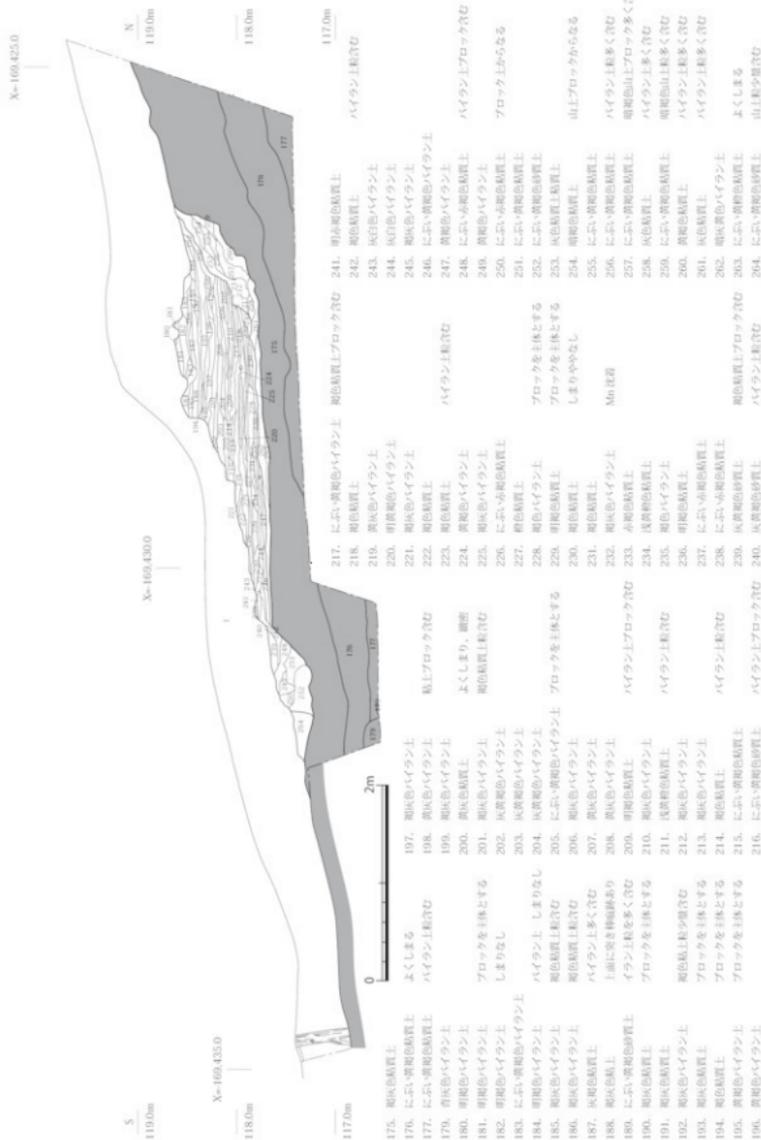


図 41 7区西壁土層図 (S = 1/50)

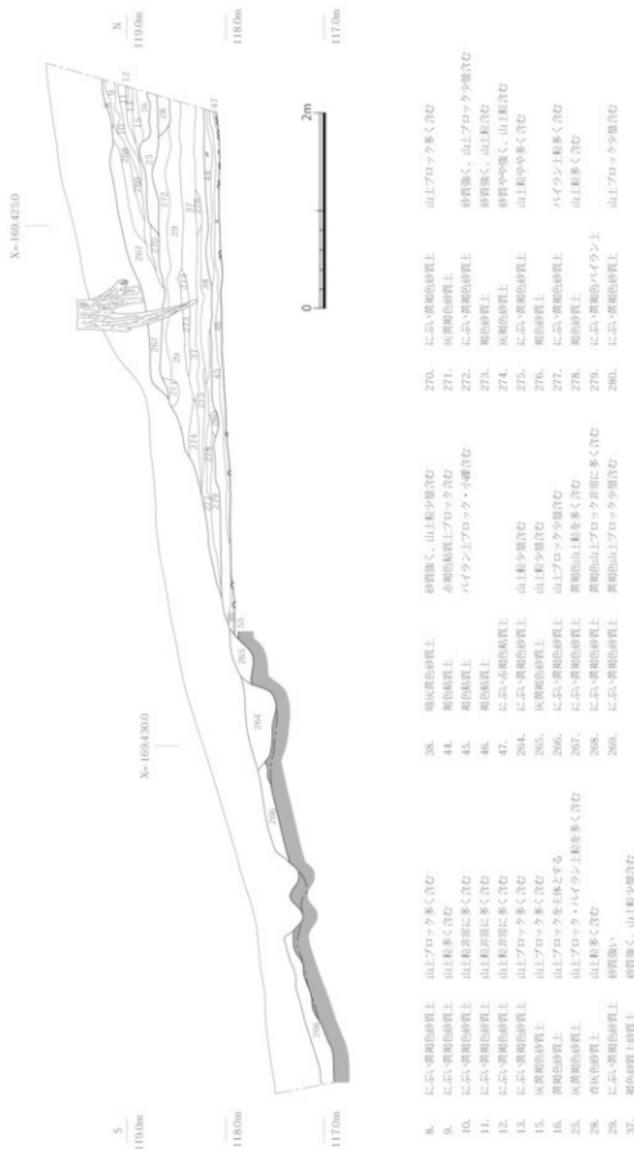


図 42 7区中央南北畦土層図 (S = 1/50)



図 43 7区平面図(素掘溝を除く。S = 1/100)

盤質で硬い部分がある。調査区の全体で確認した。墳丘コアの部分を除き、墳丘築造に関わりのある範囲は削平され、平坦である。上面の標高は墳丘コアの最上部で119.2m、平坦面で117.9mである。

なお、本調査区で検出した遺構は全て1層下面で検出している。

2 検出遺構

検出遺構は、素掘溝、墳丘、掘削、溝である(図43)。上層遺構には素掘溝と溝があり、下層遺構には墳丘、掘削がある。

(1) 上層遺構

素掘溝は南北方向を主軸とするもので、調査区の全面で検出した。幅0.4m、深さ0.4mを残す。北から南に3段のまとまりがあり、段々畑と考えられる(図版21下段)。出土物には磁器や須恵器、土師器があるが、いずれも細片である。遺構の形状及び出土物から、近世の遺構と考えられる。

溝(0701SD)は、幅2.1m、深さ0.4mを残す。長さは調査区外に延びるため、不明である。主軸

方位はE-17.5°-Nである。埋土はにぶい黄褐色砂質土(図41・42-264層)である。古墳との関係を見ると、溝の位置は墳丘裾とおおよそ重複し、溝(0701SD)により墳丘南辺は破壊されている。また墳丘東側でも、溝(0701SD)を境に北側は高く、南側は低くなっている。溝(0701SD)を境に南北で素掘溝の単位が変わることから、溝(0701SD)は、段々畑の段差に掘られた溝と考えられるものの、段々畑の単位がある程度古墳築造時の地形を反映していた可能性は否定できない。出土遺物には土師器と須恵器があるが、いずれも細片である。埋土から近世の遺構と考えられる。

(2) 下層遺構

検出遺構には、墳丘外表、掘割がある。

① 墳丘外表

遺構の形状と遺構の位置関係から、検出したのは下段墳丘斜面、墳丘裾基底石である。

下段墳丘斜面は、東西幅1.7m、高さ0.9mを検出した。上面は大きく削平を受け、本来の高さは不明である。墳丘斜面は後世の削平により大きく削平を受けているため、傾斜角は25.5°と、1区で検出した下段墳丘斜面の傾斜角30°と比較して緩やかである。斜面上には貼石等の痕跡はなく、灰赤色粘質土で墳丘面を化粧している。この粘質土は、土層観察では1区の上段墳丘斜面(図7-114層)と同様の形状であるが、平面観察ではブロックの単位は不明瞭である。斜面上からの出土遺物はない。検出した墳丘の標高は調査地北辺が最高で119.3mである。

墳丘裾基底石は、自然石を半加工したものである。南北方向に幅1.3m、4石を検出した。基底石は1段で、平坦面を外に向けて立て並べている。地上に露出した基底石の大きさは、幅0.5~0.8m、高さ0.3mである。基底石の上面は化粧土で覆われ、古墳完成時には基底石は側面しか見えていなかったと考えられる(図40・44)。基底石の多くは抜き取られ、墳丘南辺の墳丘裾基底石は溝(0701SD)の掘削により皆無である他、墳丘東辺にも抜き取り穴(0702SK)がある。

抜き取り穴(0702SK)は、南北長3.8m、東西幅0.7mを測り、深さ0.4mを残す。南端から1.2mの実を調査したところ、底面に表面が剝離した基底石の表面が5石分残存する。出土遺物がないため、時期不明である。

② 掘割

掘割は法面と、掘割底面を検出した。

法面は掘方前面に盛土をしている。掘方は地山(V層)を階段状に削り出したものである。1つ1つの段の規模は、高さ0.2~0.3m、奥行0.2~0.4mである。盛土は掘方の前面に幅0.2~0.5mの幅で黄褐色バイラン土を置いたもので、水平に堆積している。1つ1つの盛土の単位は、墳丘斜面のように土囊状の形状ではない。

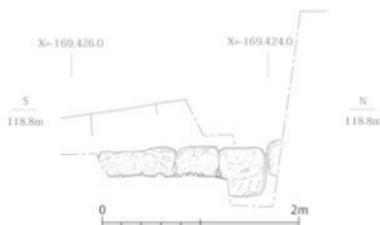


図44 7区墳丘裾基底石立面図(S=1/50)

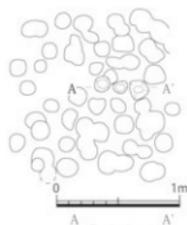


図45 7区版築突き棒痕跡平・断面図(S=1/40)

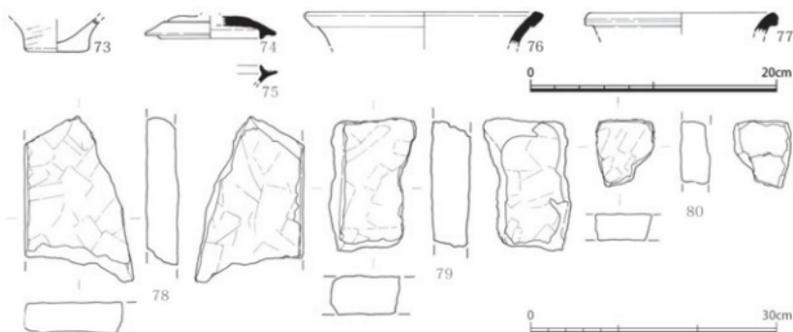


図46 7区出土遺物(73~77: S = 1/4, 78~80: S = 1/6)

西側掘削底面は、墳丘東辺の南端部付近で幅4.1m、南端から5.2m北側の調査区北壁で幅3.2mを測る。掘削法面側も、墳丘裾基底石側も直線的に延び、底面の全面に礫敷(0703SX)を敷設する。

礫敷(0703SX)は、一辺0.1m未満の角礫を密に敷設したもので、礫敷内には榛原石が含まれる他、少量ではあるが土師器や須恵器片の出土がある。上面の標高は、墳丘裾基底石の脇の墳丘東編の調査区北壁付近で118.1m、南端部付近で118.0mであり、北から南に向かって下がる。

土層から、掘削は掘削法面の完成後、掘削底面に礫敷を敷設したことが明らかである。

3 出土遺物

弥生土器(73)、須恵器(74~77)、磚(78~80)が出土した(図46)。

土師器甕(73)は、底部のみの残存で、底径4.6cmを測る。平底の口縁部から緩やかに胴部に移行する。器面調整は、胴部外面が叩きで、それ以外は内外面ともに横ナデである。

須恵器蓋(74)は、坏Gの蓋で、つまみを欠失する。口径は8.4cmを測る。かえりは端部が丸く、口縁部よりも下がっている。器面調整は、外面が長部が回転ヘラ削りである以外は、内外面ともに口ロナデである。

須恵器坏(75)は、口縁部の細片である。口径は復原不可能である。受け部は斜め上方に立ち上がり、内面の段はない。器面調整は、内外面ともに口ロナデである。

須恵器甕(76・77)は、口縁部の細片である。口径は76が18.2cm、77が14.8cmを測る。口縁端部は76は面取りし、外側に肥厚させるのに対し、77は断面三角形で、外側に肥厚させ、1条の沈線がめぐる。器面調整は共通し、内外面ともに口ロナデである。

磚(78~80)は、榛原石の割石である。78で一辺が残存する以外は、いずれも破片である。厚さは3.5~4.7cmを測る。もとの形状は方形と考えられる。磚は割石の側面を直線的に整えたもので、割石の表面は無調整である。

第8節 8区（古墳東辺）

8区は、古墳東辺の調査のために設定した。8区では、特に上段墳丘の築造方法を、現状で東西に長く延びる段状の地形を表土除去することによって、現地形の破壊を最小限に止めつつ、明らかにしようとするものであった。しかし結果的には、非常に厚く堆積した現代の盛土内の掘削に止まり、遺構面まで到達しなかったため、当初の目的を達成する事はできなかった。

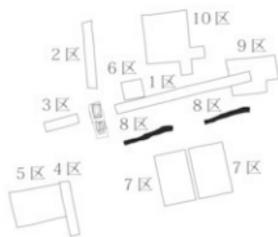


図 47 8区位置図

1 基本土層

調査区北壁土層（図 49）は堆積状況や土質から、大きく I 層：腐植土及び旧耕土、II 層：地山の 2 層に分類できる。

I 層（1～5 層）は、腐植土及び黒褐色砂質土を主体とする。何層に分かれるものの、最下層からも電球が出土することから、現代の堆積である。上面の標高は、調査区東端で 122.5m、調査区西端で 120.3m である。

II 層（6 層）は、地山である。東側の調査区の東部でのみ確認した。東から西に下がる。風化が進み非常に軟らかいバイラン土からなる部分と岩盤質で硬い部分がある。出土遺物はない。上面の標高は調査区東端で 122.3m である。

2 検出遺構

遺構面まで調査が及ばなかったため、検出遺構はない（図 48）。

3 出土遺物

土師器、須恵器があるが、いずれも細片で詳細は不明である。



図 48 8区平面図 (S = 1/100)

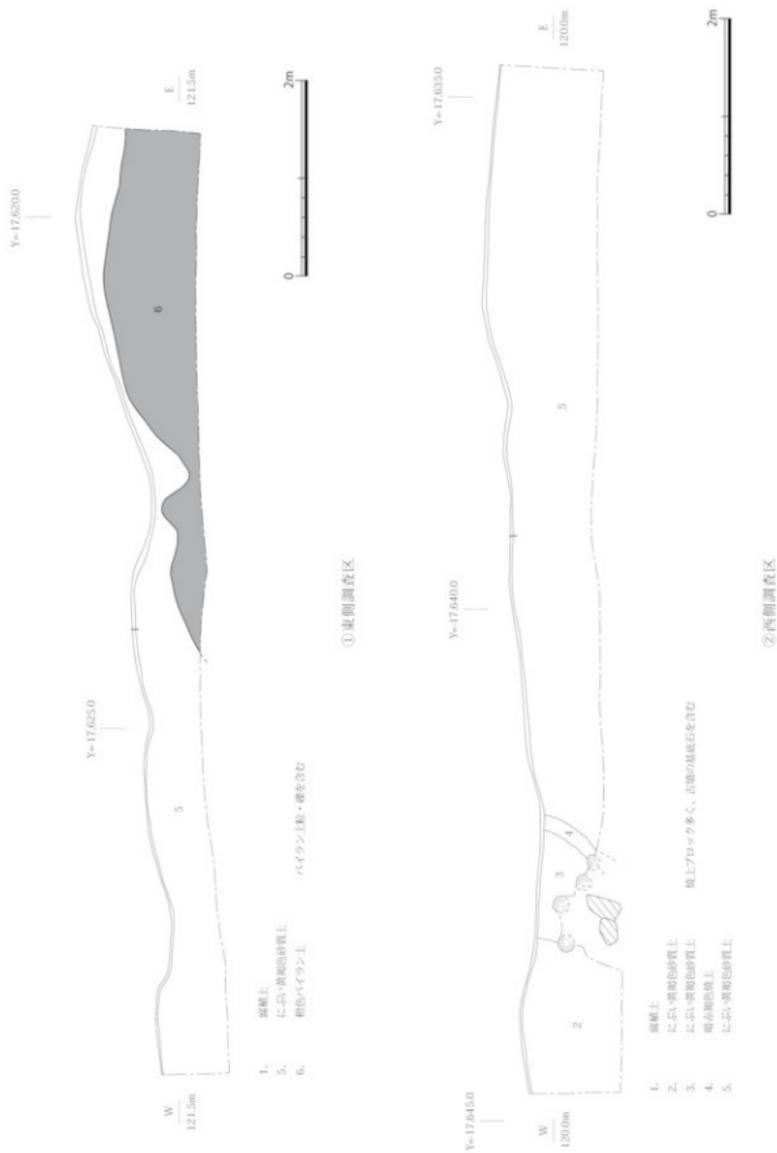


図 49 8区土層図 (S = 1/50)

第9節 9区（墳丘東側（墳丘外））

9区は、古墳の範囲確認及び関連施設の有無確認のために設定した。1区で検出した柱穴（0103・0104SP）を含む遺構の検出が想定された。

1 基本土層

調査区土層（図52～55）は堆積状況や土質から、大きくI層：腐植土及び旧耕土、II層：盛土（藤原宮期?）、III層：盛土（藤原宮期以前）、IV層：地山の4層に分類できる。

I層（1～4層）は、腐植土及び褐灰色砂質土にふい黄褐色砂質土を主体とする。出土遺物に陶磁器の細片などを含むため、近世以降の層であることは明らかである。上面の標高は調査区中央付近で123.3mである。

II層（5～27・32～51・113・121・123～125層）は、灰褐色砂質土やにふい黄褐色砂質土を主体とする。土層の堆積状況から盛土と考えられる。盛土の単位は、内側が水平方向に丁寧な積みであるのに対し、外側にいくにつれて単位が粗くなり、0.3m程の厚さの層もある。II層は、上面が掘立柱建物（0907SB）の柱穴（0902SP）の掘り込み面であることから、掘立柱建物（0907SB）を建てるための盛土と考えられる。なお、柱穴（0902SP）埋土は114～120・122層である。出土遺物には土師器や須恵器（82・83）、軒丸瓦（84）がある。上面の標高は122.6mである。

III層（28～31・52～111・126～170層）は、褐灰色砂質土や橙色パイラン土を主体とする。

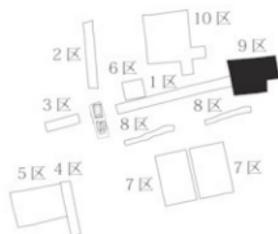
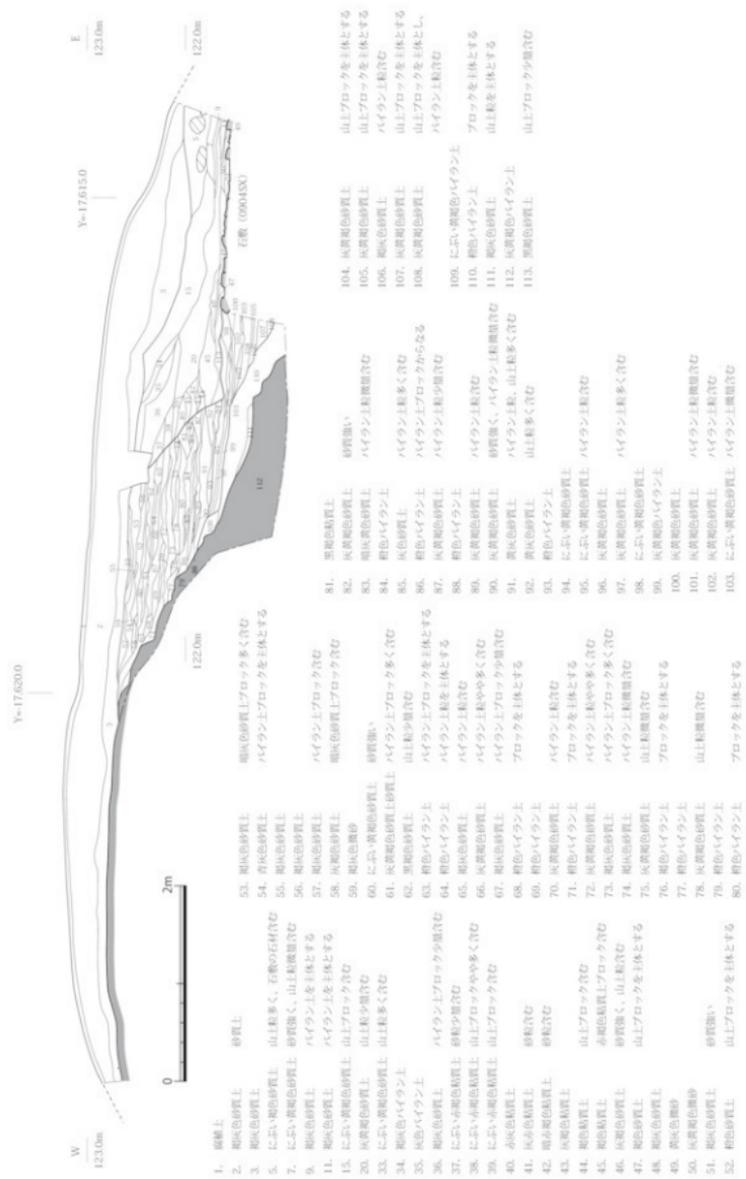


図50 9区位置図



図51 9区土層位置図（S = 1/100）



1. 砂質土
2. 褐色砂質土
3. 褐色砂質土
4. 褐色砂質土
5. 褐色砂質土
6. 褐色砂質土
7. 褐色砂質土
8. 褐色砂質土
9. 褐色砂質土
10. 褐色砂質土
11. 褐色砂質土
12. 褐色砂質土
13. 褐色砂質土
14. 褐色砂質土
15. 褐色砂質土
16. 褐色砂質土
17. 褐色砂質土
18. 褐色砂質土
19. 褐色砂質土
20. 褐色砂質土
21. 褐色砂質土
22. 褐色砂質土
23. 褐色砂質土
24. 褐色砂質土
25. 褐色砂質土
26. 褐色砂質土
27. 褐色砂質土
28. 褐色砂質土
29. 褐色砂質土
30. 褐色砂質土
31. 褐色砂質土
32. 褐色砂質土
33. 褐色砂質土
34. 褐色砂質土
35. 褐色砂質土
36. 褐色砂質土
37. 褐色砂質土
38. 褐色砂質土
39. 褐色砂質土
40. 褐色砂質土
41. 褐色砂質土
42. 褐色砂質土
43. 褐色砂質土
44. 褐色砂質土
45. 褐色砂質土
46. 褐色砂質土
47. 褐色砂質土
48. 褐色砂質土
49. 褐色砂質土
50. 褐色砂質土
51. 褐色砂質土
52. 褐色砂質土
53. 褐色砂質土
54. 褐色砂質土
55. 褐色砂質土
56. 褐色砂質土
57. 褐色砂質土
58. 褐色砂質土
59. 褐色砂質土
60. 褐色砂質土
61. 褐色砂質土
62. 褐色砂質土
63. 褐色砂質土
64. 褐色砂質土
65. 褐色砂質土
66. 褐色砂質土
67. 褐色砂質土
68. 褐色砂質土
69. 褐色砂質土
70. 褐色砂質土
71. 褐色砂質土
72. 褐色砂質土
73. 褐色砂質土
74. 褐色砂質土
75. 褐色砂質土
76. 褐色砂質土
77. 褐色砂質土
78. 褐色砂質土
79. 褐色砂質土
80. 褐色砂質土
81. 褐色砂質土
82. 褐色砂質土
83. 褐色砂質土
84. 褐色砂質土
85. 褐色砂質土
86. 褐色砂質土
87. 褐色砂質土
88. 褐色砂質土
89. 褐色砂質土
90. 褐色砂質土
91. 褐色砂質土
92. 褐色砂質土
93. 褐色砂質土
94. 褐色砂質土
95. 褐色砂質土
96. 褐色砂質土
97. 褐色砂質土
98. 褐色砂質土
99. 褐色砂質土
100. 褐色砂質土
101. 褐色砂質土
102. 褐色砂質土
103. 褐色砂質土

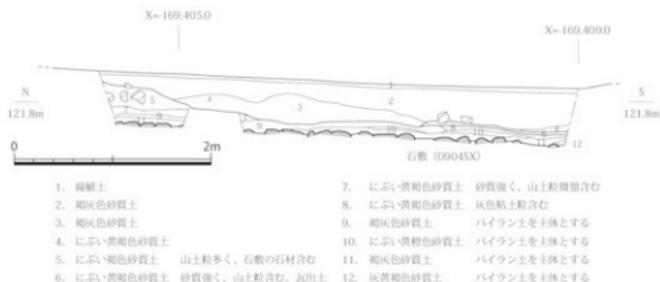
図 52 9区北壁土層図 (S = 1/500)

Y=17.6200

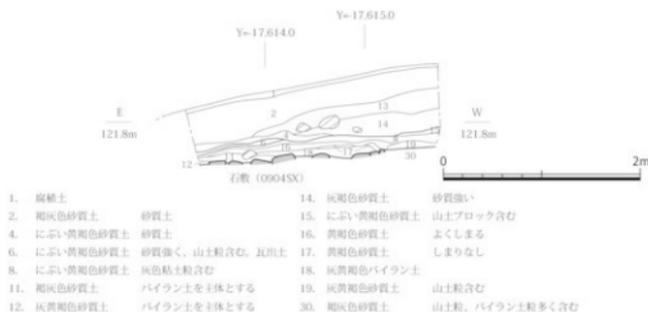


- | | | |
|------------------------------------|---------------------------------------|---------------------------------------|
| 5. にかい礫色の砂質土
山上部多く、石巻の石積含む | 121. 灰黄褐色の砂質土
山上部多く、石巻の石積含む | 147. にかい礫色の砂質土
山上部を主体とし、ハイラン上積少量含む |
| 6. にかい礫色の砂質土
砂質強く、山上積層含む | 122. 灰黄褐色の砂質土
ハイラン上を主体とする | 148. にかい礫色の砂質土
山上部を主体とし、ハイラン上積少量含む |
| 7. 褐色の砂質土
ハイラン上を主体とする | 123. 暗赤褐色の砂質土
ハイラン上積層含む | 149. にかい礫色の砂質土
山上部を主体とし、ハイラン上積少量含む |
| 11. 褐色の砂質土
ハイラン上を主体とする | 124. 暗赤褐色の砂質土
ハイラン上積層含む | 150. 灰黄褐色の砂質土
山上部を主体とし、ハイラン上積少量含む |
| 20. 灰黄褐色の砂質土
山上部を主体とする | 125. 灰黄褐色の砂質土
ハイラン上積層含む | 151. 黄褐色の砂質土
プロックを主体とする |
| 45. 褐色の砂質土
赤褐色のハイラン上
積層含む | 126. 黄褐色の砂質土
プロックを主体とする | 152. 灰黄褐色の砂質土
山上部を主体とする |
| 46. 灰黄褐色の砂質土
砂質強く、山上積含む | 127. にかい礫色の砂質土
ハイラン上積層含む | 153. 灰黄褐色の砂質土
山上部を主体とし、ハイラン上積少量含む |
| 47. 褐色の砂質土
山上部を主体とする | 128. 灰黄褐色の砂質土
山上部を主体とする | 154. 灰黄褐色の砂質土
プロックを主体とする |
| 98. にかい礫色の砂質土
ハイラン上積含む | 129. 褐色の砂質土
ハイラン上積層含む | 155. 褐色の砂質土
山上部を主体とし、ハイラン上積少量含む |
| 102. 灰黄褐色の砂質土
ハイラン上積含む | 130. 灰黄褐色の砂質土
プロックを主体とする | 156. 灰黄褐色の砂質土
山上部を主体とし、ハイラン上積少量含む |
| 103. にかい礫色の砂質土
ハイラン上積含む | 131. 褐色の砂質土
プロックを主体とする | 157. 褐色の砂質土
山上部を主体とし、ハイラン上積少量含む |
| 104. 灰黄褐色の砂質土
山上部を主体とする | 132. 灰黄褐色の砂質土
山上部を主体とする | 158. 褐色の砂質土
プロックを主体とする |
| 105. 灰黄褐色の砂質土
山上部を主体とする | 133. 灰黄褐色の砂質土
ハイラン上積層含む | 159. 褐色の砂質土
ハイラン上積層含む |
| 106. 褐色の砂質土
砂質土、山上部を主体とする | 134. にかい礫色の砂質土
ハイラン上積層含む | 160. 褐色の砂質土
ハイラン上積層含む |
| 107. 灰黄褐色の砂質土
砂質土、山上部を主体とする | 135. 灰黄褐色の砂質土
プロックを主体とする | 161. 灰黄褐色の砂質土
ハイラン上積層含む |
| 108. 灰黄褐色の砂質土
山上部を主体とする | 136. 褐色の砂質土
ハイラン上積層含む | 162. 褐色の砂質土
山上部を主体とし、ハイラン上積少量含む |
| 110. 褐色の砂質土
プロックを主体とする | 137. 灰黄褐色の砂質土
プロックを主体とする | 163. 褐色の砂質土
山上部を主体とし、ハイラン上積少量含む |
| 112. 灰黄褐色の砂質土
山上部を主体とする | 138. 褐色の砂質土
プロックを主体とする | 164. 褐色の砂質土
山上部を主体とする |
| 113. 灰黄褐色の砂質土
ハイラン上積含む | 139. にかい礫色の砂質土
山上部を主体とし、ハイラン上積含む | 165. 褐色の砂質土
山上部を主体とする |
| 114. 灰黄褐色の砂質土
ハイラン上積含む | 140. 褐色の砂質土
プロックを主体とする | 166. 灰黄褐色の砂質土
ハイラン上積層含む |
| 115. 褐色の砂質土
山上部を主体とする | 141. にかい礫色の砂質土
山上部を主体とし、ハイラン上積少量含む | 167. にかい礫色の砂質土
山上部を主体とする |
| 116. にかい礫色の砂質土
山上部を主体とする | 142. 褐色の砂質土
山上部を主体とする | 168. 褐色の砂質土
プロックを主体とする |
| 117. にかい礫色の砂質土
山上部を主体とする | 143. 灰黄褐色の砂質土
山上部を主体とし、ハイラン上積含む | 169. にかい礫色の砂質土
プロックを主体とする |
| 118. 灰黄褐色の砂質土
山上部を主体とする | 144. 灰黄褐色の砂質土
プロックを主体とする | 170. 灰黄褐色の砂質土
プロックを主体とする |
| 119. 灰黄褐色の砂質土
山上部を主体とし、ハイラン上積含む | 145. 褐色の砂質土
プロックを主体とする | |
| 120. 灰黄褐色の砂質土
山上部を主体とし、ハイラン上積含む | 146. にかい礫色の砂質土
山上部を主体とし、ハイラン上積含む | |

図 53 9 区北壁断ち割り部土層図 (S = 1/50)



①調査区東壁の一部



②調査区南壁の一部

図 54 9区土層図(調査区壁、部分。S=1/50)

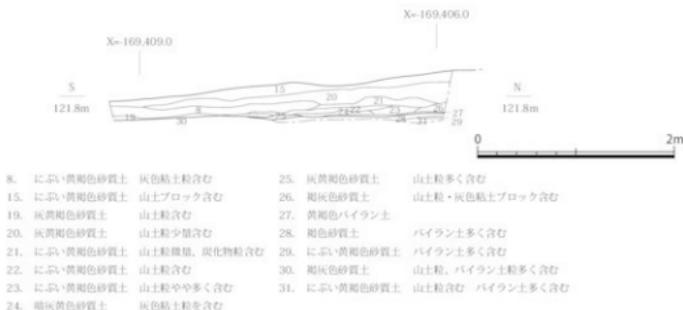
土層の堆積状況から盛土と考えられ、作業工程から上層(28~31・52~108・126~166・169層)と下層(109~111・167・168・170層)の2層に分けられる。層全体の厚さは1.7m以上、それぞれの層は厚さ0.1mで、水平に堆積する。層の厚さや堆積の状況から、版築の可能性があるが、突き棒の痕跡は確認できない。また、Ⅲ層は斜面外側の一部をカットし、平坦面を造り出しており、その上面に石敷(0904SX)を敷設する。上面の標高は最高地点で122.7m、石敷面は121.6mである。

Ⅳ層(112層)は、地山である。風化が進み非常に軟らかいバイラン土からなる。調査区の全体で確認した。調査区の東半は西から東へ下がっている。この地形の傾斜は、原地形をある程度踏襲していると考えられるが、段状に整形した可能性もある。上面の標高は調査区中央部で122.7m、東端で121.0mである。

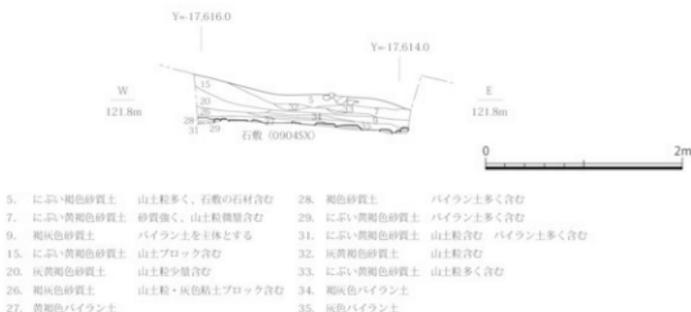
なお、本調査区で検出した遺構は全てⅠ層下面で検出している。

2 検出遺構

検出遺構は、掘立柱建物、盛土、石敷である(図57)。本調査区では、中世以降の遺構からなる上層遺構は存在しない。また本調査区はⅠ区と調査区を重複させて設定している。



①石敷 (0904SX) 西側整地土断面



②石敷 (0904SX) 東西畦

図 55 9区土層図 (部分。S = 1/50)

(1) 下層遺構

検出した掘立柱建物 (0907SB) と石敷 (0904SX) はともに盛土上面が検出面である。遺構と古墳の位置関係は、墳丘の掘割の東側隣接地の、南北方向に延びる土手状の高まりにあたる。

①掘立柱建物

掘立柱建物 (0907SB) は、盛土 (II層) 上面から掘り込まれた遺構である (図 58)。後述する 10区でも柱穴の一部を検出しており、この成果を加味して建物を復原すると、東西 15.0m (5間)、南北 12.0m (4間) 以上の規模の東西棟で、柱間は桁行・梁間ともに 3.0m (10尺) である。主軸方位は E-5°-N である。掘立柱建物 (0907SB) は東・北・西辺を一連の調査で確認したが、南辺は未検出である。建物内には北の隅柱から数えて 2間目に東西方向の間仕切りがあ

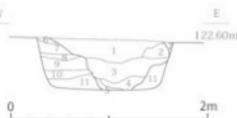


図 56 9区柱穴 (0104SP) 土層図 (S = 1/50)



图 57 9区道构配置图 (S = 1/100)

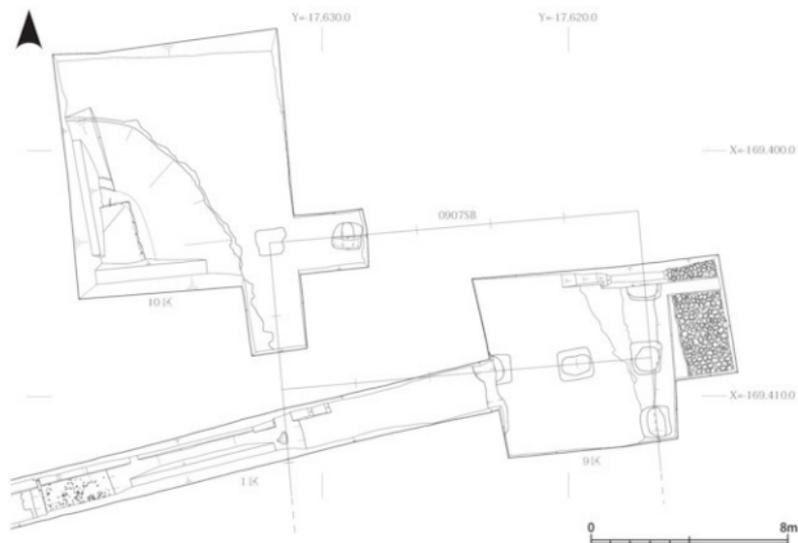


图 58 9区据立柱建物 (0907SB) 平面图 (S = 1/200)

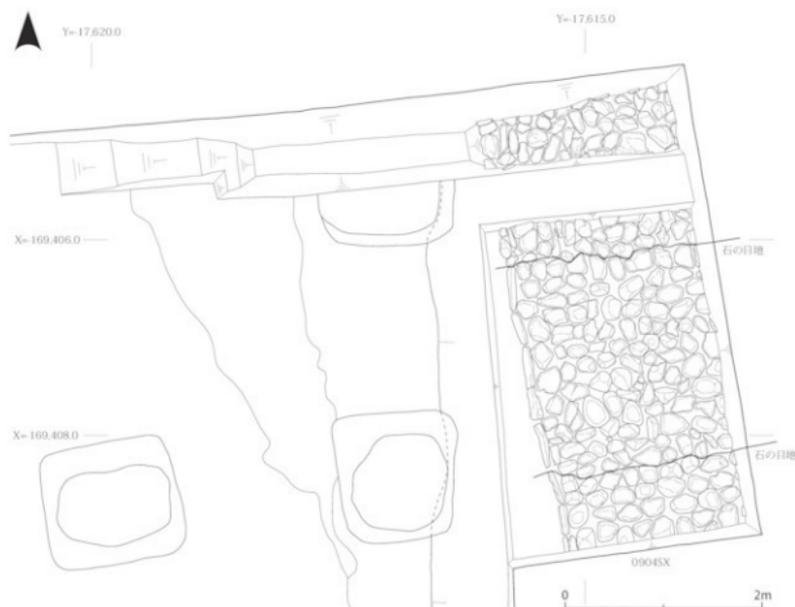


図 59 9区石敷 (0904SX) 平面図 (S = 1/50)

り、1区で検出した柱穴はこの間仕切りの柱穴であることが明らかとなった。柱穴は一辺1.3mの隅丸方形で、深さ0.6mを残す。いずれの柱穴も東西方向に抜き取られている。柱穴の平面規模と残存する深さから、掘立柱建物が造られた時点の地表面は、検出面よりも0.7mは高かったと考えられる。遺構は遺構保存の観点から、柱穴の調査は遺構を半截するに止めた。出土遺物がないため、時期は不明だが、遺構のベース面である盛土(Ⅱ層)出土遺物から、藤原宮期の遺構の可能性がある。盛土(0905・0906SX)より新しい。

②盛土

盛土(0905SX)は、東西幅3.7m、南北長7.0m、高さ1.0mを残す。盛土(0906SX)及び石敷(0904SX)の上面に施工される。Ⅱ層にあたり、土層の単位は粗い。上面が掘立柱建物(09075B)の柱穴掘り込み面であることから、盛土(0905SX)は、掘立柱建物(09075B)建築に伴う造成と考えられる。出土遺物に須恵器(82・83)や瓦(84)がある。出土遺物から藤原宮期までの遺構と考えられる。

盛土(0906SX)は、東西幅5.5m、南北長7.0m、高さ1.7mを残す。南北に延びる土手状の高まりの東斜面に施工され、盛土の西端部を検出した。Ⅲ層にあたる。地山に接する地点の盛土のみは斜面の形状に沿っているが、それ以外の部分の整地は水平に、丁寧に。盛土は、土質の異なる層を互層に積んだもので、土層の状況は7区で検出した版築と極めて似ている。盛土は一定の高さまで施工した後、斜面の外側にあたる部分に平坦面を造り出し、その上面に石敷(0904SX)を敷設している。また、石敷(0904SX)を敷設した平坦面の西側(山側)には、石敷(0904SX)よりも上部にまで盛土が続いているが、その表面は整形され、緩やかな斜面を形成している。この斜面は傾斜角 46° 、

残存高 0.8m で、西から東に下がる。出土遺物がないため時期不明だが、盛土 (0905SX) との新旧関係から、藤原宮期以前の遺構であることは明らかで、菖蒲池古墳の掘削が埋められる時期より前の遺構と考えられる。石敷 (0904SX) と同時期で、盛土 (0905SX) よりも古い。

③石敷

石敷 (0904SX) は、一辺 0.2m の石英閃緑岩を中心とする河原石を平坦に敷きつめた玉石敷で、南北長 4.5m、東西幅 1.9m を残す (図 59)。主軸方位は $N - 11^{\circ} - W$ である。調査区内で検出したのは、遺構西端部の一部のみである。石敷 (0904SX) は、盛土 (0906SX) を削り出して造成した東西幅 2.9m 以上の南北に長い平坦面に敷設されている。

石敷の西端には削り石を立てて並べた緑石がある。この緑石は、一辺 0.5m、厚さ 0.1m の結晶片岩を中心とし、15 石を検出した。結晶片岩の削り石は、8 石を検出した。幅が広いもののみで、側面を叩いて平滑に整える (図版 37 下段)。緑石の役割については、緑石と玉石敷は上面を描いて敷設される点と、緑石の西側と土手状の高まりとの間には 0.9m の平坦面が空閑地として設けられる点から、石敷の西側にある土手状の高まりの基底石としての役割ではなく、玉石敷の装飾と玉石敷を敷設する基準線としての役割を果たしたと考えられる。なお、玉石敷 (0904SX) の標高は調査区北端で 121.6m、調査区南端で 121.4m で、南北 4.5m に対して 0.2m の北から南に下がる傾斜を持つ。

玉石敷の敷設について、石敷内には東西方向に直線的に延びる目地を 2 列確認できる。目地と目地の間隔は、最大で 2.1m であることから、この幅が一度に行った玉石敷の敷設単位と考えられる。結晶片岩の位置もこれに対応すると考えられる。出土遺物には、土師器細片があるが、時期を特定できない。しかし、遺構の新旧関係から盛土 (0906SX) と同時期の遺構であることは明らかである。

3 出土遺物

土師器 (81)、須恵器 (82・83)、瓦 (84) が出土した (図 60)。

土師器皿 (81) は、口縁部のみが残存で、口径 10.8 cm を測る。平底の底部から緩やかに立ち上がり、内彎気味の口縁部に至る。器面調整は内外面ともに横ナデである。

須恵器蓋 (82) は、坏 G の蓋である。口径 9.7 cm、器高 3.3 cm を測り、つまみは宝珠が扁平になりつつある。かえりは端部が尖り、口縁部と同じ高さである。器面調整は、外面が天井部が回転ヘラ削りである以外はロクロナデで、内面は天井部が一方方向の指ナデ、それ以外はロクロナデである。

須恵器坏 (83) は、坏 G である。口径 8.7 cm、器高 3.2 cm を測る。平底の底部から緩やかに立ち上がり、直立気味の口縁部に至る。器面調整は、底部外面が回転ヘラ削り、それ以外はロクロナデである。

軒丸瓦 (84) は、複弁八葉蓮華文軒丸瓦の一部である。外区は欠失し、内区の蓮弁と中房の蓮子のみが残存する。文様は非常にシャープであることから、版の傷みがあまりない時期の製作である可能性がある。

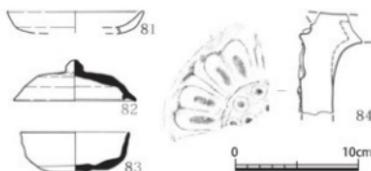


図 60 9区出土遺物図 (S = 1/4)

第10節 10区（古墳北東隅）

10区は、墳丘の南北幅確定及び古墳関連遺構の調査のために設定した。1・2区の調査成果から、墳丘北東隅及び掘割の検出が想定された。

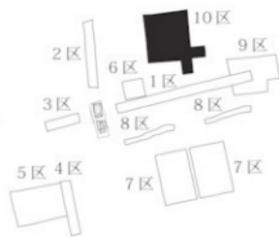


図61 10区位置図

1 基本土層

調査区南・西壁土層（図62・63）は堆積状況や土質から、大きく、Ⅰ層：腐植土及び旧耕土、Ⅱ層：掘割埋土、Ⅲ層：墳丘、構築土、Ⅳ層：掘割構築土、Ⅴ層：地山の5層に分類できる。

Ⅰ層（1・105層）は、腐植土及び褐色砂質土を主体とする。上面の標高は122.8mである。

Ⅱ層（2～82・106～189層）は、掘割の埋め戻しの作業工程による堆積状況から①2～13・106～117層、②14～24・118～121層、③25～29・122～149層、④30～36・150～162層、⑤37～51・163～173・189層、⑥52～73・174～184層、⑦74～80層、⑧81・82・185～188層、の8層に分けられる。このうち上層に相当する①～③層は、地山（Ⅳ層）の黄褐色パイラン土を含む砂質土からなり、墳丘外から埋め戻すのに対し、下層に相当する④～⑧層は褐色パイラン土やにぶい赤褐色粘質土からなり、墳丘側と掘割側の両方から埋め戻している。また④層の上部は地山（Ⅴ層）の褐色パイラン土（151層）とにぶい褐色粘質土（152層）を鋸歯状に置き、整地している。この鋸歯状の粘質土の表面を水洗したところ、粘質土の表面に皺状の凹凸を検出する事ができた（図版48下段）。Ⅱ層は、一部を除いて1区や7区のような丁寧な埋め戻しをおこなっていないのが特徴である。出土遺物に、土師器や須恵器の他、榛原石の磚などがある（図76・77）。上面の標高は122.5mである。

Ⅲ層は、にぶい赤褐色粘質土からなる。1・7区で確認した土囊状のブロックは、墳丘の断ち割り調査を行っていないため、断面観察での確認はできない。103層は墳丘基底石の掘方埋土で、Ⅴ層の黄褐色岩盤（104層）を削りこむ。

Ⅳ層（83～102・190～217層）は、にぶい黄褐色砂質土及び地山（Ⅴ層）のパイラン土を主体とする。丁寧に掘割背面の全面に盛土し、その前面に部分的にパイラン土ブロックを積み重ねている。このパイラン土ブロックは、断面形が長楕円を斜めに切ったような形状で、1・7区において墳丘表面で検出した土塊状のブロックと形状が類似する。出土遺物には須恵器細片がある。

Ⅴ層（104層）は、地山である。風化が進み非常に軟らかいパイラン土からなる部分と岩盤質で硬い部分がある。掘割で確認した。墳丘部分の状況は発掘調査していないため、確認できない。上面の標高は掘割最上部で122.3m、掘割底面で119.3mである。

なお、本調査区で検出した遺構は全てⅠ層下面で検出している。

2 検出遺構

検出遺構は、素掘溝、墳丘外表、掘割、掘立柱建物である。このうち素掘溝が上層遺構であり、そ

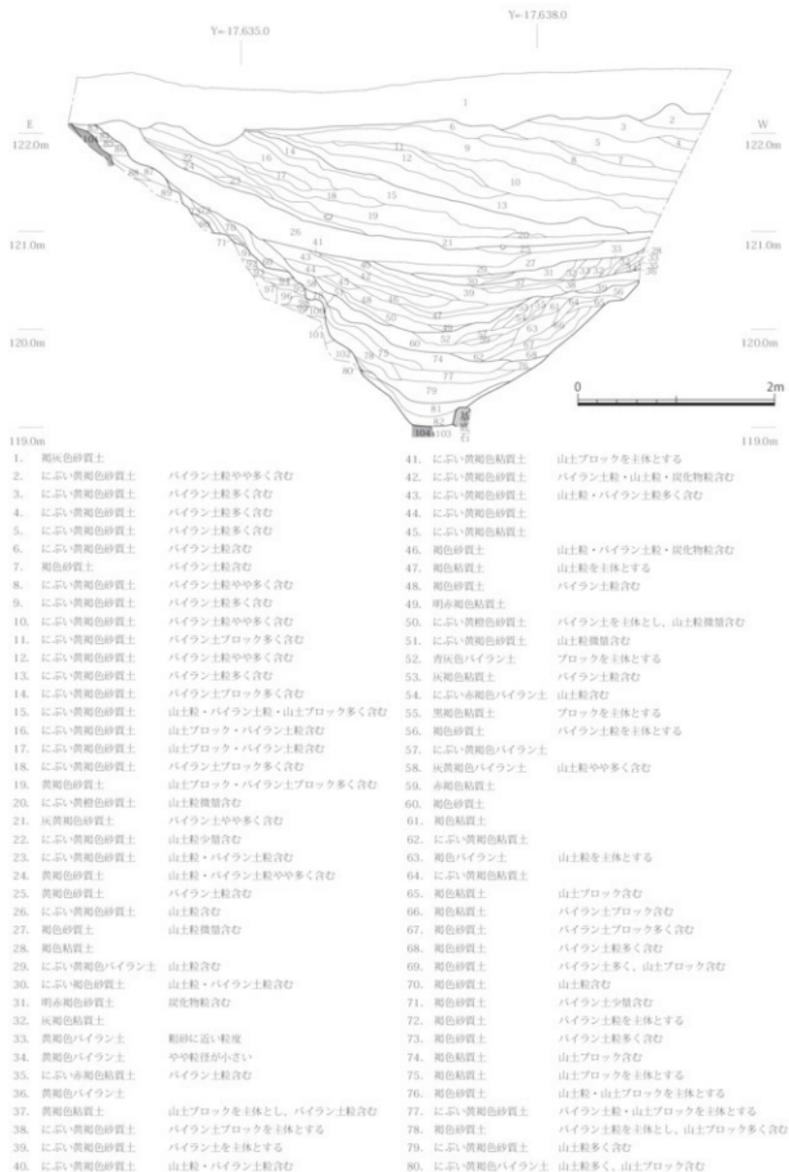


図 62 10 区南壁土層図 (S = 1/50)

81. 褐色砂質土	山土粒含む	93. 黄褐色砂質土	バイラン土ブロック非常に多く含む
82. 褐色粘質土	山土粒・バイラン土粒含む	94. 灰褐色粘質土	バイラン土ブロック多く含む
83. 灰黄褐色砂質土		95. 黄褐色砂質土	
84. 黄褐色バイラン土		96. 黄褐色砂質土	山土ブロック少量含む
85. にぶい黄褐色バイラン土	ブロックを主体とする	97. 暗灰褐色バイラン土	バイラン土ブロック非常に多く含む
86. 褐色砂質土	ブロック含む	98. 灰褐色粘質土	ブロックを主体とする
87. にぶい黄褐色粘質土	バイラン土ブロックを主体とする	99. 黄褐色砂質土	バイラン土ブロック少量含む
88. 褐色バイラン土	バイラン土ブロック含む	100. 暗灰色粘質土	バイラン土ブロック多く含む
89. 灰褐色粘質土	ブロックを主体とする	101. 暗灰色粘質土	バイラン土粒少量含む
90. 褐色粘質土		102. 灰黄褐色粘質土	バイラン土ブロック多く含む
91. 灰褐色粘質土		103. 褐色バイラン土	
92. 黄褐色砂質土		104. 明黄褐色バイラン土	ブロックを主体とする

の他の遺構は下層遺構である。

(1) 上層遺構

素掘溝は、東西方向を主体とし、調査区の全面で検出した。幅 0.4m、深さ 0.2m を残す。出土遺物には磁器や須恵器、土師器があるが、いずれも細片である。遺構の形状及び出土遺物から、近世の遺構と考えられる。

(2) 下層遺構

検出遺構には、墳丘外表、掘割、掘立柱建物がある(図 65)。

① 墳丘外表

遺構の形状と遺構の位置関係から、検出したのは墳丘北東隅の下段墳丘斜面と墳丘裾基底石及び、基底石据え付け溝である(図 65～67)。

下段墳丘斜面は、北辺で幅 1.2m、高さ 1.0m を、東辺で幅 2.5m、高さ 1.2m を検出した。10 区は石室周辺では、最も高所の平坦地に設定した調査区のため、墳丘の残存状況は良好である。同一平坦地に調査区を設定した 1・2・6 区では上段墳丘裾平坦面を検出していることから、下段墳丘斜面は墳丘北東隅においては、築造時の形状を残していると考えられる。墳丘斜面の傾斜は一定で、傾斜角は北辺で 27°、東辺で 37° である。斜面上には貼石等の痕跡はなく、にぶい赤褐色粘質土によって墳丘面を化粧している。この粘質土は、色調や土質から他の調査区で検出した墳丘斜面の化粧土と同一のものと考えられるが、化粧土のブロックの単位を平面観察で見出すことは出来ない。斜面上からの出土遺物はない。

墳丘裾基底石は、石英閃緑岩の自然石を半加工したもので、北辺は、幅 2.5m、4 石、東辺は幅 1.3m、6 石を検出した。このうち墳丘北東隅の基底石は、5 区で検出した墳丘南西隅の基底石と同様、1 石のうち 2 面の側面を加工して 2 辺の基底石を共有するため、検出した基底石は 9 石である。基底石は 1 段で、平坦面を外に向けて立て並べている。それぞれの基底石の本来の大きさは、幅 0.3～0.5m、高さ 0.4m であるが、地上に露出した基底石は高さ 0.2m である。基底石の上面は化粧土で覆われ、古墳完成時には基底石は側面しか見えていなかったと考えられる(図 66・67)。

溝(1003SD)は、基底石に沿って掘られた溝で、基底石の外側 0.2m の位置に溝の外側の掘方がある。溝(1003SD)の内側の掘方は、7 区の調査成果から墳丘の下面にあると考えられる。溝内には基底石が置かれていることから、溝(1003SD)は墳丘裾基底石据え付け溝と考えられる。出土遺物はない。

② 掘割

法面と、掘割底面を検出した。

法面は幅 3.2m、高さ 3.1m を検出した。斜面は直線的ではないが、傾斜角 44.0° である。掘割は

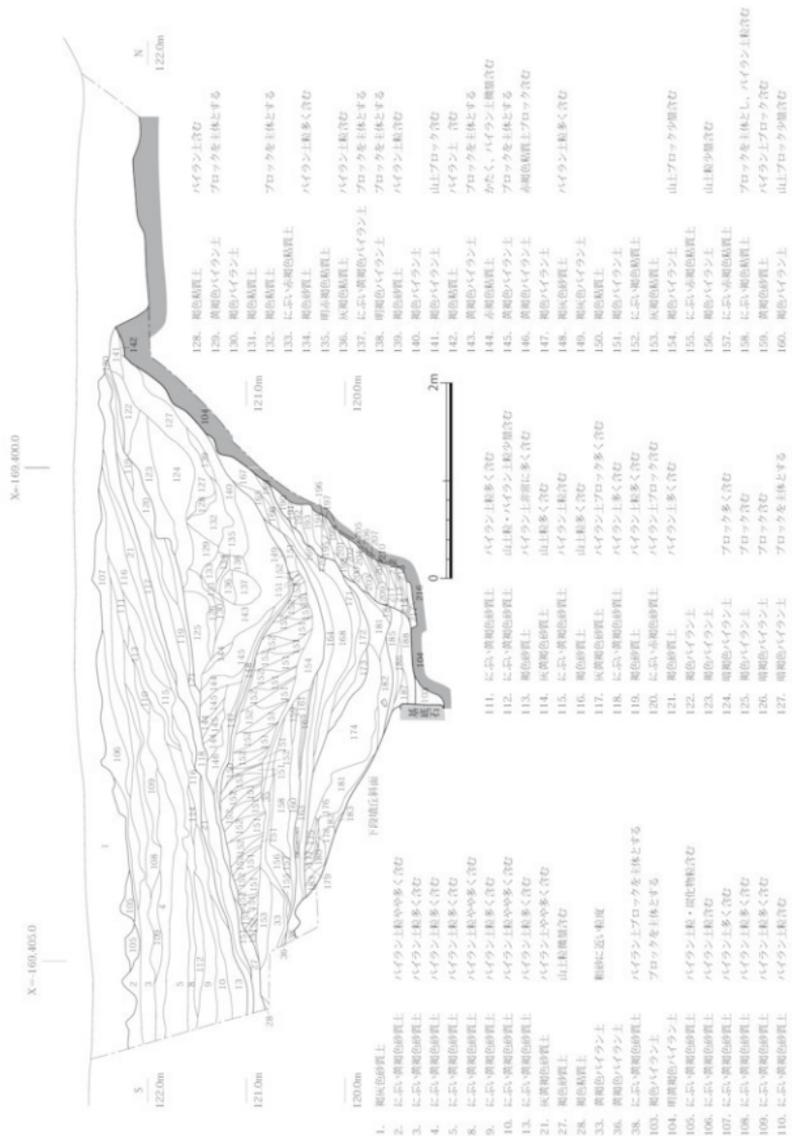


図 63 10 区西壁土層図 (S = 1/50)

地山（V層）を削り出して成形した掘方前面に盛土をして仕上げる。掘方は、部分的に緩やかな階段状を呈する。盛土は掘方の前面に幅0.4m、高さ0.1m、奥行0.2mの大きさの褐色粘質土等の粘土ブロックを置き、その背面に裏込めとして褐色バイラン土を水平に盛土している。粘土ブロックは、断面形が1・7区で検出した土糞状ブロックと類似し、平面形も楕円形をしている特徴がある。粘質土ブロックの色調は暗赤褐色、褐色、赤色、にぶい赤褐色、黒色、明赤褐色、明褐色の7色があり、それぞれの色調のブロックの隙間にはバイラン土が入り込んでいる。法面の築造については、法面の断ち割り調査で、幅0.4m、深さ0.1mの溝（1004SD）が掘削斜面の化粧土の下面をめぐっている。溝の中には長軸0.4m、短軸0.2mの楕形の平面形を呈する赤褐色粘質土ブロックが並べられている。また溝（1004SD）の填丘寄りの掘方の位置は、掘削堀と一致することから、溝（1004SD）は、掘削の仕上がりの位置を確定させるための遺構と考えられる。

掘削底面は、填丘北辺で填丘北東隅から西に0.7mの地点で幅0.7m、填丘北東隅で幅0.2m、填丘東辺で填丘北東隅から南に2.4mの地点で幅0.4mを測り、コーナー部は緩やかに弧を描く。本調査区で検出した掘削底面には、5・7区で検出したような礫敷はなく、地山（IV層）と、基底石据え付け溝（1003SD）が露出した状態である。出土遺物は無い。上面の標高は、コーナー部及び填丘北辺

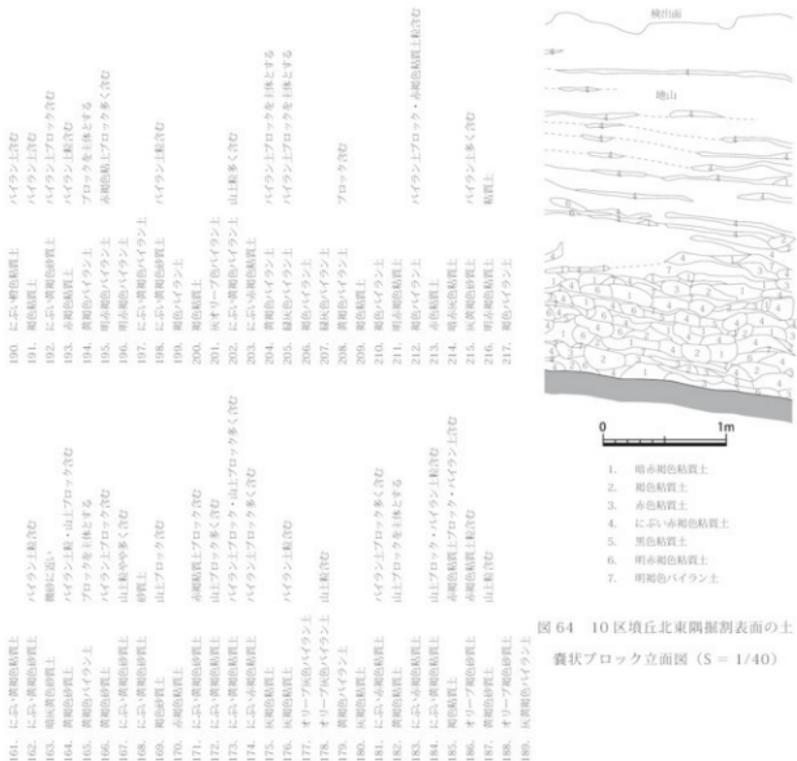


図64 10区填丘北東隅掘削面の土糞状ブロック立面図（S = 1/40）



図 65 10区平面図 (S = 1/100)

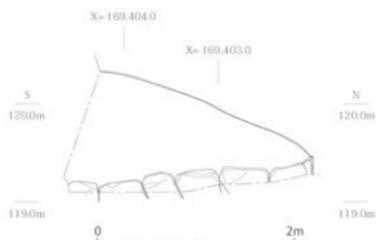


図 66 墳丘東辺立面図 (S = 1/50)

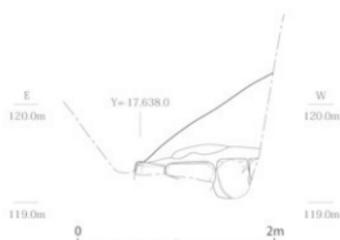


図 67 墳丘北辺立面図 (S = 1/50)

で 119.3m、墳丘東辺で墳丘北東隅から南に 2.4m の地点で 119.0m である。

③掘立柱建物

本調査区で検出したのは、9区で検出した掘立柱建物 (0907SB) の柱穴 2基である。

掘立柱建物 (0907SB) は、9区で述べた通り、東西 15.0m (5間)、南北 12.0m (4間) 以上の規模の東西棟で、柱間は桁行・梁間ともに 3.0m (10尺) である。本調査区で検出したのは、この2基のみであり、柱穴の深さは 0.3m と、残存状況が悪い (図 68)。柱穴は一辺 1.5m の隅丸方形であ

ることから、掘立柱建物(0907SB)が造られた時点の地表面は検出面より1mは高かったと考えられる。また、本調査区では、これらの柱穴以外に、掘立柱建物(0907SB)の柱穴は検出されていないことも加味すると、検出した柱穴は、北西隅柱とそれに隣接する北辺の側柱と考えられる。

3 出土遺物

土師器(85~89)、須恵器(90~94)、石(95)、土製品(96・97)、磚(98~104)が出土した(図69・70)。

土師器環C(85)は、口径10.8cmを測る。平底気味の底部から内彎して立ち上がり、丸くおさめた口縁端部に至る。器面調整は、外面が底部が無調整、口縁部は横ナデで、内面は一段放射暗文である。

土師器蓋(86)は、環Aの蓋と考えられ、口径21.8cmを測る。つまみは低く扁平で、口縁端部を若干肥厚させ、丸くおさめる。器面調整は、外面に7単位で1周の暗文を密に施文する以外は、内外面ともに横ナデである。

土師器壺(87)は、底部である。底径3.3cmを測り、平底の底部は中央が凹んでいる。器面調整は、外面が底部がナデ、胴部が弱い斜めヘラ削りで、内面は横ヘラ削りである。

土師器甕(88・89)は、口縁部のみ残存する。口径は88が28.0cm、89が24.8cmを測る。ともなで肩の胴部から大きく開き、面取りをした口縁端部に至る。口縁端部はわずかに内面を肥厚させる。器面調整は、88は頸部外面が縦ハケ目後横ナデする以外は、内外面ともに横ナデで、89は胴部内面を横ヘラナデする以外は内外面ともに横ナデである。

須恵器環B(90)は、口径15.2cmを測る。平底気味の底部から屈曲して直線的に開き、丸くおさめた口縁端部に至る。高台は底部外縁に貼り付ける。器面調整は、底部外面が回転ヘラ削りである以外は、内外面ともにロクロナデである。

須恵器蓋(91・92)は、環Bの蓋と考えられ、口径は91が11.6cm、92が14.2cmを測る。ともにつまみを欠失し、かえりは短く退化する。器面調整は共通し、天井部外面を回転ヘラ削りする以外は、内外面ともにロクロナデである。

須恵器平瓶(93)は、口縁部のみ残存で、口径8.6cmを測る直線的に開き、丸くおさめた口縁端部に至る。器面調整は、内外面ともにロクロナデである。

須恵器壺(94)は、底部のみの残存で、底径16.8cmを測る。平底の底部から緩やかに立ち上がり、胴最大径に至る。器面調整は、外面が底部から胴部下半が回転ヘラ削り、胴部中位がカキ目で、内面がロクロナデである。

石(95)は自然石で、縦1.8cm、横1.1cm、厚さ0.5cmを測る。白色を呈し、表面は滑らかである。藤原京跡で出土している碁石に類似することから、碁石の可能性がある。

土製品(96・97)は、形状不明の破片である。96は側面を面取り、内面に弧を描く平滑な面を持ち、内面に文様はない。器厚は4.5cmを測る。器面調整は、内外面及び側面ともにナデである。97は内面のみ残存で、内面に面を持つ。器面調整は、内面がナデである。96は内面が、97は内面側の一部が被熱のために色調が黒変している。この被熱の状況や、内面に弧を描く面を持つ形状から、鋳型

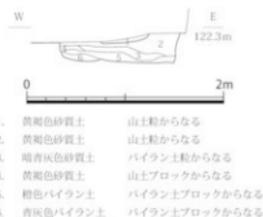
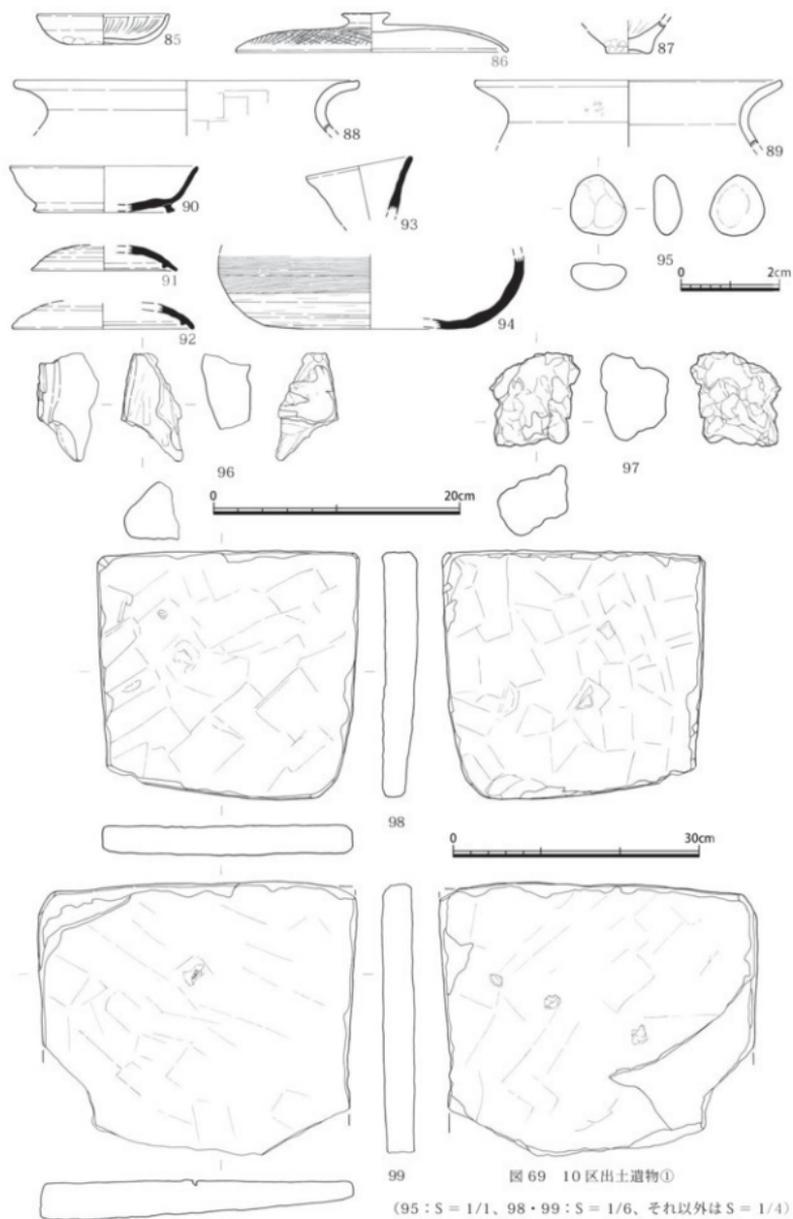


図68 10区柱穴(1002SP)土層図

(S = 1/50)



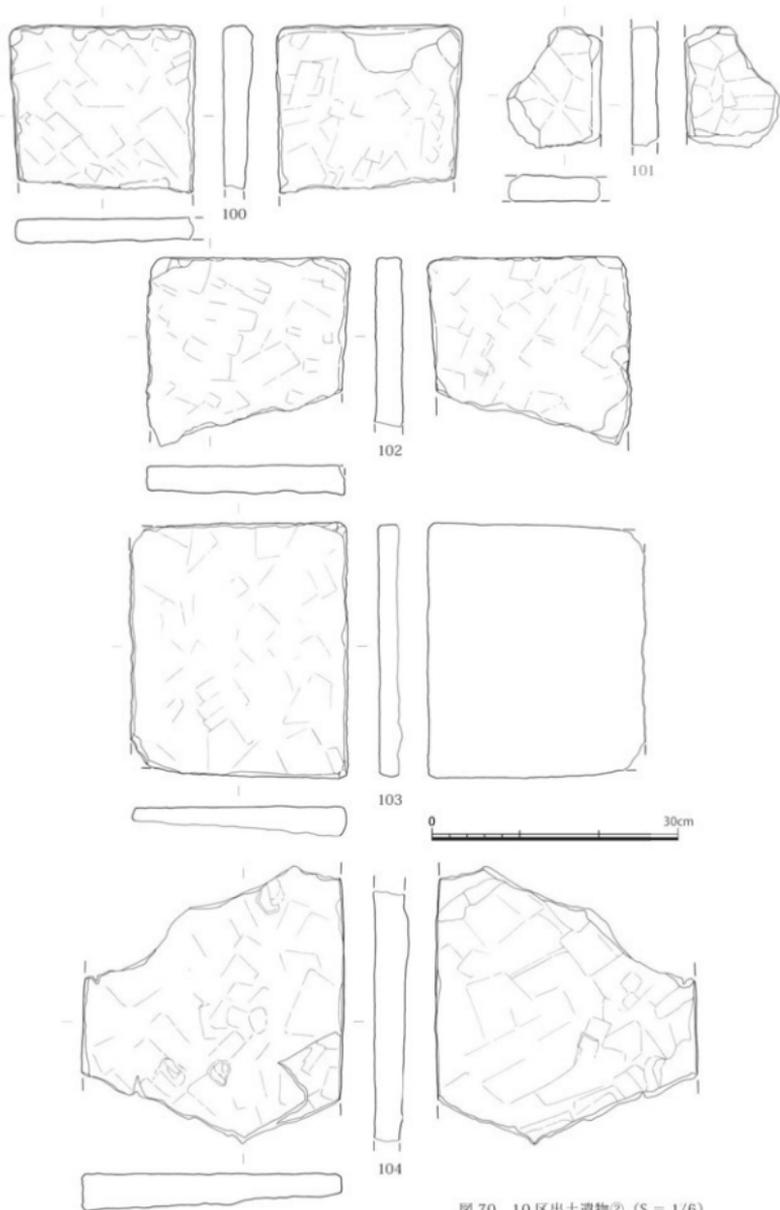


图 70 10 区出土遗物② (S = 1/6)

の可能性があるが、詳細は不明である。

碑(98～104)は、榛原石の割石である。98～100・102は三辺を残し、103は完形である。103を見る限り、本来の形状は正方形もしくはそれに近い方形と考えられ、一辺の大きさが明らかでない個体の大きさは、98が縦30.2cm、横31.1cm、厚さ4.0cm、99が縦32.9cm以上、横37.6cm、厚さ4.8cm、100が縦20.0cm以上、横22.0cm、厚さ2.9cm、102が縦23.3cm以上、横24.6cm、厚さ3.5cm、103が縦30.3cm、横25.8cm、厚さ3.5cm、104は縦33.5cm以上、横31.2cm、厚さ4.4cmを測り、横幅22～26cmで厚さ3.5cmまでの100・102・103、横幅約31cmで厚さ4.0～4.4cmの98・104、横幅37.6cmで厚さ4.8cmの99に分けることができる。碑は割石の側面を直線的に整えたもので、割石の表面は無調整である。

第11節 石室測量

2011年度調査の際に、石室内の測量調査を実施したので、その成果について述べる(図71・72)。

菖蒲池古墳の石室は、両袖式の横穴式石室で、玄室長7.2m、玄室幅2.5m、残存高2.3m、玄室の主軸はN-14°-Wである。玄門は、左袖は確認できるが、右袖は覆い屋のコンクリートに覆われて不明である。羨道は、天井石が全て失われているだけでなく、側壁も完全に埋没しているため、形態は不明である。

玄室は半加工の自然石を使用する。石室構成は、側壁が4石2段、奥壁が1石2段、天井石が4石だが、天井石のうち、最も南側の1石は既に失われているほか、2石は石鑿を使用し、割られている。玄室内は漆喰を厚く塗布し、石材の目地を埋めると同時に石材の表面を平滑に仕上げている。玄室は1段目が垂直に立ち上がり、2段目は奥壁が36°、側壁が20°持ち送られている。石室内には主に南側の開口部からの土砂の流入があり、南棺の棺身はほぼ埋没している。一方北棺は、棺身のおおよそ半分程度までしか埋没していない。石室の埋没状況に関し、上田三平による調査では、南棺で棺台が確認されているが、現在は棺台は確認できない。また、上田三平が棺台を確認した地点は部分的に土を掘られた又は盛った痕跡があることから、当時の調査は、一部の発掘を伴った可能性がある。

家形石棺は南北に2基が並んでいる。石棺は漆塗りで竜山石製の列り抜き式家形石棺でほぼ同規模である。身は幅1.45m、長さ2.52m、蓋の高さ約0.65mを測る。棺身の深さは南棺で約0.52mである。屋根は頂部に平坦面がある寄棟造り、身は梁や柱を浮き彫りする点で共通するが、南棺の方が北棺よりも精緻である。南棺では、蓋頂部の平坦面に幅広の溝が長軸に沿って彫り込まれるほか、身に表現された梁と土間居には長辺4個、短辺2個の横長の長方形の彫り込みがある。

漆塗りは北棺・南棺ともに内面のみとみられる。石棺内面の漆塗りを観察すると、北棺は赤い漆膜が残存していることから、朱漆が塗られたことが明らかだが、南棺は肉眼観察する限りにおいては黒色もしくは暗褐色を呈している。部分的には赤色を呈する部分があることから、赤漆を塗布していた可能性もあり、本来の色調は不明である。また、南棺の棺身の漆膜は厚さ1.3cmで層状を呈していることから、乾漆と考えられている。なお、南棺は石鑿によって割られ、蓋の南端部の1/4は欠失し、残った蓋も長軸方向に2つに割れている。北棺は、南辺に小さな盗掘孔が開けられている程度で、残存状況は良好である。

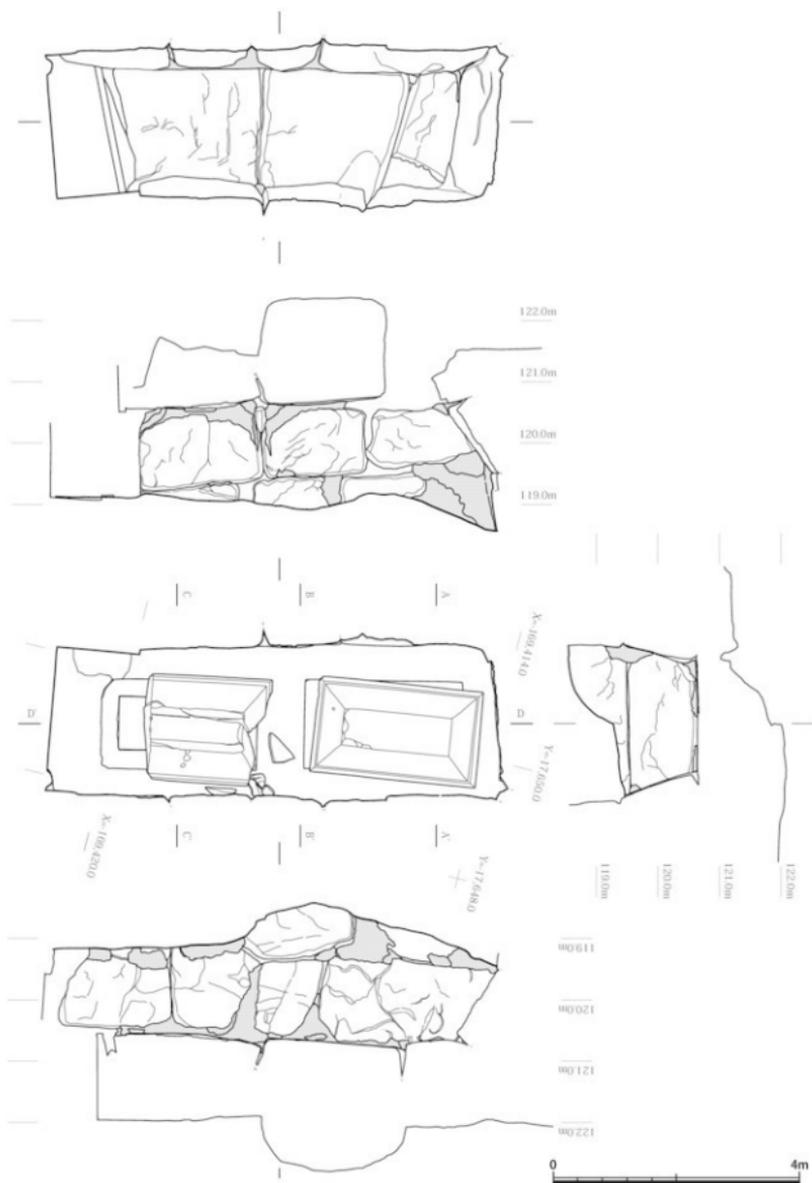


图 71 石室实测图 (S = 1/80)

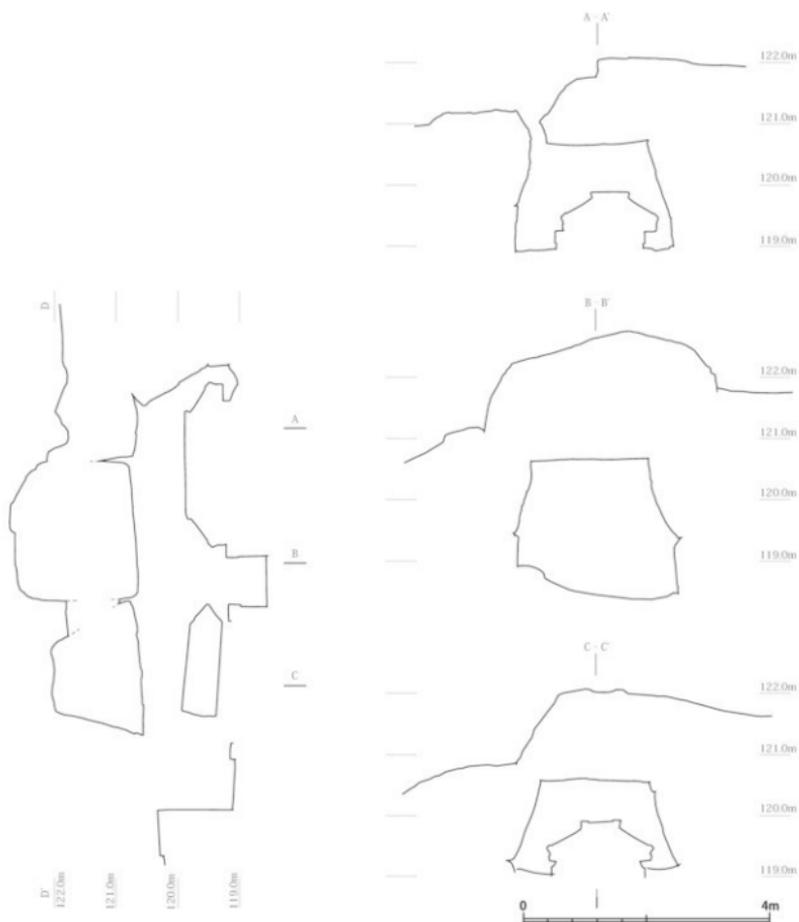


図 72 石室断面図 (S = 1/80)

棺内の状況は、北棺には水はなく、泥が乾燥したような状況を確認できる。一方、南棺には大量の水と泥がたまり、微生物も繁殖している。また棺内の水位も変動しているため、長年にわたる紫外線の影響と微生物や泥の付着に加えて、水位変化によって引き起こされる漆膜の乾燥・収縮と加湿・膨張の繰り返しによる漆膜の劣化及び石棺からの剥落が進行していると考えられる。この問題に対しては、奈良文化財研究所及び奈良県立橿原考古学研究所と対策を協議し、自動給水装置による純水の供給を行っているため、現在は棺内の水位は一定に保たれている。

なお石室内の標高は、玄室東壁付近の北棺と南棺の間が最低で、118.4mである。

第V章 総括

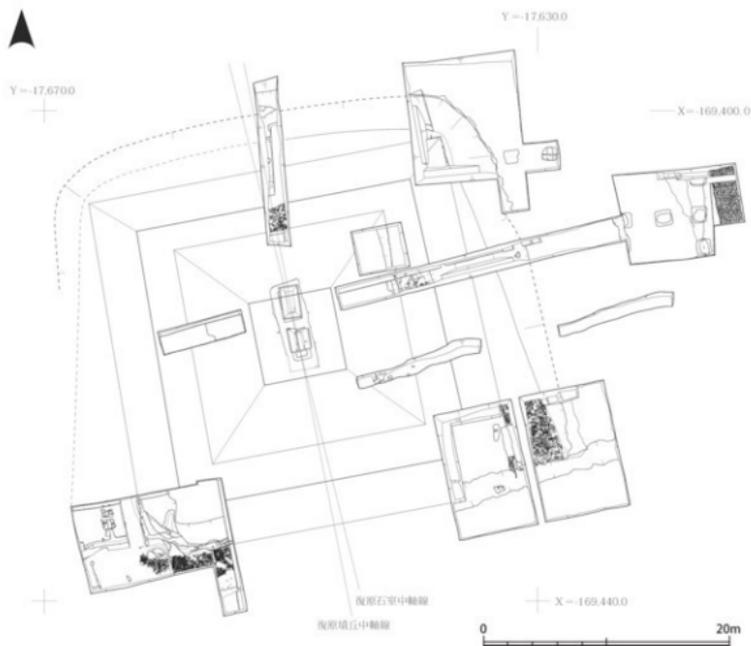
第1節 墳丘規模・形状

復原した菖蒲池古墳の墳丘は、下のようになる(図73)。

平面形は、墳丘規模が墳丘裾で南辺 30.6m、北辺 29.0m、南北 29.4m と、一辺 30m を志向するほぼ正方形の方墳で、二段築成と考えられる。墳丘主軸は $N - 11^{\circ} - W$ 、石室主軸は $N - 14^{\circ} - W$ と復原できる。主軸の違いは築造時の誤差の範囲と考えられるが、ここでは数値のみを記す。

上段墳丘の規模については、墳丘南辺の垂直二等分線を墳丘中軸線とし、上段墳丘裾の平面形が墳丘の形状とほぼ相似形と仮定すると、上段墳丘裾の規模は一辺 17.7m のほぼ正方形と考えられる。

上段墳丘裾平坦面については、上段墳丘裾平坦面の位置を北辺の位置と、東辺から中心線までの距離を基準に、その形状を復原する。墳丘南辺における上段墳丘裾平坦面の幅は、遺構の残存状況が非常に悪いため、発掘調査では、全く情報を得ることができない。そこで、東辺南端部における上段墳丘裾平坦面の幅の平坦面が墳丘南辺にもめぐると仮定すると、上段墳丘裾平坦面の幅は、北辺で 1.8m、南辺で 3.0m と復原できる。



振別は発掘調査時の検出ラインをつないだもの

図73 菖蒲池古墳墳丘復原図 (S = 1/400)

墳頂部については全く情報がないため、植山古墳などの復原案を参考にして、天井石の上面におおよそ2mの盛土があったと仮定し、発掘調査で明らかとなった墳丘の傾斜角及び標高値をもとに、一辺約6.8mのほぼ正方形の墳頂部を復原できる。

掘削底面は、北東・北西隅が狭く、東・西辺は南に向かって直線的に開く形状である。掘削底面の形状は、墳丘中軸線を軸に線対称であるとすれば、北辺が緩やかに弧を描き、墳丘東・西辺は幅0.2mの北端から、幅4.3mの南端にむけて直線的に開く形状が復原できる。掘削高について、北辺は山の南斜面をカットしているため不明瞭である。東辺は掘立柱建物の柱穴の規模から推測して、検出面（標高122.3m）よりも1mは高かったと考えられ、この場合、最も残存状況が良かった墳丘北東隅付近では掘削高3.0mを残していたことを考えれば、本来の掘削高は4m以上と考えられる。しかし築造時の掘削の規模や形状の復原は、古墳周辺の遺構や現地地形も含めた検討が必要となるため、第6節で述べることにし、ここでは、発掘調査時の検出ラインを結んだ掘削ラインを提示し、その形状を参考までに図示している。

古墳外表は、墳裾及び上段墳丘裾に1段で高さ0.2mの、石英閃緑岩を半加工した基底石が巡り、墳丘斜面は赤灰色系の粘質土によって化粧されていたこと、古墳前庭と掘削底面の一部及び上段墳丘裾平坦面には礫敷が敷設されていたことが明らかである。礫敷は正面視を重視し、古墳前庭は高い密度で、掘削底面は低い密度で礫敷を敷設し、墳丘北辺付近では礫敷を敷設しない。墳頂部の状況は想像する以外にないが、掘削内から出土した磚の中には墳丘側から投棄されたと考えられるものがあることから、墳頂部で磚が使用されていた可能性もある。

なお、掘削表面は、様々な色調の土を入れた土嚢を積んだ後、表面を削って中の土を表面に露出させて仕上げている。

古墳前庭については、4区の調査で整地層を確認していることから、調査区外の南へ延びる。

以上から菖蒲池古墳の墳丘を復原すると、下段一辺約30m、上段一辺約17.7mの二段築成の方墳で、墳高7.5m（下段3.2m、上段4.3m）で、墳丘の北・東・西には掘削が廻ると考えられる。また墳丘外表は、斜面は土、掘削底面の一部及び上段墳丘裾平坦面は礫敷、上・下段墳丘裾は1段の基底石で化粧し、古墳前庭は礫敷で、墳丘南側では検出範囲で南北幅5.2m以上となる。

第2節 築造方法

菖蒲池古墳の築造は、以下の通りである。

- ①丘陵の南斜面をカットし（背面カット）、掘削及び墳丘の築造に必要な平坦面を造成する。この工程では下段墳丘コアを残し、石室構築に必要な平坦面と掘削底面の平坦面を造成し、同時に掘削掘方を掘る。下段墳丘コアの形状と規模は、1・3区で検出した溝（0101・0302・0303SX）及び7区の土層断面（図40・41）から、南が開く隅丸の「コ」字形の平面形で、東西長23.6m、内面の東西長16.4m、南北幅28.4m、高さ2.0mの規模と考えられる。また、この段階で古墳前庭の造成も行っている可能性がある。
- ②下段墳丘部分の石室を構築する。
- ③石室を構築しながら上段墳丘コアと上段墳丘裾平坦面を盛土で築造する。上段墳丘コアの築造は外縁に土嚢を置き、内部を埋める手法をとる。なお、盛土は版築ではない。

④上段墳丘コアの表面を削り整形する。

⑤基底石の据え付け溝を掘り、基底石を設置する。

⑥掘削底面の化粧と墳丘斜面の化粧をする。この手順は、上・下段ともに共通する。墳丘裾平坦面の化粧は礫敷の敷設により完了する。墳丘斜面の化粧は、墳丘外表にあたる位置に土嚢を置き、裏込めの土を充填した後、土嚢の表面を削って整形し、土嚢の中の土を露出させて完了する。なお、掘削築造のタイミングは不明だが、以下の工程である。

I 掘削の仕上げ位置に沿って溝を掘り、その中に土嚢を置き並べる。

II 前面に土嚢を置いて裏込めの土を充填した後、土嚢の表面を削って整形し、土嚢の中の土を露出させて化粧とする。

下段墳丘斜面の築造方法については、下記の通りである。

i 下段墳丘コアの外側に盛土を行い、平坦面を造成する。盛土の厚さは0.3mである。この盛土により掘削及び古墳前庭の造成も完了する。この作業は、石室構築時の前に行われると考えられるが、石室構築に関する調査を行っていないため、今回は不確定である。

ii 下段墳丘コアの外側に版築をし墳丘コアの規模を大きくする。この墳丘コアは、上段墳丘コアと性質上同一である。版築の高さは0.5mで、墳丘の外表に向かってやや下がり、最も外表に近い位置では厚さ0.3mで、基底石の上面とほぼ同じ高さとなる。

iii 盛土により、版築よりも上部の墳丘を築造し、仕上げ前の下段墳丘を完成させる。

iv 仕上げ前の下段墳丘の表面を削り、完成時の墳丘斜面に近い傾斜角に整形する。

v 墳丘裾基底石据え付け穴（溝）を掘り、基底石を設置する。

vi 墳丘裾平坦面の化粧と墳丘斜面の化粧をする。なお、墳丘北辺では、墳丘裾平坦面には礫敷を敷設せず、削り出した地山がむき出しの状態では施工が完了する。

菖蒲池古墳の築造にあたり、技術的に重要な点は版築の採用と土嚢の多用である。版築により堅く突き固められた盛土による墳丘を造り、崩落しにくい墳丘を築造すると同時に、土嚢を多用して上段墳丘の第2次墳丘の構築や土で化粧された墳丘斜面を効率的に築造したと考えられる。

また、掘削の広さが北から南に広がっているが、この平面プランは現場合わせではなく、築造時に設計されていたことも重要である。掘削の北側を狭くすることで、労働力の削減を図りつつ、非常に奥行のある正面観を持った古墳であるという視覚的効果を生んだと考えられる。

なお、古墳築造に際して使用した石材を、奥田尚氏に石材を確認して頂いたところ、以下の推定される採石地について成果を得た。

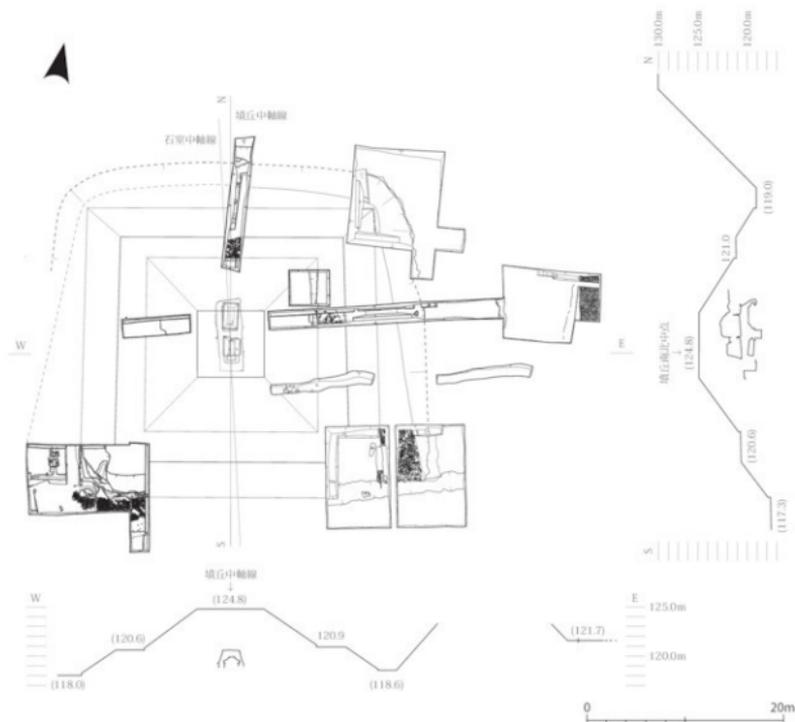
- ・基底石に使用されている石材は、石英閃緑岩で推定される採石地は明日香村細川谷である。
- ・礫敷には、アブライト、アブライト質黒雲母花崗岩、閃緑岩、中粒斑礫岩A、中粒斑礫岩B、細粒斑礫岩、変輝緑岩、流紋岩質溶結凝灰岩（通称、椽原石）がある。それぞれの推定採石地は、アブライトとアブライト質黒雲母花崗岩が高取川付近である。
- ・閃緑岩、中粒斑礫岩Aが明日香村真弓から高取町与楽にかけての産地に見られる事を基に、明日香村真弓から流れ出る川ないしは越智付近を流れる前川を採石地と推定できる。
- ・中粒斑礫岩Bが初瀬川を採石地と推定できる。
- ・変輝緑岩が飛鳥川や寺川、米川を採石地と推定できる。

- ・流紋岩質溶結凝灰岩が宇陀市大野付近を採石地と推定できる。

石材の使用傾向としては、初瀬川の細粒斑輝岩が全体の75%、残りの石材のうち20%を高取川のアプライト質黒雲母花崗岩を主体とする石材が占めることから、菖蒲池古墳では、礎敷敷設にあたり、初瀬川の石を中心に使用されたと結論づけられた。

菖蒲池古墳の使用石材については、発掘調査の日程上の都合により、全ての調査区において石材を確認していただいたわけではないものの、特に墳丘裾や上段墳丘裾平坦面の礎敷については、あわせて826個の石材を見ていただいた。したがって、石材使用の傾向に関する結果は、今後も大きくは変わらないと考えられる。

この成果をもとにすれば、菖蒲池古墳の築造においては、竜山石製の石棺以外は古墳周辺の石材を主体的に使用したと見て差し支えないといえよう。



掘別は発掘調査時の検出ラインをつないだもの

図 74 墳丘断面図 (数値は標高値。()は推定値。S = 1/500)

第3節 墳丘と石室の位置関係

古墳の築造年代を考えるうえで重要な視点に石室と墳丘の位置関係がある。白石太一郎は墳丘と石室との関係を分析し、7世紀前半の古墳では、石室床面を墳丘の基底部に置いているものが少なく、7世紀中葉を過ぎると墳丘の第1段の上面に石室床面を置く例が増えるとする（白石2009）。同時に、墳丘の中央に石室の奥壁を置く平面プランから、墳丘の中央に玄室の中心を置く平面プランへの変化を示している。菖蒲池古墳における墳丘と石室の関係を見ると、床面の高さは上段墳丘平坦面よりもはるかに低いことは明らかである。具体的に数値を示すと、下段墳丘裾の復原標高が117.3m、発掘調査で明らかになった南棺身の上面高119.15mから昭和2年作図の実測図を基に復原した棺身の高さ1.0mを引くと、想定される玄室床面は118.15mとなり、菖蒲池古墳の石室床面は墳丘裾を設置面として構築されていることが明らかである（図74）。

また、墳丘の中央と石室の奥壁の位置は合致せず、むしろ玄室中央付近の方が墳丘中央に位置する。このことから、墳丘と石室床面の関係からは7世紀でも前半の古墳の様相といえるが、墳丘と石室の平面的な位置関係からは、新しい要素も見える。これらの要素は、少なくとも菖蒲池古墳は、7世紀中頃でも古い、もしくは新しい年代の古墳ではないことを示すと考えられる。

さらに、石室床面の位置を判断できたことにより、石室規模の復原が可能となる。石室幅は不明だが、現在見ることができる左袖の幅は0.3mである。玄室は両袖式と考えられるため、この幅の袖が右側にもあるとすると羨道幅は復原で1.9mとなる。また、石室の設置面を墳丘裾とすれば、羨道長は復原で13mとなる。つまり、菖蒲池古墳の石室規模を復原すると、全長20m、羨道長12.8m、玄室長7.2m、玄室は幅2.5m、高さ3.5mで、4石2段、奥壁1石2段、天井石4石となる。石室の各部分の構成比は羨道長：玄室長：玄室高が16：9：4.5で、岩屋山古墳石室と近似する。

なお、石室天井石下面と上段墳丘裾平坦面の標高は、120～121mと近似する（図74）。この点は石室構築と墳丘築造の工程を示している可能性がある。

第4節 古墳及び周辺遺構の時期

菖蒲池古墳の時期は従来、石室形状から7世紀中頃の古墳とされてきた。石棺の形状は特殊であるため、年代決定の参考にはならない。そこでここでは、発掘調査で出土した遺物及び遺構の新旧関係などから改めて菖蒲池古墳と周辺遺構の年代を考える。

検討する遺物（図75）の出土遺構は、掘割埋土、版築、石組溝（0505SD）、掘立柱建物築造のための整地土である。遺構が造られた順を古→新の順に並べると、版築→掘割埋土・石組溝、墳丘・石敷→掘立柱建物（0907SB）の2系列の時間軸がある。そこで、版築・掘割埋土・石組溝・掘立柱建物（0907SB）の出土遺物の時期を明らかにし、菖蒲池古墳の築造年代及び遺構の変遷を明らかにする。

版築出土須恵器環（75）は、その形状から飛鳥Ⅰ～Ⅱ古段階に属するもの可能性があり、少なくとも版築の築造時期がこの時期以降であることを示す。

掘割埋土出土土器（3・74・86・90～92）の時期は、須恵器蓋（74）が飛鳥Ⅱでも新段階、その他は飛鳥Ⅲ～飛鳥Ⅴと考えられる。また、掘割出土土器で飛鳥Ⅴよりも新しい時期の遺物は確認されていないことから、掘割が埋められた時期は、飛鳥Ⅴを下限とする飛鳥Ⅲ～Ⅴの時期と考えられる。

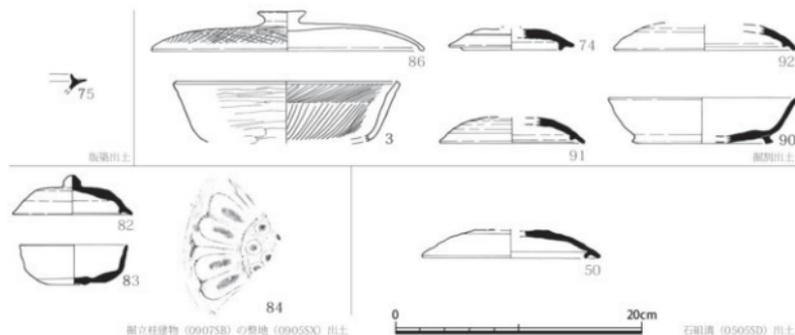


図 75 遺構出土土器の一部 (S = 1/4)

古墳に直接関わらない遺物としては、掘立柱建物 (0907SB) 建設時の盛土が重要である。この盛土は石敷 (0904SX) を埋めた土層でもあるため、掘立柱建物 (0907SB) だけでなく、石敷 (0904SX) の時期も示すからである。この土層から出土した遺物はわずかであるが、須恵器蓋 (82)・環 (83) が蓋のつまみの形状や口径の小ささから、飛鳥Ⅱ新段階であると考えられる。複弁八葉蓮華文軒丸瓦 (84) は、川原寺式に属する可能性があり、7世紀後半に属すると考えられる。これらから石敷 (0904SX) が飛鳥Ⅱ新段階以前の遺構である可能性と、掘立柱建物 (0907SB) が7世紀後半以降の遺構である可能性を指摘できる。また、石組溝 (0505SD) 出土須恵器蓋 (50) は、飛鳥Ⅳのものと考えられる。石組溝を施工するための整地層にも同時期の出土遺物があることから、石組溝 (0505SD) の時期は飛鳥Ⅳ以降と考えられる。

次に遺構の新旧関係を述べる。

古墳と掘立柱建物 (0907SB) は、直接的な新旧関係はないものの、図 76 にあるように墳丘を復原すると、両者は重複関係にあることが明らかである。しかし出土土器から両者の新旧関係を検討すると、少なくとも版築出土土器 (75) と、掘立柱建物建設時の整地層出土遺物 (82～84) には、明らかな前後関係があり、掘立柱建物 (0907SB) の方が古墳よりも新しい遺構であることは明らかである。つまり、掘立柱建物 (0907SB) は、古墳掘削を埋めて整地した後に造られた遺構であると考えられるのである。掘立柱建物 (0907SB) の主軸方位が主軸方位が $E-5^{\circ}-N$ と正方位に近いことも、この想定を補強するものと考えられよう。

古墳と石敷 (0904SX) との新旧関係をみる。両者は直接的には新旧関係がないため、遺構の状況から考える。石敷 (0904SX) が敷設されている整地層に着目すると、整地層は非常に層の単位が細かく、水平に近い角度で堆積する点と非常に堅く締まっている点が特徴である。この特徴は、下段墳丘で確認した版築と共通する。石敷 (0904SX) の整地層では版築の突き棒痕跡を確認できなかったため版築と断定はできないが、土層を見る限りではその可能性は否定できない。また遺構の主軸方位に注目すると、調査から割り出した墳丘中軸線の主軸と石敷 (0904SX) の主軸はともに $N-11^{\circ}-W$ で共通する。これは、墳丘と石敷 (0904SX) の造られた時期が同時期である可能性を示唆すると言える。出土遺物から想定される遺構の年代は、墳丘が飛鳥Ⅰ或いは飛鳥Ⅱ古段階～Ⅱ新段階、石敷 (0904SX) が飛鳥Ⅱ新段階以前である事も考えれば、2つの遺構は強い相関関係を持つと考え



図 76 古墳墳丘と掘立柱建物 (0907SB) の位置関係 (S = 1/500)

るのが自然であり、一体の遺構として認識する必要があるだろう。

飛鳥時代の土器の年代観については、飛鳥・藤原地域出土土器を基にした研究の蓄積がある（西1978・1982他）。これを参考にすると、飛鳥Ⅰの下限の時期については、飛鳥Ⅱ古段階の坂田寺SG100を根拠に640年代までとされる。また、飛鳥Ⅱ新段階については、標識資料が飛鳥水落遺跡基壇付近より出土した土器となっている。これを踏まえた飛鳥Ⅱ新段階の実年代は660年代とされる。また、飛鳥Ⅳの下限は藤原京遷都（694）まで、飛鳥Ⅴは藤原宮期（710まで）とされる。これらを参考にすれば菖蒲池古墳及び石敷(0904SX)が築造された時期は、640年代～660年代までの間、掘割の埋め立て及び掘立柱建物（0907SB）の建築が藤原宮期と想定できよう。

前節で記した墳丘と石室の位置関係から推測される古墳築造の年代観も、出土土器から想定した築造年代と乖離しないと考えられることから、菖蒲池古墳築造の年代は7世紀半ばと想定できる。

第5節 古墳の周辺

菖蒲池古墳の調査では、土器の他に、漆壺や輪の羽口、鉄鐙の他に鋳型と思われる遺物が出土している。これらの遺物は、いずれも掘割埋土からの出土であり、また、出土層位の共通性もないことから、古墳と直接的な関係はないと考えられ、掘立柱建物(0907SB)との関連性も積極的に見出し難い(図76)。しかし、これらの遺物は工房遺跡から出土する遺物と共通していることから、古墳の近辺に工房があった可能性を想定できる。しかし古墳との前後関係は不明確でない。

この中で漆壺をとりあげると、土器の年代観は判然としえないものの、少なくとも菖蒲池古墳では、石棺内に漆を塗布する際に、大量の漆を必要とした筈である。漆塗り石棺をどこで完成させたのかは不明だが、古墳の周辺で完成させていた可能性も想定できる点は重要である。

この他、注目したいのが磚である。調査では、磚敷の遺構は検出されなかったものの、完形品を含めて一定量の磚が出土したことは重要である。特に磚の出土状況に注目すると、完形の磚の中には、墳丘側から投棄されたと考えられる出土状況を示すものがある。菖蒲池古墳の墳丘のうち、築造当時の状況が全くわからない箇所は、墳頂部のみである。仮に菖蒲池古墳の墳丘で磚が使用されていたとすれば、あくまでも推測の域を出ないものの、墳頂部で使用されていたのかもしれない。その一方で磚の破片の中には掘割外から投棄されたものもあることから、菖蒲池古墳の周辺で使用された磚の一部が投棄された可能性もある。近隣の既述調査では、遺跡に隣接する奈良県立明日香養護学校内において、磚が出土したとの報告がある。この磚の由来は不明だが、その一部が投棄された可能性もある。

さらに、掘立柱建物（0907SB）の性格を明らかにするうえで参考になるのが上記の奈良県立明日香養護学校内の調査である。この調査では、「巨波国」荷札木簡が出土しており、藤原宮期に当該地に公的施設があった可能性を示唆している。この状況から、周辺にも関連施設が存在したと仮定すると掘立柱建物（0907SB）は、公的施設の一部である可能性を想定できる。

第6節 まとめ

以上のように、菖蒲池古墳の調査では、古墳の墳形・形状だけでなく、年代観や遺構の変遷、関連遺構まで明らかとなった。これらの成果をまとめて菖蒲池古墳の意義づけとしたい。

前節までで明らかになった点のうち、菖蒲池古墳築造時の姿を復原する上で最も重要な点は、菖蒲池古墳が石敷（0904SX）を付属施設として伴っている点である。この成果と現地形を基に菖蒲池古墳の復原をした（図77）。

まず、築造時の背面カットの位置について検討する。2区で検出した掘割を参考にすると、これまで菖蒲池古墳の背面カットと考えられていた石室北側に東西に延びる急斜面は想定通り、古墳築造時の背面カットであると考えられる。現地形の傾斜変換点を参考にすればその最高地点は、古墳北辺では標高130.0mであり、掘割底面（推定標高119.0m）からは高さ11.0mとなる。東辺掘割については、9・10区における調査成果から、藤原宮期には少なくとも標高123.3mの地点までは掘割があった可能性が極めて高い。この標高値と1区における東掘割の傾斜角41°を基に東辺掘割の位置を割り出すと、高さ4.7m以上の掘割を復原できる。西辺掘割については、地形改変による削平が著しいため地形から復原することは不可能である。しかし図2を参考にすると、もともとは古墳の西側にも南に舌状に張り出す丘陵が存在していることから、西辺掘割があった可能性は高い。この想定は南斜面を削り出し、南に開けた場所に古墳の築造するという終末期古墳の立地上の特徴とも矛盾しない。そこで、墳丘中軸線を軸に東西対称の位置に西辺掘割を復原する。

石敷（0904SX）を検出した南北に延びる東斜面を観察すると、石敷（0904SX）を検出した地点の地形は、南北に広い緩斜面が広がっている。地形的な特徴からはこの緩斜面が石敷の範囲である可能性があり、全体の形状としては、東斜面の一部に石敷を敷設した平坦面が取り付いた形状を想定できる。墳丘裾の標高も参考にすれば、この東斜面の裾は標高118m程度と考えられる。墳丘に隣接して掘割と一体的に造られた、石敷（0904SX）を伴った南北に延びる段状の高まりを想定すると、この高まりは出土遺物の検討から古墳関連遺構であると考えられ、その性質は菖蒲池古墳の東辺外堤が最も可能性が高いと考えられる。この東辺外堤については、本来の高さは不明であるが、少なくとも墳頂（推定標高124.8m）よりも高い位置に頂部があったとは考え難い。西辺外堤については、図2をみる限りでは、墳丘西側の南に張り出した舌状の地形がその候補となる。しかし現況では、既に削平されて痕跡すら残っていないため、検証することすらできず、古墳西側の外堤の存在については、存在した可能性は否定できないという程度にとどめたい。

さらに現地形から、東辺外堤を想定した範囲の北側にも、直角に曲がる平坦面と、その背面のカット面が存在する。これらは後世の畑のものである可能性もあるが、古墳に付随するものである可能性も否定できず、この場合は、古墳背面にも段状の施設が設けられていたと考えられる。

古墳前庭については、4・5区の調査成果と地形の傾斜の関係を考える。4区で古墳前庭を検出した地点の傾斜は、想定される墳丘南辺の南側の全面に広がっていることから、現況では墳丘南側の標高115.5mの地点までが少なくとも古墳前庭の範囲と想定できる。しかし、植山古墳や忍坂段ノ塚古墳（舒明陵）も参考にすれば、前庭部は相当広いことから、本来は現在、宅地である地点まで続いていたと考えられる。

以上、現地形を参考にしつつ掘割、外堤及び墳丘背面、古墳前庭の復原を行った。これをまとめると、菖蒲池古墳の墓域は、南北約82m、東西は西側外堤を想定しない場合で、墳丘南辺ラインで約67m、想定した場合で約90mとなる。各地点の詳細は、北側掘割の最高地点が130.0mで高さ11.0m、前庭南北幅16.0m、東辺外堤の最高地点が墳丘南北中軸線付近で標高123.3mで、頂部幅12m、高さ7.3m（下段3.7m、上段1.6m）、奥行60.2mとなる。この復原案を現況地形と擦り合わ

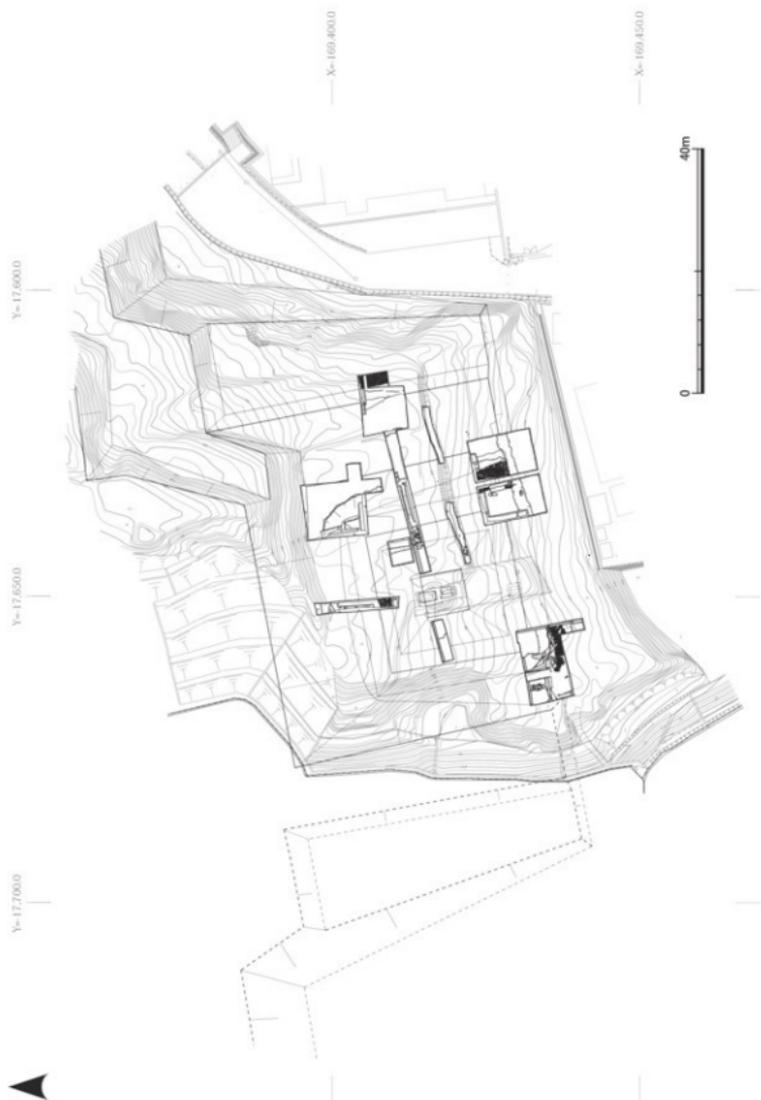


图 77 復原した墓域と現地形 (S = 1/800)

せると、東は道路、南と西側は宅地により囲まれ、北は直角に折れる平坦面が収束する、標高 130.0 ～ 132.0m までの尾根を含む範囲の山林が菖蒲池古墳の墓域となると考えられる。

このように菖蒲池古墳は、墳丘自体は一辺 30m と当該期の古墳としてはごく一般的な古墳といえるが、付属施設を含めると東西 67 ～ 90 m、南北 82m という墓域の規模は、7 世紀中頃の古墳としては破格の規模といえ、その装飾だけでなく、他の古墳では類を見ない優美な家形石棺とともに、菖蒲池古墳の周辺古墳との隔絶性と被葬者の地位の高さを示すといえる。

終末期古墳で外堤を確認されている例は、奈良県の石舞台古墳と堺解黄金塚古墳、大阪府の塚六古墳があるものの、石舞台古墳や塚六古墳は古墳の年代観だけでなく、外堤と墳丘の関係が菖蒲池古墳とは異なる。堺解黄金塚古墳は、菖蒲池古墳とほぼ同時期と考えられるものの、外堤は掘削底面からの立ち上がりの一部が確認されているに過ぎず、特に外底外側の状況は不明である。また、そもそも終末期古墳における発掘調査は、墳丘部分の調査が中心であった事を考えれば、菖蒲池古墳の調査は、今後の終末期古墳の調査に新たな視点を提示したといえる。

次に古墳の立地を確認すると、植山古墳をはじめ、菖蒲池古墳や五条野宮ヶ原 1・2 号墳といった古墳がいずれも方墳であることから、蘇我氏の墓域である可能性が想定され、時代を経るにしたがって古墳が北西から南東に移動することが明らかとなっている（竹田 2001）。被葬者が蘇我氏の一族であったかはさておき、同一氏族の墓と考えられている古墳が飛鳥の宮殿へ至る道路に而して幾つも築造され、その 1 つ、菖蒲池古墳が最終的には飛鳥の入口にあたる地点に造られた事実、そしてその古墳が非常に荘厳化された古墳であった事実は、極めて重要である。飛鳥時代の阿倍山田道における蘇我氏系寺院の配置をみると、阿倍山田道に沿って石川庵寺や和田庵寺といった寺が造られ、飛鳥のまさに入口に豊浦寺や山田寺が置かれる。つまり飛鳥周辺における蘇我氏系寺院の配置は、菖蒲池古墳と飛鳥との位置的関係と共通するのである。飛鳥周辺における古墳の配置について類例をみると、梅山古墳・カナツカ古墳・野口ノ大墓古墳（天武・持統天皇陵）がこれにあたる。しかし、これらの古墳が築造されるのは、天皇陵が集中する地域であり、飛鳥へ入る際の道路沿いではない点で菖蒲池古墳とは異なる。つまり古墳の立地の点からも、菖蒲池古墳の造墓氏族の権力の大きさが裏付けられると考えられる。

このように、築造時には特別な場所に立地し、破格の規模を誇った菖蒲池古墳は築造後、長くても半世紀の後は埋め戻され、その姿を失う。跡地には、藤原宮期の掘立柱建物が発見され、役所の一部となってしまったと考えられる。その理由については明らかにできなかったが、少なくとも菖蒲池古墳の周辺においては、五条野内垣内・向イ遺跡のように藤原宮期まで邸宅や公的機関として機能する施設があったことが明らかとなっている。このことは藤原京遷都後もこの地域が国家的ではないにせよ、政治的機能を有していたことを示している。菖蒲池古墳の東側では、前述のように「旦波国」木簡が出土していることから、土地利用の方法が時代の要請とともに変わったものといえよう。古墳に対する認識の変化は、明らかにすることができないので、ここでは述べない。

菖蒲池古墳の価値をまとめると、単に当時としては破格の規模の古墳でというだけでなく、日本が律令制を目指す段階における飛鳥周辺の空間認識や、墳墓に対する認識とその変化を解明するうえで、また、氏族の勢力を含めた飛鳥時代史を研究するうえで欠かせない遺跡である点にこそ、その重要性が認められるのである。また学術的には、これまでの終末期古墳の研究に対し、墳丘外の調査の重要性を指摘し、今後の発掘調査の視点として、古墳付属施設の存在を前提とした調査の必要性を明確にし

た点で重要な調査となった。

今後の課題として、外堤と想定した墳丘東側の斜面地の調査や、石室の規模・形状、墳丘主軸と石室主軸との違いの関連性の確認といった菖蒲池古墳自体の解明にとどまらず、終末期古墳研究の中へのさらなる意義づけと飛鳥時代史との関わりが明確になることが必要である。また、遺跡保護の観点からは石棺の保存が大きな課題であり、菖蒲池古墳を取り巻く課題は多岐に及ぶ。学術的にも非常に価値の高い古墳であることが明らかとなった今、菖蒲池古墳全体の保存・整備を図り、後世に伝えていく必要がある。

参考文献

- 上田三平 1927「菖蒲池古墳」『奈良縣に於ける指定史蹟 第1冊』
- 西 弘海 1978「七世紀の上層の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮遺跡調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所
- 西 弘海 1982「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』小林行雄博士古希記念論文集刊行委員会
- 河上邦彦 1995『後・終末期古墳の研究』雄山閣
- 白石太一郎 1999「終末期横穴式石室の型式編年と暦年代」『考古学雑誌』第85巻第1号
- 竹田政敏 2001「五条野古墳群の形成とその被葬者についての推説」『橿原考古学研究所紀要 考古学論叢』第24冊
- 河上邦彦 2005「菖蒲池古墳の石室の系譜」『大和の終末期古墳』学生社
- 羽曳野市教育委員会 2007『古市遺跡群XXIII 羽曳野市埋蔵文化財調査報告書58』
- 林部 均 2008「第4章 遺物」『飛鳥京跡Ⅲ 奈良県立橿原考古学研究所調査報告第102冊』奈良県立橿原考古学研究所
- 白石太一郎 2009「古墳の墳丘における横穴式石室の位置について」『奈良部紀要 第61号（墳墓編）』宮内庁書陵部
- 安井宣也 2010「帯解黄金塚古墳第2次調査」『奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会年報-平成21年度-』奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会
- 小田裕樹 2012「食器構成からみた『律令的土器様式』の成立」『文化財論叢Ⅳ』奈良文化財研究所

報 告 書 抄 録

ふりがな	しょうぶいけこふん							
書名	菖蒲池古墳							
副書名								
巻次								
シリーズ名	橿原市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第10冊							
著作者名	橿原市教育委員会 松井一兎・石坂泰士							
編集機関	橿原市教育委員会事務局 生涯学習部 文化財課							
所在地	〒634-0075 奈良県橿原市川西町858番1号 TEL 0744-47-1315 FAX 0744-26-1114							
発行年月日	西暦2015年1月31日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
菖蒲池古墳	奈良県 橿原市 菖蒲町地内	29205	14C548	34° 28' 21"	135° 48' 28"	2010/1/14 ～ 2013/3/15 (4次)	553.7 ㎡	範囲 確認 調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
菖蒲池古墳	古墳	飛鳥時代 中世		古墳墳丘、石室、掘削、石敷遺構、石組溝、溝、落ち込み、掘立柱建物 素掘溝、溝		土師器、須臾器、瓦、土製品、鉄滓、石、磚 土師器、瓦器、磁器		
要約	<p>墳丘とその外表施設や、掘削を検出した。また古墳外においても石敷遺構や掘立柱建物を検出した。出土遺物や復原した古墳の形状から、菖蒲池古墳は、7世紀中頃に築造された一辺30mの二段築成の方墳であることが明らかとなった。古墳外から出土した石敷は古墳の外堤と考えられ、また、背面カットの高さは11mにも達し、これらの付属施設を含めると古墳の復原規模は、東西67～90m、南北82mに及ぶ。この規模は終末期古墳としては破格で、立地からも被葬者の権力の大きさを窺い知ることができる。一方で菖蒲池古墳は、藤原宮期にはその姿を失っていることが明らかとなった。終末期古墳の研究に付属施設を想定する必要性を示した点においても、飛鳥時代における古墳に対する認識の変化を解明するうえでも重要な古墳である。</p>							



葛蒲池古墳遠景（南西から）



石室残存状況（西から）



石室内の家形石棺（南から）



背面カットとされていた地形（西から）



1区 上層遺構（素掘溝）完掘状況（西から）



1区 下層遺構検出状況（東から）



1区 上段墳丘検出状況（平坦面は未完掘。南東から）



1区 上段墳丘裾基底石検出状況（東から）



1区 上段墳丘裾平坦面と基底石検出状況（東から）



1区 上段墳丘と北壁土層（南東から）



1区 墳丘及び掘割の残存状況（掘割底面は未検出。南東から）



1区 掘立柱建物（0907SB）と墳丘の位置関係（東から）



2区 上段填丘裾平坦面及び基底石検出状況（北西から）



2区 上段填丘裾平坦面及び基底石検出状況（北から）



2区 墳丘及び掘割の残存状況（掘割底面は未検出。北から）



2区 上段墳丘裾の残存状況（北西から）



3区 完掘状況（下層遺構は検出のみ。東から）



4区 墳丘裾とその南側の整地（南から）



4区 墳丘裾と石室（南西から）



5区 調査前風景（南西から）



5区 上層遺構検出状況（西から）



5区 石組溝 (0505SD) 検出状況 (北から)



5区 石組溝 (0505SD) 完掘状況 (北から)



5区 上層遺構完掘状況（南西から）



5区 上層遺構完掘状況（南東から）



5区 墳丘南西隅完掘状況（北東から）



5区 墳丘南西隅完掘状況（南西か5）



5区 墳丘南西隅完掘状況（南東から）



5区 墳丘南西隅の残存状況（南から）



5区 墳丘南西隅基底石と礎敷（南西から）



5区 墳丘南西隅の地滑り痕跡（南東から）



5区 墳丘南西隅の地滑り痕跡（北西から）



5区 北壁に残る地滑り痕跡（南から）



5区 西壁に残る地滑り痕跡（北東から）



6区 上段墳丘検出状況（北東から）



6区 上段墳丘横出状況（北から）



6区 上段墳丘裾基底石横出状況（東から）



7区 調査前風景（東から）



7区 上層遺構完掘状況（南東から）



7区 墳丘東辺の掘削検出状況（南から）



7区 墳丘及び掘削完掘状況（南東から）



7区 墳丘東辺の掘削（南から）



7区 掘削内の南北土層（東から）



7区 掘削底面の礎敷と墳丘裾基底石（北から）



7区 掘削底面の礎敷（部分。南から）



7区 墳丘南東隅残存状況（南東から）



7区 墳丘南東隅残存状況（南から）



7区 墳丘基底石と掘削底面の礎散（東上方から）



7区 北壁にみる墳丘埋没過程（南から）



7区 埴丘裾基底石抜き取り穴検出状況（南から）



7区 抜き取り穴に残る基底石の表面（東から）



7区 北壁断ち割り状況（南東から）



7区 北壁にみる墳丘築造過程（南から）



7区 北壁にみる填丘築造過程（南東から）



7区 北壁にみる填丘築造過程（南西から）



7区 北壁にみる填丘築造過程（填丘コアと整地。南から）



7区 西壁土層（南東から）



7区 調査区北西隅の墳丘断面（北西から）



7区 版築検出状況（真上から）



7区 西壁にみる版築（東から）



8区 西側調査区完掘状況（南西から）



8区 東側調査区完掘状況（南東から）



9・10区 調査前風景（東から）



9区 上層遺構検出状況（西から）



9区 整地土検出状況（北から）



9区 石散（09045X）完備状況（北から）



9区 石敷(0904SX)と掘割・掘立柱建物(0907SB)(東から)



9区 石敷 (0904SX) の玉石散 (南から)



9区 石敷 (0904SX) 緑石上面の叩き痕 (西から)



9区 北壁土層（南東から）



9区 掘立柱建物（0907SB）柱穴（0902SP）と整地土（北から）



9区 柱穴 (0104SP) 土層 (南から)



10区 掘立柱建物 (0907SB) 柱穴 (1001・1002SP) 検出状況 (東から)



10区 柱穴(1002SP)土層(南から)



10区 掘削検出状況(西から)



10区 掘割検出状況（北東から）



10区 墳丘北東隅完掘状況（北東から）



10区 墳丘北東隅完掘状況（南西から）



10区 墳丘北東隅完掘状況（南から）



10区 墳丘北東隅完掘状況（東から）



10区 墳丘北東隅（北辺。北から）



10区 墳丘北東隅（東辺。東から）



10区 基底石掘方と基底石の据え付け（北から）



10区 掘削設定の溝（1004SD）検出状況（南から）



10区 溝（1004SD）内の粘質土ブロック検出状況（南から）



10区 溝(1004SD)完掘状況(南から)



10区 溝(1004SD)完掘状況(東から)



10区 墳丘北東隅の掘削表面（南西から）



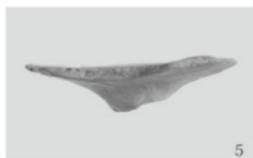
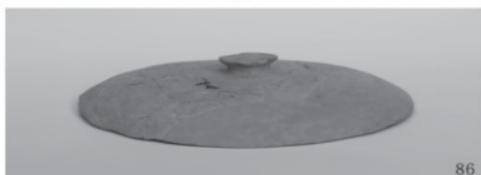
10区 南壁土層（北から）



10区 西壁土層（東から）



10区 窟窿状土層表面の水洗による検出状況（北から）



出土地点（掘削以外の遺物のみ）
5：1区素掘溝
41：5区藤原宮期整地土



出土地点（掘削以外の遺物のみ）

50：5区石組溝（0505SD）

43・53：5区藤原宮期整地土

59：5区耕作土

82・83：9区石敷（0904SX）直土



49



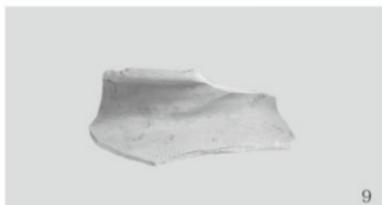
51



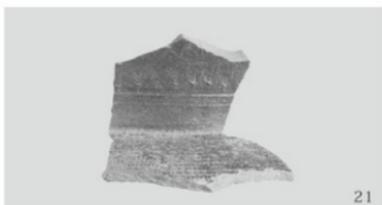
74



92



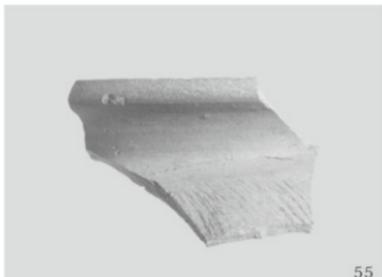
9



21



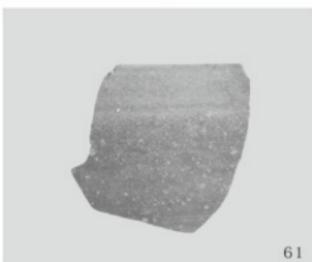
52



55



34



61



75



77



95

出土地点（掘削以外の遺物のみ）

34：4区基底石抜き取り穴

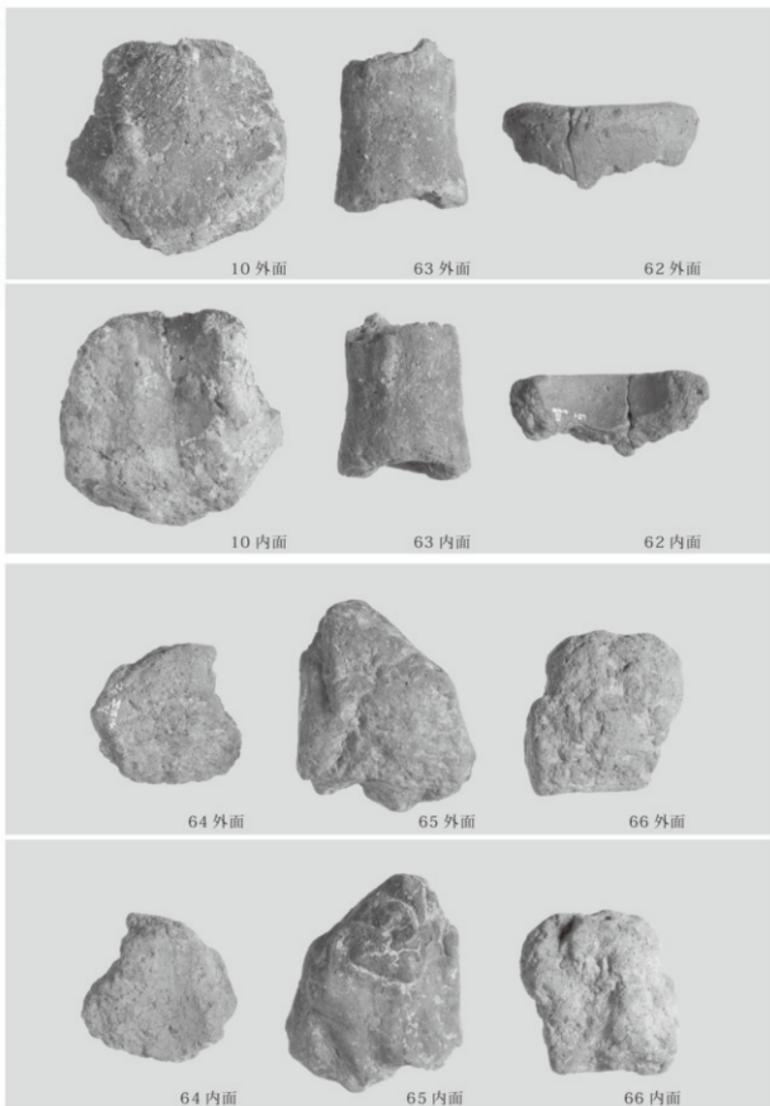
49・55・61：5区耕作土

51：5区上層道構（0501SD）

52：5区上層道構（0502SD）

75：7区墳丘内（版築）

77：7区墳丘内（化粧土）



出土地点（掘削以外の遺物のみ）

62：5区断ち割り

63：5区上層遺構（0502SD）

64～66：5区藤原宮期整地土



26



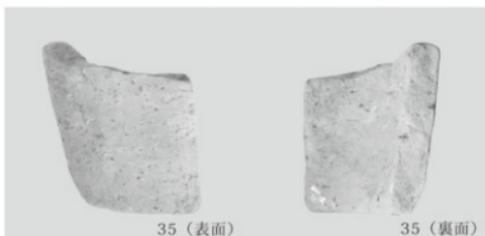
28



30



31

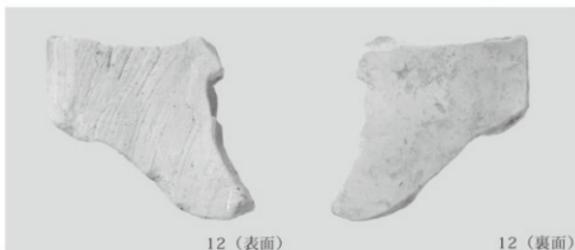


35 (表面)

35 (裏面)

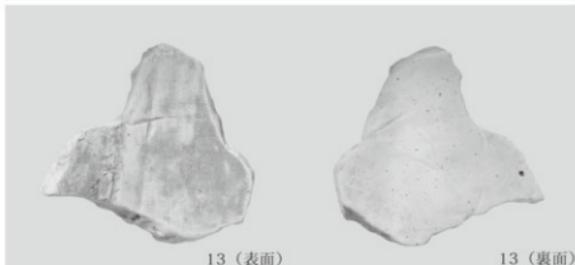


84



12 (表面)

12 (裏面)



13 (表面)

13 (裏面)

出土地点
 (掘削以外の遺物のみ)
 35: 4区基底石
 抜き取り穴
 84: 9区石敷 (0904SX)
 の埋土



14



67

出土地点（掘削以外の遺物のみ） 67：5区上層遺構（0501SD）



出土地点（掘削以外の遺物のみ） 69・70：5区墳丘南西隅初期流出土



79



98



99 (A面)



99 (B面)



100



102



103



104

橿原市埋蔵文化財調査報告 第10冊

菖蒲池古墳

発行年月日 平成27(2015)年1月31日

編集・発行 橿原市教育委員会

印刷 株式会社 明新社

奈良市南京終町3丁目464番地